

平成 30 年度

和歌山信愛女子短期大学
自己点検・評価報告書

令和 1 年 6 月

目次

自己点検・評価報告書

学科

1. 保育科 自己点検・評価報告書
2. 生活文化学科 自己点検・評価報告書

各部・委員会・センター等

1. 教務部(教務委員会) 自己点検・評価報告書
2. 学生部(学生委員会) 自己点検・評価報告書
3. 入試部(入試委員会) 自己点検・評価報告書
4. 宗教部 自己点検・評価報告書
5. 事務部 自己点検・評価報告書
6. 図書館 自己点検・評価報告書
7. キャリアセンター 自己点検・評価報告書

FD活動 自己点検・評価報告書

1. 平成30年度FD活動実績
2. 授業相互参観報告書
3. FD実践報告書

自己点検・評価報告書

この自己点検・評価報告書は、和歌山信愛女子短期大学の自己点検・評価活動の結果を記したものである。

令和1年6月26日

理事長

森田 登志子

学 長

森田 登志子

ALO

西出 充徳

学 科

学科・専攻・部・委員会・センター等

保育科

今年度の改善目標

- ・ 学科の将来構想を踏まえた教職課程、保育士養成課程の見直しを推進する。
- ・ 新しい教育課程を理解し、教授内容方法の改善を試みる。
- ・ 学生理解を深める。常に学生との対話を心掛け、一人ひとりの生活環境や考えを把握した上で適切な指導に努め、学生との信頼関係を構築する。
- ・ 教員間の協力や連携を重視し、互いの信頼関係を深め学生指導にあたる。教科書を十分に活用する。

実施内容

以下の内容を保育科で審議し、実施した。

学科会議議事録より

○ 平成 30 年度第 1 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 4 月 2 日(水)16:30～

場所:美術室

議題

- 1) 新 2 年生に対するアンケート調査のまとめについて
- 2)その他
 - ・ 非常勤の先生方の紹介について

報告

- 1) 新入生に関して

○ 平成 30 年度第2回保育科科内会議

日時:平成 30 年 4 月 11 日(水)17:45～19:40

場所:美術室

議案

- 1) 入試広報委員会より
 - ・ 5 月 12 日(土)オープンキャンパス役割分担について
 - ・ オープンキャンパスミニ講座年間担当計画について
- 2) 就学資金貸し付け等について
 - ・ 県保育士修学資金貸付けについて
 - ・ 生命保険協会奨学金について
- 3) 子育て広場担当者について
- 4) ボランティア引率について

5) 学術編集委員の選出について

6) 学外研修について

- ・ スケジュールについて
- ・ 費用について
- ・ 公用車の使用について
- ・ しおり印刷について

7) ゼミ活動使用教室について

報告

1) 学生指導

2) 実習に関して

3) その他

- ・ 学生指導の充実について

○ 平成 30 年度第 3 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 4 月 27 日(金)16:10~18:00

場所:美術室

議案

1) 学外研修の反省

2) 再課程認定における科目調整について

3) 保育科の変更点(6 月オープンキャンパスに向けて)

4) 入試委員より

- ・ 保育科アドミッションポリシーについて
- ・ OC の事前オリエンテーションの共有

5) その他

- ・ 保育科独自満足度アンケート結果について
- ・ 科目の開講、未開講について

○ 平成 30 年度第 4 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 5 月 16 日(水)学術研究会終了後

場所:美術室

議案

1) 入試委員会関係

- ・ 6 月オープンキャンパスについて
- ・ AO 入試チェックリスト・評価シートについて

2) ボランティア引率について

3) 卒研Ⅱの指導教員グループリーダーについて

4) 保育士養成課程選択必修について

報告

- 1) 実習関係について
- 2) 学生の状況について
- 3) 自己点検について
- 4) 現場体験引率について

○ 平成 30 年度第5回保育科科内会議

日時:平成 30 年 5 月 30 日(水)17:15～19:15

場所:美術室

議題

- 1) 保育科の今後について
 - ・ 音楽学習発表会について
 - ・ 卒業研究発表会について
 - ・ ボランティア論の在り方について

2)その他

- ・ 入試・募集関連
- ・ 近大新宮高校の件について
- ・ 子育て広場の募集の仕方について
- ・ ライフワーク講演会について

報告

- 1) 学生の状況

○ 平成 30 年度第6回保育科科内会議

日時:平成 30 年 6 月 13 日(水)16:40～19:00

場所:美術室

議題

- 1) 入試委員会より
 - ・ 7・8・9 月オープンキャンパスについて
 - ・ AO 入試面接について
- 2) 教務委員会より
 - ・ 短期大学設置基準の一部改正への対応について
- 3) 教育実践プログラムについて
- 4) 保育科学生アンケート結果について
- 5) 平成 29 年自己点検報告書について
- 6) 実習不参加の学生指導について

報告

- 1) 全国保育者養成協議会の報告
- 2) 学生の状況について

○ 平成 30 年度第 7 回保育科科内会議

日時:平成 30 年7月 11 日(水)14:00～

場所:美術室

議題

- 1) 入試委員会より
 - ・ 7 月オープンキャンパスについて
 - ・ AO 入試について
- 2) 教務委員会より
 - ・ 短期大学設置基準の一部改正への対応について
- 3) 「卒業研究 I」後期の計画について
- 4) ボランティアの引率について
- 5) その他

・保育科 2 年生「いのちの授業」受講態度について

報告

- 1) 実習関係より
- 2) クラス関係学生の状況について
- 3) 夏期休暇中の課題について
- 4) その他
 - ・図書館蔵書点検学生アルバイトについて

○ 平成 30 年度第 8 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 8 月 8 日(水)12:50～13:12

場所:美術室

議題

- 1) AO 入試総合分野におけるプレゼンテーションの時間に関して

○ 平成 30 年度第 9 回保育科科内会議

日時:平成 31 年 8 月 25 日(水) 15:45 ～ 17:30

場所:音楽教室 A

議題

- 1) 教務委員より
 - ・学位授与の方針改正について
 - ・実務経験者の履修単位等の認定について
- 2) 入試委員会より
 - ・ 本日のオープンキャンパスについて(反省)
 - ・ AO 入試合格者への配布プリントの内容について
 - ・ 9 月オープンキャンパスについて
- 3) 「卒業研究 I」後期の計画について

報告

- 1) 学則変更(カリキュラム)について
- 2) 現場体験の感想文について
- 3) 実習関係
 - ・謝金について
 - ・再実習者について
 - ・日数不足分の補充について
- 4) その他
 - ・学科朝礼について

○ 平成 30 年度第 10 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 9 月 22 日(水)16:00～17:00

場所:音楽教室 A

議題

- 1) 教務委員会より
 - ・ 幼児体育Ⅱの受講者について
- 2) 入試委員会より
 - ・ 3 月オープンキャンパスについて
 - ・ 入学前ガイダンスについてについて

報告

- 1) 実習関係
 - ・ 学生の資格取得について
 - ・ 1・2 年生の交流会について
- 2) その他
 - ・ 「卒業研究Ⅰ」について
 - ・ 音楽学習発表会について
 - ・ 「音楽指導論」再履修について
 - ・ 学生の状況について

○ 平成 30 年度第 11 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 10 月 10 日(水)16:40～18:20

場所:音楽教室 A

議題

- 1) 教務委員会より
 - ・ 実務経験によって単位が認められる科目について
 - ・ 平成 31 年度語学学修のあり方について
 - ・ 学則 58 条に規定する「大学以外の教育施設等における学修のうち文部科学大臣が定める学修に係る単位の認定」について
 - ・ 教養科目の学則改正について

- ・ 学位授与方針の見直しについて
- 2) その他
 - ・ 保育士養成課程の見直しに関する科目のシラバスの作成について

報告

- 1) 実践的教育プログラムの出金方法について
- 2) 入学前ガイダンスの担当者について
- 3) クラス関係学生の状況について
- 4) その他
 - ・ 実習の状況について
 - ・ 音楽学習発表会について
 - ・ 幼保特例単位修得試験について
 - ・ 下校の際の注意事項について

○ 平成 30 年度第 12 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 11 月 5 日(水)16:40～

場所:音楽教室 A

議題

- 1) 教務委員会より
 - ・ 保育科専門教科科目群の変更点について
 - ・ 教職科目群の変更点について
 - ・ 保育士養成課程の変更点について
 - ・ 学則変更について
 - ・ 学位授与の方針について
- 2) ボランティア引率について
- 3) 来年度実習期間について
- 4) 学生の状況について

○ 平成 30 年度第 13 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 11 月 14 日(水)17:45～18:45

場所:1217 教室

議題

- 1) 教務委員会より
 - ・ 平成 31 年度入学生専門科目教科群カリキュラムについて
 - ・ 平成 31 年度保育科 DP について
- 2) 入学前ガイダンスについて
 - ・ 前日・当日の役割分担について
- 3) ボランティア引率について
- 4) 学外研修について

5) 幼保特例通信講座単位修得試験の監督について

報告

- 1) 実習関係について
- 2) クラス関係学生の状況について
- 3) その他
 - ・ 卒業研究発表会の役割分担について

○ 平成 30 年度第 14 回保育科科内会議

日時:平成 30 年 12 月 26 日(水)16:40~18:40

場所:音楽教室 A

議題

教務委員会より

- ・ 学年歴について
- ・ シラバスの提出について
 - 1) 卒業研究発表会について
 - 2) 保育士養成協議会会長賞について
 - 3) 子育て広場の日程について
 - 4) 学外研修について
 - 5) その他
- ・ クリスマスマサについて

報告

- 1) 実習関係について
- 2) 募集関係について
- 3) クラス関係学生の状況について
- 4) その他
 - ・ 幼稚園教育理解推進事業研修会報告
 - ・ 入試について

○ 平成 30 年度第 14 回保育科科内会議

日時:平成 31 年 1 月 16 日(水)17:00~19:30

場所:音楽教室 A

議題

- 1) 卒業式代表者の選考について
- 2) 平成 31 年度子育て広場について
- 3) 学外研修について
- 4) 平成 31 年度自己点検卒業生・就職先へのアンケート調査について
- 5) その他
 - ・ 保育科年間行事日程について
 - ・ 3 月オープンキャンパスについて
 - ・ 来年度入学予定者ピアノレッスン開催について

- ・ クリスマスマサにおける学生指導の在り方について

報告

- 1) 実習関係について
- 2) クラス関係学生の状況について
- 3) 募集関係について

○ 平成 30 年度第 15 回保育科科内会議

日時:平成 31 年 2 月 13 日(水)17:00~18:30

場所:音楽教室 A

議題

- 1) 入学前ガイダンスについて
- 2) 平成 31 年度子育て広場 7・8 月の募集方法について
- 3) 学外研修について
- 4) 平成 31 年度自己点検・就職先アンケート調査内容について
- 5) その他
 - ・ 基礎演習について

報告

- 1) 実習関係について
 - 2) クラス関係学生の状況について
 - 3) 募集関係について
- その他

評価

平成 30 年度の五つの改善目標についての評価を行った。

- 1) 学科の将来構想を踏まえた教職課程、保育士養成課程の見直しを推進する。
- 2) 新しい教育課程を理解し、教授内容方法の改善を試みる。
上記の 2 点に関して、教職課程では再課程認定が通り、科内において新たな教職課程を理解する事に努めた。保育士養成課程も新課程に沿ったものに変更し、教職課程同様、教授内容の理解に努めた。
- 3) 学生理解を深める。常に学生との対話を心掛け、一人ひとりの生活環境や考えを把握した上で適切な指導に努め、学生との信頼関係を構築する。
今年度は、科独自に学生へのアンケート調査を実施し、学生理解を深めることに努め、具体的に対策を講じたが十分に対処するまでに至らなかった。
- 4) 教員間の協力や連携を重視し、互いの信頼関係を深め学生指導にあたる。
週初めに、科教員の朝礼を実施し問題点の共有に努めた。
- 5) 教科書を十分に活用する。
専任教員だけではなく非常勤講師に対しても協力を促した。今後も見直しを継続して行う。

来年度の改善計画

- ・ 教職課程は、「領域」への移行を、33 年度完了をめどに見直しを推進する。

- 100 分授業の方法を工夫し授業の質を高める。
- 「どのような保育者を育て現場へ送り出すのか」本学の保育者養成の在り方を踏まえ、保育科行事の見直し、学生との関わり方を検討する。
- HR の黒板から白板への移行を再度申請する。

平成 31年 3月 26日

責任者職位・氏名 保育科 科長 森崎 陽子

学科・専攻・部・委員会・センター等

生活文化学科

今年度の改善目標

魅力ある、楽しい学科づくり

実施内容

以下の内容を生活文化学科で審議し、実施した。
学科会議議事録より

○ 平成 30 年度第 1 回生活文化専攻会議

日時:平成 30 年 8 月 29 日(水)13:00～15:00

議題

1. 教務関係

- ・ カリキュラムについて
- ・ 学位授与の方針改正案について
- ・ 短期大学設置基準の一部改正への対応について
- ・ 教員募集について

2. 入試関連について

- ・ AO 入試
- ・ 9 月のオープンキャンパス

3. 学生関連

4. その他

- ・ 全米ブライダルコンサルタント協会の認定校について

○ 平成 30 年度第2回生活文化学科会議

日時:平成 30 年 5 月 2 日(水)16:40～17:30

議案

- 1) 来年度の指定校推薦予定者数について
- 2) オープンキャンパスについて
- 3) 共通科目について

報告

- 1) 学生の状況について

○ 平成 30 年度第3回生活文化学科会議

日時:平成 30 年 5 月 16 日(水)17:30～19:15

議案

- 1) 平成 30 年度の学科の改善目標について(学生生活調査より)
- 2) 学科の 3 ポリシーの見直しについて
- 3) 学科共通カリキュラムについて

4) オープンキャンパスの振り返りと6月以降のオープンキャンパスについて
報告

1) 学生の状況について

○ 平成30年度第4回生活文化学科会議

日時:平成30年6月20日(水)16:50~18:00

議案

- 1) 学科の将来構想について(魅力ある、楽しい学科づくり)
- 2) 学科共通カリキュラムについて
- 3) 和歌山県健康と食のフェスタについて
- 4) オープンキャンパスの振り返りと7月のオープンキャンパスについて

報告

- 1) ライフプラン講座について
- 2) 学術研究会講演会について
- 3) 学生の状況

○ 平成30年度第5回生活文化学科会議

日時:平成30年7月11日(水)17:15~18:10

議題

- 1) 学科共通カリキュラムと資格について
- 2) 和歌山県健康と食のフェスタについて
- 3) 7月のオープンキャンパスについて

報告

- 1) ライフプラン講座について
- 2) 学生の状況

○ 平成30年度第6回生活文化学科会議

日時:平成30年9月19日(水)17:15~18:15

議題

- 1) 学科のカリキュラム改変について
- 2) 短期大学設置基準の一部改正への対応について
- 3) 学位授与の方針の見直しについて
- 4) 9月のオープンキャンパスについて

報告

- 1) 学生の状況について

○ 平成 30 年度第 7 回生活文化学科会議

日時:平成 30 年 10 月 24 日(水)17:30～19:20

議題

- 1) 学科のカリキュラム改変について
- 2) 短期大学設置基準の一部改正への対応について
- 3) 学位授与の方針の見直しについて
- 4) 英語の履修方法について
- 5) 入学前ガイダンスについて
- 6) 新入生のフレッシュマンキャンプについて
- 7) 実践的教育プログラムについて
- 8) 学生募集について

報告

- 1) フードコーディネーター認可申請について
- 2) 学生の状況について
- 3) その他
 - ・ 生活文化専攻 2 年の保護者からの相談について

○ 平成 30 年度第 8 回生活文化学科会議

日時:平成 30 年 11 月 14 日(水)17:40～18:30

議題

- 1) 授業科目の開講期について
- 2) 入学前ガイダンスについて
- 3) 新入生のフレッシュマンキャンプについて

報告

- 1) 学生の状況について
- 2) その他
 - ・ 体育祭での盗難について
 - ・ 盗難被害について

○ 平成 30 年度第 9 回生活文化学科会議

日時:平成 31 年 1 月 16 日(水) 17:00 ～ 18:55

議題

- 1) 平成 31 年度カリキュラムマップと科目コードについて

- 2) 宗教行事の静粛を保つ方策について
- 3) 平成 31 年度 AO 入試について
- 4) 入学前ガイダンスについて
- 5) 卒業式の代表者について

報告

- 1) 生活文化学科学則変更及び変更更新について
- 2) 学生状況

○ 平成 30 年度第 10 回生活文化学科会議

日時:平成 31 年 2 月 13 日(水)17:00~18:10

場所:大会議室

議題

- 1) 資格免許申請における留意事項について
- 2) 和歌山健康と食のフェスタ 2019 の出展募集について
- 3) 入学前ガイダンスについて

報告

- 1) 学生の状況について
- 2) その他
 - ・ 2 月 20 日(水)午後追再延期試験について

評価

魅力ある、楽しい学科づくりを目指し、今年度は以下の活動を行った。

- ・ 両専攻のカリキュラムを見直し、新たな科目群と科目を創設、学則改正を行った。
- ・ 学科共通の資格養成課程として、新たに日本フードコーディネーター協会認定『フードコーディネーター3級』養成課程を開設し、学則改正を行うと共に、協会への申請を行い、認可を受けた。
- ・ 社会福祉主事任用資格(3科目主事)の取得条件に合致するよう科目の見直しを行い、学則改正を行った。
- ・ 平成 32 年度 AO 入試の改革を実施

上記改正により、教学面での学科の魅力向上に資することができた。

来年度の改善計画

- ・ 新たな資格養成課程の実施と内容の充実を図る。
- ・ 学生一人一人に対応した支援の充実を図る。
- ・ 広報活動と学生募集の充実を図る。
- ・ 学科改編の可能性を見据え、将来構想を検討する。

平成 年 月 日

責任者職位・氏名

生活文化学科長 芝田 史仁

各部・委員会・センター等

学科・専攻・部・委員会・センター等

教務部

今年度の改善目標

- ◎ 学科・専攻を越えた教育課程の見直し
 - ・ 3つのポリシーの見直し
 - ・ 生活文化学科:学科共通開設科目と新たな資格・免許科目の開設・卒業必修科目の見直し
 - ・ 保育科:多様な履修を可能にするカリキュラム・保育士養成課程の見直し・社会人入学生への対応
 - ・ 習熟度別授業実施の取り組み推進
- ◎ 教学支援の充実
 - 特別な支援を必要とする学生への合理的配慮
- ◎ 100分授業開始に向けての具体的準備
- ◎ 新設大学との連携に向けた準備
 - ・ 通年時間割の編成と受講登録方法の改正

FD 委員会

- ◎ 平成 30 年度 FD 活動のテーマ:『100分授業対応のための FD』
FD 活動:研修会2回と相互参観
第一回研修会:7月2又は9日
- ◎ 新たな評価項目に基づく授業評価の実施と評価結果の活用

実施内容

以下の内容を教務部で審議し、実施した。

教務部会議議事録より

○ 平成 30 年度第1回教務部会議 議事録

日時:平成30年4月18日(水) 16:40~17:40

場所:大会議室

出席者:芝田、西出、田原、今西、金谷、中西淳、東口、若林、宮下

欠席者:浅田、堀江、中村俊、奥田、菅本

議案

- 1) 教務部の活動目標・活動計画について
- 2) 教育課程の見直しについて
- 3) その他

○ 平成 30 年度第2回教務部会議 議事録

日時:平成 30 年 5 月 23 日(水)17:10~18:45

場所:大会議室

出席:芝田・浅田・中西淳・東口・西出・堀江・若林・田原・今西・金谷・中村俊

欠席:宮下

記録:若林

議案

1) 第1回FD研修会について

日程:平成30年7月2日(月)16:30~18:00

テーマ「100分授業対応のためのFD」

2) 追再試・延期試験届の様式変更について

3) 3つの方針の見直しについて

4) 各学科専攻のカリキュラム見直しについて

5) 習熟度別授業の運用基準について

6) 100分授業開始に向けた準備について

7) 短期大学設置基準の一部改正への対応について

8) 児童福祉法・指定保育士養成施設の指定及び運営の基準改正への対応について

○ 平成30年度第3回教務部会議 議事録

日時:平成30年6月27日(水) 16:40~17:40

場所:小会議室

出席者:芝田、田原、今西、金谷、堀江、中西淳、東口、宮下、中村俊、浅田

欠席者:西出、若林、神

議案

1) 第1回FD研修会について

2) 習熟度別授業の運用基準について - 現状について保育科より報告

3) 短期大学設置基準の一部改正への対応について

4) 3つの方針の見直しについて DP5の見直しについて

5) 児童福祉法・指定保育士養成施設の指定及び運営の基準改正への対応について

6) 各学科専攻のカリキュラム見直しについて

保育士養成課程の改正

生活文化学科、共通科目群の開設

専攻のカリキュラムの必修科目及び卒業必修科目の見直し

7) 100分授業開始に向けた準備について

8) 前期試験時間割について

9) その他

・前期授業評価アンケートについて

○ 平成 30 年度第4回教務部会議 議事録

日時:平成 30 年7月 18 日(水)16:30~18:00

場所:大会議室

出席者:芝田、田原、浅田、金谷、堀江、中西淳、東口、今西

欠席者:中村俊・宮下

議案

前期試験時間割について

- 1) 紀の国わかやまと世界の科目登録希望調査と教養科目の履修制限について
 - 2) 第2回FD研修会と授業の相互参観について
 - 3) 習熟度別授業の運用基準について - 現状について保育科より報告
 - 4) 短期大学設置基準の一部改正への対応について
 - 5) 学位授与の方針の見直しについて
 - 6) 各学科専攻のカリキュラム見直しについて
 - 7) 児童福祉法・指定保育士養成施設の指定及び運営の基準改正への対応について
 - 8) その他
- ・ 生活文化1年 学生 A の試験教室の配慮について

○ 平成 30 年度第5回教務部会議 議事録

日時:平成 30 年 9 月 26 日(水)16:30~17:45

場所:大会議室

出席者:芝田・浅田・東口・中西淳・堀江・横地・今西・田原・奥田・金谷

欠席者:中村俊・宮下

議案

- 1) 第 2 回 FD 研修会と授業の相互参観について
FD 研修会日程 12 月 17 日 16:40~
それに先立つ授業相互参観の期間 11 月 12 日~12 月 7 日
- 2) 平成 31 年度の語学学修の在り方について
- 3) 短期大学設置基準の一部改正への対応について
- 4) 学則 58 条に規定する、「大学以外の教育施設等における学修のうち文部科学大臣が定める学修に係る単位の認定」について
- 5) 単位の計算方法に関する学則の改定について
- 6) 学位授与の方針の見直しについて
- 7) 児童福祉法・指定保育士養成施設の指定及び運営の基準改正への対応について
- 8) 教養科目の学則改正について

○ 平成 30 年度第6回教務部会議 議事録

日時:平成 30 年 10 月 17 日(水)16:30～17:45

場所:大会議室

出席者:芝田・浅田・東口・中西淳・西出・堀江・横地・田原・今西・金谷・奥田

欠席者:中村俊・宮下

議案

- 1) 第 2 回 FD 研修会と授業の相互参観について
- 2) 短期大学設置基準の一部改正への対応について
- 3) 学則 58 条に規定する、「大学以外の教育施設等における学修のうち文部科学大臣が定める学修に係る単位の認定」について
- 4) 各学科のカリキュラム改変と学則改訂について
- 5) 学位授与の方針の見直しについて
- 6) 児童福祉法・措置保育士養成施設の指定及び運営の基準改正への対応について
- 7) 教養科目の学則改正について

○ 平成 30 年度第 7 回教務部会議 議事録

日 時:平成 30 年 11 月 21 日(水)16:30～17:41

場 所:小会議室

出席者:芝田・浅田・中西淳・東口・田原・今西・金谷・堀江・横地・奥田・西出

欠席者:宮下・中村俊

議案

- 1) 第 2 回 FD 研修会について
- 2) 選択科目の受講登録後に変更した場合の欠席の取り扱いについて
- 3) 授業年間スケジュールについて
- 4) シラバスの様式について(実務科教員による授業の明記)
- 5) 保健体育講義・実技のシラバス・時間割への記載方法について
- 6) カリキュラムマップの様式について(履修時間の明記)
- 7) その他

○ 平成 30 年度第 8 回教務部会議 議事録

日時:平成 30 年 12 月 10 日(月)16:40～18:00

場所:小会議室

出席者:芝田、浅田、中西淳、西出、堀江、若林、田原、今西、金谷、宮下、東口

欠席者:奥田、中村俊

議案

- 1) 第 2 回 FD 研修会について

- 2) 英語 I の選択方法とシラバス記載について
- 3) 授業年間スケジュールについて
- 4) シラバス作成について
- 5) カリキュラムマップ・カリキュラムツリー・科目コードについて
- 6) 平成 31 年度時間割作成について
- 7) FD 実践報告書の作成について
- 8) 生活文化専攻の学則改正について

○ 平成 30 年度第 9 回教務部会議 議事録

日時:平成 30 年 1 月 23 日(月)16:40~18:00

場所:大会議室

出席者:芝田、浅田、中西淳、西出、若林、田原、今西、金谷、東口、奥田、堀江

欠席者:中村俊、宮下

議案

- 1) 不可抗力な事故による負傷で、定期試験の受験が困難な学生への対応について
- 2) 社会福祉主事任用資格該当科目の記載方法について
- 3) 子育て・子育てサポーターの資格認定規程見直しについて
- 4) カリキュラムマップ・カリキュラムツリー、科目コード、地域志向科目一覧について
- 5) FD 実践報告書の提出期限について
- 6) 平成 31 年度時間割作成について

○平成 30 年度第 10 回教務部会議 議題

日時:平成 31 年 2 月 18 日(月)13:00~

場所:大会議室

議案

- 1) 平成 31 年度カリキュラムマップ・ツリーについて
- 2) 平成 31 年度年間行事計画について
- 3) 平成 31 年度学生生活のてびきについて
- 4) 平成 31 年度時間割作成について
- 5) その他

評価

○ 『学科・専攻を越えた教育課程の見直し』

- ・ 3つのポリシーのうち、学位授与の方針を見直し、学則改正を行った。
- ・ 生活文化学科において、学科共通科目を開設、学則改正等を行い、日本フードコーディネーター協会認定資格フードコーディネーター3級の養成課程として新たな認可を得た。

さらに、社会福祉主事任用資格を取得できるよう、学則改正を行った。

- ・ 保育科では教育職員免許法並びに指定保育士養成施設の指定及び運営の基準改正に対応して幼稚園教諭養成課程及び保育士養成課程の見直しを行い、学則改正を行った。一方、社会人入学生への対応については継続課題となった。
- ・ 習熟度別授業実施の取り組み推進では、英語 I における評価と履修方法について協議を行い、平成 31 年度の方針を決定した。さらに、学則 58 条に規定する、「大学以外の教育施設等における学修のうち文部科学大臣が定める学修に係る単位の認定」について、規程整備を図った。
- ・ 上記の他、短期大学設置基準の一部改正に伴う対応について検討し、該当部分について学則改正を行った。

◎ 教学支援の充実

- ・ 試験を受ける際に特別な配慮を申し出た学生について対応を検討し、配慮を個別におこなった。

一方、組織的な体制や規程整備などに課題を残している。

◎ 100 分授業開始に向けての具体的準備

- ・ 100 分授業の運用に向けた具体的課題を検討し、準備を行った。

◎ 新設大学との連携に向けた準備

- ・ 新設大学との連携に向け、通年時間割の編成を行った。しかし、受講登録方法の改正は継続審議となった。

FD 委員会

◎ 平成 30 年度 FD 活動のテーマ:『100 分授業対応のための FD』

- ・ 第1回 FD 研修会を平成 30 年 7 月 2 日(月) 16:30~18:00 に、視聴覚室(1307)にて行った。出席者は 29 名、欠席者は 4 名であった。
- ・ 第2回 FD 研修会を平成 30 年 12 月 17 日(月) 16:40~18:00 に、視聴覚室(1307)で行った。出席者は 30 名、欠席者は 3 名であった。
- ・ 授業の相互参観を、平成 30 年 11 月 12 日(月)~12 月 7 日(金)の期間に、専任は 2 回(非常勤教員は任意)で行った。

◎ 新たな評価項目に基づく授業評価の実施と評価結果の活用

- ・ 新たな評価項目に基づく授業評価を実施した。さらに、その結果を参考に、今年度の FD 活動への評価を実施し、全教員に FD 活動実践報告書の提出を求めた。

来年度の改善計画

- ・ アクティブラーニングを取り入れた授業の推進し、魅力的な授業作りを目指す。
- ・ 100 分授業の実施と評価を行う。
- ・ 学習環境の改善を図る。
- ・ 新設大学との教学面での交流方法(単位互換など)を検討し、実現を図る。



平成 31年 3月 31日

責任者職位・氏名 教務部長 芝田 史仁

学科・専攻・部・委員会・センター等

学生委員会

今年度の改善目標

- 1) クラブ活動、学園行事、学友会など、学生が主体的に参画する活動が行われるよう支援体制を整える。
- 2) アメニティスペースや環境面の充実に努め、学生が愛せるキャンパスづくりを目指す。
- 3) 自動車通学について検討する

実施内容

以下の内容を学科専攻で審議し、実施した。

学生委員会会議議事録より

- 平成30年4月18日(水)第1回会議
 - 1) 役割分担について
 - 2) 文化祭について
 - 3) 健康診断の反省
 - 4) 自動車通学について

- 平成30年5月30日(水)第2回会議
 - 1) 文化祭について
 - 2) 喫煙について
 - 3) 自動車通学について

- 平成30年6月20日(水)第3回会議
 - 1) 学園祭委員組織について
 - 2) 第1回学園祭委員会の報告
 - 3) 学生委員会教職員の学園祭における役割分担

- 平成30年7月18日(水)第4回会議
 - 1) 学園祭について
 - 2) ボランティアについて

- 平成30年9月26日(水)第5回会議
 - 1) 文化祭について
 - 2) 体育祭について
 - 3) DV講演会・税の話日程について

- 平成30年10月18日(水)第6回会議
 - 1) 文化祭について

- 2) 体育祭について
- 3) 学生生活調査について
- 平成30年11月23日(水)第7回会議
 - 1) 盗難防止について
 - 2) 体育祭の反省
 - 3) 文化祭の反省
 - 4) 自動車通学について
- 平成31年1月20日(水)第8回会議
 - 1) 体育祭について
 - 2) 文化委員の選出について
 - 3) 自動車通学について
 - 4) 清掃用具点検について
- 平成31年2月20日(水)第9回会議
 - 1) 自動車通学について
 - 2) 清掃用具点検について
- 平成31年3月27日(水)第10回会議 予定

評価

体育祭は学生主体で運営した。例年体育委員の指示に従わない学生が多いため、体育委員の意見をもとにルール違反を減点する方式にしたところ、競技結果の得点に減点の影響が大きく出てしまった。今後は減点方式を無くし、体を動かすことを楽しむことに重点を置いた運営を行うこととなった。

文化祭は、委員長を引き受けてくれる学生がおらず、じゃんけんで決まった委員長が機能しなかったため、教員の学生サポートの負担が増加した。今後、文化祭委員の選出も含めて学生主導で行っていくことになった。

自動車通学では、学内の乗り入れは許可しない。最寄りの駅近辺で駐車場を借りて通学する場合は届け出ることとなった。

来年度の改善計画

平成年度改善計画は以下の通りである。

- ・ 体育祭において、レクリエーション活動を主体とした行事運営を行う。
- ・ 文化祭において、学生主導で行うことができるように支援していく。
- ・ バリアフリーの観点から、階段に手すりを整備するよう検討する。

平成 31年 3月 7日

責任者職位・氏名

学生部長 森定美也子

学科・専攻・部・委員会・センター等

入試部(入試委員会)

今年度の改善目標

- ・ オープンキャンパスの動員人数が昨年度は前年度より減少したことを深刻に受け止め、動員増を図るための対応をしていく
- ・ 昨年度から継続審議となったオープンキャンパスの内容や大学案内の内容の検討、高校生への情報発信等の課題について、データの検証などにに基づき委員会として今年度中に大幅な改革案を作成する
- ・ 全ての学科、専攻において今年度は定員充足を実現する
- ・ 委員会における議論や決定事項について、明確なガバナンスの下で確実に実行していく

実施内容

以下の内容を入試部で審議し、実施した。

○オープンキャンパスの実施

- ・2018年5月12日(土)10:00～15:00 参加者 87人(54人)

※括弧内数字は昨年度同時期の人数

- ・2018年6月9日(土)10:00～15:00 参加者 81人(90人)
- ・2018年7月21日(土)10:00～15:00 参加者 117人(125人)
- ・2018年8月25日(土)10:00～15:00 参加者 77人(94人)
- ・2018年9月22日(土)10:00～15:00 参加者 46人(37人)
- ・2019年3月9日(土)10:00～15:00 参加者 63人(60人)

総計で昨年度比+11人

○学外ガイダンス等への参加

のべ135回(昨年度は141回:同一会場であってもブースや内容が異なれば別個にカウント。また、四年制大学のみ対応のガイダンスは除く。昨年度は四年制大学のみ対応のガイダンスも含む)の会場ガイダンス、高校別ガイダンス、模擬授業等に参加した。

○高校訪問の実施

2017年6月から7月にかけて、指定校推薦依頼とオープンキャンパス告知などを兼ねて、県内および南大阪地域の49校(前年度は62校)を訪問した。

※前年度は大学設置に関わるアンケート調査依頼を含む数字

○入試の実施

・AO入試

I期:2018年9月5日(水)

II期(※保育科・食物栄養専攻のみ)2018年10月6日(土)

III期(※保育科・食物栄養専攻のみ)2018年12月8日(土)

IV期(※保育科・食物栄養専攻のみ)試験入学選考に合わせ随時実施

・推薦入学選考

指定校推薦選考:2018年10月6日(土)

A日程:2018年11月10日(土)

B 日程:2018 年 12 月 8 日(土)

・試験入学選考

A 日程:2019 年 1 月 30 日(水)

B 日程:2019 年 2 月 20 日(水)

C 日程:2019 年 3 月 6 日(水)

・大学入試センター試験利用入学選考

I 期:2019 年 2 月 9 日(土)

II 期:2019 年 3 月 2 日(土)

III 期:2019 年 3 月 14 日(木)

IV 期:2019 年 3 月 26 日(火)

・社会人特別選抜

I 期:2018 年 12 月 8 日(土)

II 期:2019 年 3 月 6 日(水)

以上の入試を実施した結果、保育科 100 名(99 名)、生活文化学科生活文化専攻 68 名(43 名)、同食物栄養専攻 32 名(45 名)の計 200 名(187 名)が入学した。

※括弧内の数字は昨年度の人数

評価

- ・ オープンキャンパスの内容を大幅に刷新し、告知の手段も広告媒体を増やすなどして対応したが、減少傾向に歯止めをかける(総計数字的には微増)のが精一杯であった。
- ・ 生活文化学科生活文化専攻については定員を大幅に上回る学生を確保、また保育科についてもかろうじて定員と同数の学生を確保したため、学科単位での定員充足という点では目標を達成できたが、食物栄養専攻については大幅な定員割れを起こしてしまった
- ・ 四年制大学開設準備に伴い全体の業務量がさらに増えたことに対し、その影響を回避するための十分な対応ができなかった。従来の媒体利用に関しても、四年制大学と合わせて考えねばならず、短大独自の施策を十分に実施することができなかった。
- ・ ガバナンスの明確化は、四年制大学との関連でかえって入試業務全般が複雑になり次年度に先送りすることになった。

来年度の改善計画

2019 年度改善計画は以下の通りである。

・食物栄養専攻の定員確保(本年度の定員割れからの回復)

栄養士資格取得を軸に据えながらも、フードコーディネーター資格の新設など「食」に関わる専攻であることをアピールしていく。

・保育科の定員確保(100 名の定員充足)

特に四年制大学との差別化を明確にして高校生に説明していく。

・生活文化専攻の定員管理(学科の収容定員を上回らないレベルに抑制する)

カリキュラム改革による家政科系からビジネス系へのシフトを明確にアピールする。

・オープンキャンパスや入試の実施について大幅な改革を行う。

・入試委員会としてのガバナンスの明確化を図る。

2019年 3月 31日

責任者職位・氏名 入試部長 伊藤 宏

学科・専攻・部・委員会・センター等

宗教部

今年度の改善目標

- 行事ごとの感想を学生に求め、それを部内で共有し、客観的データとして改善に繋げる。
- ロザリオの集いの活性化を、部の課題として具体的に取り組む。
- 募金活動を建学の精神の表れとして重視し、学生・教職員が「一つの心 一つの魂」で取り組めるよう対策を練り実施する。

実施内容

- 平成30年4月25日（水）10：30～11：50
 - 1 平成30年度聖母委員会年間活動計画
 - 2 聖母祭ミサについて
 - 3 その他
- 平成30年5月30日（水）10：30～11：30
 - 1 平成30年度聖母ミサの反省
 - 2 理事長よりの提案
- 平成30年6月20日（水）10：35～11：20
 - 1 聖母祭の募金について（クリスマスのみと決定）
 - 2 聖母祭（みことばの祭儀）の献花の在り方
- 平成30年9月26日（水）13：30から14：00
 - 1 前田枢機卿様・新補佐司教様方の写真の扱いについて
 - 2 平成30年度追悼ミサについて
- 平成30年10月17日（水）13：30～14：15
 - 1 平成30年度追悼ミサについて
 - 2 追悼ミサの前日準備について
- 平成30年11月21日（水）13：00～13：20
 - 1 平成30年度追悼ミサについて（確認）
 - 2 平成30年度クリスマスミサについて
- 平成30年12月5日（水）13：00～14：20
 - 1 クリスマスミサ実施計画について
 - 2 全学ミサについての確認
- 平成30年12月26日（火）13：05～15：05
 - 1 クリスマスミサの反省
 - 2 クリスマスミサへの与り方について（卒業ミサに向けて）
- 平成31年1月30日（水）9：40～10：30
 - 1 平成30年度卒業ミサについて
- 平成31年3月22日（水）9：30～10：30
 - 1 平成30年度卒業ミサについての反省

2 平成 30 年度自己点検・評価について

評価

○ 行事ごとの感想は、信愛教育 I・II の課題として提出を見たが、データ化して共有するに至らず、緊急な対応を要する件のみの伝達に留まった。しかし、これらについては、対応を検討し改善策を講じた。

なお今後は、感想を募る際に簡単なアンケート形式の問いを加え、客観的データとする。

○ ロザリオの集いについて、著しい進歩は見られず、3～5人程度の参加者に留まった。また、教職員の自主的参加も得られなかった。ロザリオの祈りの意義を伝える事の難しさを痛感した。しかし、少数でも続ける事は、カトリックのミッションスクールにおいて大切ではなかろうか。

○ 聖母祭とクリスマスミサに向けての募金活動には、通常の準備(ポスター掲作成と掲示・クラスでの呼びかけ等)に加え、教職員(特に、クラスの正副担任)にも協力を求めた。募金額は増えたものの、年 2 回の実施は、現在の学生たちにとって負担であるとし、実施を 12 月のクリスマスのみとした。

来年度の改善計画

○ 宗教行事の充実。特に、日々の祈り(昼の祈り)の定着。

○ 建学の精神を具現化する活動。

平成 31 年 3 月 31日

責任者職位・氏名

宗教部長 二平 京子

学科・専攻・部・委員会・センター等

図書館委員会

今年度の改善目標

○学生、教職員、地域の方々の図書館利用の一層の促進を図り、魅力ある図書館づくりに向けて活動を行う。そのため、図書館の広報活動を多様な方法で行い、新刊図書等の案内の頻度を向上させる。

実施内容

以下の内容を図書館委員会で審議し、実施した。

○平成 30 年 4 月 18 日(水) 12:50～13:10

1) 平成 30 年度の活動方針について

図書館委員会委員の教員を中心に、授業、クラスにおける学生指導の際に新着図書等の紹介を行い、図書館への興味・関心を高める活動を行う。

2) 教職員による推薦図書の導入について

3) 「木のおうち」移動図書館の運営について

4) ブックハンティングについて

5) 和歌山地域図書館協議会の加盟機関としての平成 30 年度の計画

○平成 30 年 6 月 27 日(水) 12:50～13:10

1) ブックハンティングの引率の割り振りについて

【具体的な取り組み】

1) 広報の方法改善

① 下足室前の図書館コーナーにてポップな雰囲気でも新着図書の紹介を行った。
「館長おすすめ図書」も紹介した。

2) 利用促進のための方法

① 教員による選書と展示の工夫。

② 学生 5 名によるブックハンティング及びポップの作成

前期試験期間に入る前の 7 月の平日及び土曜日の 2 回にわたり実施

前期中にポップ作成の連絡を行った。

3) 蔵書点検の際に学生アルバイトを 9 名(延べ 76 時間)雇用し、図書館に親しみをもってもらう取り組みを行った。

4) 地域貢献

① 学内移動図書館「木のおうち」来訪者に向けた図書の貸し出し

② 和歌山地域図書館協議会の加盟機関としての活動

本学は、平成 30 年度和歌山地域図書館協議会のフォーラムの開催校に当たっていた。本学公開講座と共催の形でフォーラムを運営した。「公開講座」は学務委員会によって運営されるため、学務委員会に委員長が出席し、図書館委員会としての運営面での役割等に関して、決定事項を図書館委員会に報告した。

「公開講座」は11月17日(土)午後に本学伊藤宏教授が演者を務め「ゴジラと原子力～映画に描かれた原水爆と原発」というテーマで開催された。本学教職員も含めて総計104名の参加があった。

評価

○ 学生一人当たりの貸し出し数は、下表のとおりである。平成29年度に落ち込んだ貸出総数は若干ではあるが増加を見た。学生一人当たりの貸出数も同様に平成29年度と比較して上昇した。平成30年度の上述の取り組みが貸出数の増加に寄与したと推察される。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
学生貸出総数	2,001	1,388	1,315	3,083	1,534	1,601
うち視聴覚資料	627	340	134	398	312	271
学生一人当たり図書貸出数(冊)	4.9	3.2	3.1	7.5	3.7	4.0

来年度の改善計画

- 平成30年度に実施した学生によるブックハンティング、教員による選書、蔵書点検に学生アルバイトを雇用することは継続する。
- 図書館の広報活動に係る方法の多様性を追求し、図書館に行かなければ、新着図書の情報が見られないという状況を改善する。

【広報のための具体的な方策】

- ・ 年度当初の新入生全体オリエンテーション・学科・専攻別新入生オリエンテーションの機会を活用
- ・ 広報下足室前の図書館コーナーの掲示板に加えて、新着図書や特別展示に関する情報を、図書館HPや図書館独自のツイッター等を用い、即時性を追求する。
- ・ レファレンスのためのガイド作成
- 図書館システムの入替え
サーバーからクラウドへの移行(導入に係る初期費用、維持費の抑制可)
- 利用の利便性の向上のため、図書館専用のパソコンを新たに購入する(予算計上済み)
- 貸出手続きのデータから、科、専攻別の貸出数、個別の学生データの抽出など図書館に係るデータに基づいて、可能な範囲で図書館の現状分析を試みる。
- 和歌山信愛大学図書館との連携強化
- 図書館運営の体制の整備

平成 31年 3月 27日

責任者職位・氏名 図書館 館長 村上 凡子

学科・専攻・部・委員会・センター等

事務部

今年度の改善目標

- ・ 学生への学習支援の継続的維持
- ・ 大学運営の事務に関する体制の維持
- ・ 短期大学施設の維持・管理
- ・ 継続的な校内環境の維持管理
- ・ 継続的な SD 教育の推進

【実施内容】

【学生への学習支援の継続的維持】

【大学運営の事務に関する体制の維持】

- 事務職朝礼及び全体朝礼への出席

日々の学校行事等(事務的な行事も含む)の確認を行い、事務職員間の連絡体制を継続して構築している。

全体朝礼では、学校全体に関わる工事等についても予定等を示し、学生への影響が最小限になるように工夫している。

- 全体会への出席及びその後の SD 委員会を実施し、教授会審議事項の確認及び各部署の対応について継続して周知している。

また、教授会議事録及びその添付資料の確認を行い、教務事項、学生部事項等の運営的注意点を事務職員全体で確認している。

- SD 委員会の実施により教授会審議事項の確認以外に事務部内における問題事項の把握、体制の整備等を検討実施している。

- ・ SD 委員会議事録

平成 30 年 4 月 2 日教授会議事録(SD を兼ねる)

平成 30 年 5 月 16 日 SD 委員会議事録

以降朝礼等にて周知確認実施

【短期大学施設の維持・管理】

【継続的な校内環境の維持管理】

- エレベーター修繕工事
- 保育棟雨漏れ対策工事
- 窓ガラス交換工事
- 排煙装置交換工事
- 非常扉・警報装置交換

【継続的な SD 教育の推進】

- ・ 定例的には、全体会決定事項の確認等により事務職内周知を図る。
- ・ 文部科学省等からの通知の学内周知

- ・平成30年度より「教務必携」をメール等にて配信する。
- 日本短期大学協会

評価

- ・事務部の目標には維持管理的要素が多く継続議題となる。
- ・平成31年度は学外とのSD研修も実施して行っていきたい。

来年度の改善計画

平成31年度改善計画は以下の通りである。

- ・学生への学習支援の継続的維持
- ・大学運営の事務に関する体制の維持
- ・短期大学施設の維持・管理
- ・継続的な校内環境の維持管理
- ・継続的なSD教育の推進

平成 31年 3月 31日

責任者職位・氏名 事務長 塩崎 増仁

学科・専攻・部・委員会・センター等

キャリアセンター

今年度の改善目標

- ・ 学生の就職活動取り組みを早期化する。
- ・ 地元就職に割合が高いことが本学の特徴であるが、地元企業や地場産業に関する知識や興味が不足しがちであるので、1年次からこれらの情報に接する機会を増やす。

実施内容

キャリアセンター委員会

○ 平成 30 年 5 月 2 日(水)委員会

1) 指導業務について

- ① ガイダンス
- ② セミナー

2) 相談業務について

- ③ 履歴書・エントリーシート・模擬面接ほか就職・進学に関する全般
- ④ 合同企業説明会・Uターンフェア会場での指導

3) 「学内合同企業説明会」の開催

4) 情報提供業務

- ⑤ 求人情報提供
- ⑥ 進学・編入学情報提供

5) 渉外・求人開拓業務

- ⑦ 「求人申込票」・大学案内パンフレットの発送・配布
- ⑧ 企業周り・求人開拓、合同企業説明会会場での企業との情報交換
- ⑨ 地元経営団体との交流

6) インターンシップ業務

7) その他

- ⑩ 紀陽銀行学校推薦業務
- ⑪ 新日鐵住金(株)和歌山製鐵所ほか、学校推薦求人について

○ 各科専攻の担任・副担任との情報共有の徹底

- 1) 「平成 30 年度就職活動状況一覧表」を毎日更新し、週次報告メールとして送信
- 2) 必要に応じて面談・メールによる情報交換の頻度を高め、情報共有を強化
- 3) 学生から寄せられた採用内定情報の速やかな報告
- 4) 重要案件である相談内容の情報を共有し、コンサルテーションを実施

○ 1 年生のインターンシップ I・II (前期)、キャリアデザイン(後期)への協力

- 1) 和歌山県発刊の「UI 和歌山就職ガイド」を教材として取り入れ、地元企業や地場産業に関する知識を深めることで、より関心を高めた。

2) 近畿経済産業局の協力を得て、地元中小企業5社の採用担当者を授業に招き、学生と交流会を行なう「学内業界研修会」をキャリアデザインの授業に取り入れた。

評価

- 学生の就職活動取り組み時期の早期化については、学生の就職志望や活動状況について各クラスの担任との間で密に情報交換を行うことで、保育科と生活文化学科生活文化専攻では例年と同様の時期に開始することを維持した。それに加え、食物栄養専攻ではガイダンスや指導をより充実させるなどして就職活動への意識を高めることができ、例年より早いペースで内定率が推移した。最終的には、本年度も全科専攻において就職内定率100%を達成することができた。
- 一般企業への就職を主たる目標としている生活文化専攻1年生に対して、年間の授業を通じて地元企業や地場産業に関する知識を高め興味を持たせることに注力した。和歌山県が発刊する「UI 和歌山就職ガイド」を教材として取り入れたり、企業の採用担当者を授業に招いたり、また地元での就活交流会への参加を促した。その結果、就活広報開始日の3月1日に和歌山市内で開催された合同企業説明会に当該クラスの約9割の学生が参加するなどの成果が見られた。

来年度の改善計画

- 2020年度(2021年3月)以降の卒業生に関する就職・採用活動日程が流動的な現状において、今後就職問題懇談会や日本経済団体連合会などが発表する指針内容に留意し、適切な就職時期や就職活動方法に関する指導を行う。
- 地元就職に割合が高いことが本学の特徴であるが、昨年度に継続して地元企業や地場産業に関する知識や興味を持つことができるよう、1年次からこれらの情報に接する機会を増やす。

平成 31年 3月 31日

責任者職位・氏名 キャリアセンター長 中西 豊

FD 活動

自己点検・評価報告書

1. 平成 30 年度 FD 活動実績

平成 30 年度 FD 活動実績

○ 第1回 FD 研修会

日時:平成 30 年7月2日(月) 16:30~18:00

場所:視聴覚室(1307)

出席 29 名

欠席3名

配付資料と講演内容

平成 30 年度 第 1 回 FD 研修会 次第

日時:平成 30 年 7 月 2 日 (月) 16:30~18:00

場所:視聴覚室(1307)

テーマ:100分授業対応のためのFD

タイムテーブル:16:30~16:50 FD研修会のねらいと本日の流れについて(芝田)

16:50~17:40 グループワーク

17:40~18:00 発表

まとめ(大山副学長)

グループ:

A	村上	森下	野志	平林	浅田	今西	
B	森崎	小笠原	井澤	二平	若林	東口	
C	伊藤	土井	森定	野村	田原	西出	
D	千森	西原	山本	五木田	前島	堀江	
E	大山	堺	辻	井上	花岡	中西	金谷

芝田による講演内容は以下の通りである。

100分授業対応のためのFD

一学生の主体的・対話的で深い学びを促す100分授業となるために

和歌山県立女子短期大学
平成30年度第一回FD研修会

100分授業実施（計画）大学一覧

大学名	1コマの授業時間	開始年度
富山県立大学	100分	2017
筑波大学	100分	2017
近畿工業大学	100分	2017
岐阜大学	100分	2018
富山県立短期大学	100分	2018
富山県立短期大学	100分	2018
大宮工業大学	100分	2018
神奈川大学	100分	2018
福岡県立短期大学	100分	2018
上智大学	100分	2019
名古屋経済大学	100分	不明
東京大学	108分	2015
一橋大学	108分	2015
京都府立短期大学	100分	不明
岡山大学	120分	2016

100分授業への疑問

- 学生の集中力が続かないのでは？
- 授業が14回になることで、教えられる内容が減るのでは？
- +10分の時間をどのように使えるのかかわからない。

平成31年度から授業時間を、半期100分×14回の授業実施に変更します。

- 平成25年4月の大学設置基準改正により、教育上必要があり、かつ、十分な教育効果をあげることができる場合には、16週よりも短い期間で授業を行うことも可能に。
- アクティブラーニングへを取り入れた授業を積極的に展開することで教育効果を高め、ゆとりある学年暦とするため、平成31年度より現行の1コマ90分から100分へ変更し、授業回数を15回から14回へと短縮。
- この変更は平成31年度より全学年一斉に行う予定。
- 授業実施期間は短縮され、一日あたりの授業時間は延長。

2019年度時間割 (2018年度との比較)

2018年度			2019年度以降		
日	時間	授業時間	日	時間	授業時間
1・2 日	9:30~10:30 (90分)	1 課	1 日	9:30~10:40 (100分)	1 課
3・4 日	11:00~12:30 (90分)	2 課	2 日	10:30~12:30 (120分)	2 課
休	40分	休	休	40分	休
5・6 日	13:10~14:40 (90分)	3 課	3 日	13:30~15:10 (100分)	3 課
7・8 日	14:50~16:20 (90分)	4 課	4 日	15:30~17:00 (100分)	4 課
9・10 日	16:30~18:00 (90分)	5 課 (前)	5 日	17:10~18:00 (90分)	5 課

ねらい

- 学生の主体的・対話的で深い学びを促すために、積極的にアクティブラーニングの手法をとり入れた授業を展開する。
- 教員と学生の双方向の授業展開を可能とし、学生の「学力の3要素」（知識・技能の習得、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等）、主体的・協働的に学習に取り組む態度）の向上を図る。
- 単位を充実化するため、授業時間数を確保する（半期1350分から1400分へ）。
- 土曜授業や振替授業を減らし、夏期休業期間を確保することで、ゆとりある学年暦を実現する。

主な変更点

- 1時限目の開始時間が早まります。
- 昼休みの時間が60分に延長されます。
- シラバスは半期14回の授業を想定して作成します。
- 毎回の授業は100分となるため、授業内容や方法を変更することが考えられます。
- 学年暦の見直しを行います。

100分授業実施の留意点

- 授業に対する学生のモチベーションを継続させ、主体的な学習を促す。
- 学生の集中力を維持し、気分転換できる授業構成にする。

授業に対する学生のモチベーションを維持するための視点（ARCSモデル）

- | | |
|---------------------|-----------|
| A：注意（Attention） | 「おもしろそう」 |
| R：関連性（Relevance） | 「やりがいがある」 |
| C：自信（Confidence） | 「やればできる」 |
| S：満足感（Satisfaction） | 「やってよかった」 |

学生の「おもしろそう」を引き出すために

- ① 映像資料を適宜利用し、視覚的な例題・課題を提示するなどして学生の興味を引く方法を工夫する。
- ② 不思議や驚きある導入、応用課題や参考文献の紹介などを通して、学生の探究心を刺激する。
- ③ 注意を持続するため、マンネリを避け、講義や演習を組み合わせるなど、授業に変化を加える。

「やりがいがある」を引き出すために

- ① 学生の過去の経験や興味と授業を関係づける。
- ② 学生の将来の目的あるいはゴールと授業を結びつける。
- ③ 学習プロセスを楽しくめるようにするなど、目的を持たない学生を含め、学生を授業に関与させるための動機付けを行う。

「やればできる」を引き出すために

- ① 授業内容を説明する前に、何が出来るようになるのか、学習の到達目標を明確に示す。
- ② 目に見える物を製作したり、演習問題や課題によって、到達目標をクリアし、成功を体験する機会を提供する。
- ③ 試行錯誤し、自分なりの工夫をこらして成功する体験や、繰り返し努力し、能力として身についたことを実感する体験の提供。

「やってよかった」を引き出すために

- ① 新たに獲得した知識やスキルを活用し、役立った経験を提供する。
- ② 報告会やコンテスト、発表会などの機会を通じ、学生の成功に対するコメントや賞賛など報酬的結末を提供する。
- ③ 成績評価基準やルーブリック、レポートの採点基準などを示し、学生を公平に評価していることを示す。

参考文献：「教育工学雑誌」日本教育工学会
「第10号 100分授業第一巻 巻末付録」法政大学

集中力を維持し、気分転換出来る授業構成にするために

- 100分間を区切る。
- 休憩や雑談を挟む。
- ストレッチや身体を使う活動をする。
- 内容を詰め込みすぎない
- 学生がただ聞いているだけの授業を避ける。
- 授業案を作成する。

「+15 (Plus fifteen minutes)」東京大学より

授業モデル

授業時間 (20分)	授業構成 (10分単位・2回)	授業時間 (15分)	授業構成 (10分単位)	授業時間 (100分授業)	授業構成 (100分授業)
導入 (20分)	導入 (20分)	導入 (15分)	導入 (15分)	導入 (10分)	導入 (10分)
演習 (20分)	演習 (20分)	演習 (15分)	演習 (15分)	演習 (10分)	演習 (10分)
講義 (20分)	講義 (20分)	講義 (15分)	講義 (15分)	講義 (10分)	講義 (10分)
まとめ (20分)	まとめ (20分)	まとめ (15分)	まとめ (15分)	まとめ (10分)	まとめ (10分)

参考文献：「+15 (Plus fifteen minutes)」東京大学
「第10号 100分授業第一巻 巻末付録」法政大学

討論のテーマ

1. 学生が集中力を維持し、主体的に学習できる授業とするために何が出来るか。
 - ① +10分をどう使うか？
 - ② 100分をどう使うか？
2. 14回の授業計画をどう立てるか？

平成30年7月2日
FD研修会

担当グループ教員氏名:

100分授業対応のためのFDワークシート

1) 学生が集中力を維持し、主体的に学習できる授業とするために何ができるか

① +10分をどう使うか?

②100分をどう使うか?

2) 14回の授業計画をどう立てるか?

○ 第2回 FD 研修会

日時:平成 30 年 12 月 17 日(月) 16:40~18:00

場所:視聴覚室(1307)

出席:30 名

欠席:3名

平成 30 年度 第 2 回 FD 研修会 次第

日時 : 平成 30 年 12 月 17 日 (月) 16 : 40 ~ 18 : 00

場所 : 視聴覚室 (1307)

テーマ : 100 分授業対応のための FD

タイムテーブル : 16 : 40 ~ 17 : 00 FD 研修会のねらいと本日の流れについて (芝田)

17 : 00 ~ 17 : 40 グループワーク

17 : 40 ~ 18 : 00 発表

まとめ

グループ :

A	大山	伊藤	土井	井上	山本	西原	西出
B	堺	小笠原	井澤	花岡	今西	金谷	
C	千森	村上	森下	野志	東口	横地	
D	森崎	二平	辻	五木田	浅田	中西	
E	森定	野村	前島	平林	田原	堀江	

平成30年12月5日

FD研修会

グループ名(): 教員名

--	--	--	--	--	--	--

100分授業対応のためのFDワークシート

(テーマ) : 100分授業の取組に対して多くの問題点(授業回数、欠席回数、学生の集中力等)に対して、今回の授業参加から何かヒントとして得られたものは何か? 又は、ヒントを得るためには今後どのような工夫が授業参加に必要なのか?

① 100分授業での集中力を高める問題に対して、何かヒントは得られたのか?

② 100分授業において、参加型や主体的な学ぶためのヒントは得られたのか?

③ 100分授業での知識習得の工夫に対して、何かヒントは得られたのか?

④ 100分授業に向けた授業環境において、改善が必要と思われる問題点は何か気付いたか?

○ 授業の相互参観

実施期間:平成 30 年 11 月 12 日(月)～12 月7日(金)

参観回数:専任は2回(非常勤教員は任意)

平成 30 年 11 月 05 日

2018 年度 FD 研修の授業参観に関するご連絡

教務・FD 委員会

より良い授業づくりを目指して、FD 研修会では、授業の相互参観を毎年実施しております。今年度も以下の要領で実施することとなりましたので、ご確認ください。

記

実施期間： 11 月 12 日（月）～ 12 月 7 日（金）

参観回数： 専任は 2 回 （非常勤は任意）

備考： ・ 日程・学科専攻の枠は設けない
・ 参観希望者は、事務室のカウンターにある実施期間中の
時間割の中で、参観希望の授業科目に氏名を記入
・ 規定の様式で授業参観報告書を作成（専任のみ）
・ 第 2 回 FD 研修会は、12 月 17 日（月）16:40～
視聴覚室（1307）で開催（非常勤は自由参加）

以上

相互参観報告書

記入日： 年 月 日

平成 30 年度 授業参観報告書

記入者： _____ 生 食 保

科目名：	担当者：	先生	参観日：	年	月	日
テーマ： 100分授業対応に向けて						
【観点の参考項目】						
・ 授業構成の工夫						
・ 集中力を高めるための工夫						
・ 参加型、主体的な学びのための工夫						
・ 知識習得のための工夫						
・ 授業環境の工夫						
100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)						
その他気付いた点：						

2. 授業相互参観報告書

保育科

科目名： 保育相談支援	担当者： 桑原 先生	参観日：30年11月29日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業構成の工夫 <p>①課題となるストーリー(印刷物)を読む・②ワードの補足としてストーリーに出てくる専門用語の解説・③演習課題①～⑥について解答していく・④まとめ 以上が授業構成である。課題演習に入るまでに、ワードの解説は文章理解の上で効果的。</p> ・参加型、主体的な学びのための工夫 <p>まず、課題となるストーリーを理解できるように、使用されている専門用語を解説していくが、決して一方的な説明だけではなく学生に問いかけ答えを学生から引き出す手法をとっている。準備されている演習課題の解答方法も同様である。「なぜそう理解できたのか」を文章の中から読み取らせ答えを引き出す。また、他の教科で学んだ事を覚えている者がその解答と同じであると答えるとその教科との関連も認識されるように解説を加える。このように応答を繰り返しながら正解等を確認し資料に書き留めさせる方法は良いと思う。しかし、ともすれば応答が限られた数名とになりがち傾向が伺える。</p> ・授業環境の工夫 <p>授業環境に関しては、友達同士が椅子を寄せ合う行為が数箇所に見られた。私語が始まる原因となるために改善すべきと考える。</p> 		
<p>その他気付いた点：</p> <p>授業準備がきちんと行われているので、授業環境を整え講義を聴く態勢を作ると、授業終了までの時間を有効に使う事ができるのではないかと考える。</p>		

科目名：音楽指導論	担当者： 畑中 先生	参観日：30年12月7日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業構成の工夫 クリスマス関連の保育の進め方の演習授業である。資料の配布と閉じ作業。①クリスマスに纏わるお話の後関連の賛美歌の歌唱指導と歌。を繰り返す。②関連の壁面に使用できる折り紙の作品作り。以上が授業構成である。クリスマスのイメージを描かせ、歌や関連の環境づくりの方法とそのまま保育を構成できる内容となっている。 ・参加型、主体的な学びのための工夫 声を出す。指先を使い教材作り。全て参加型の授業展開となっている。 ・授業環境の工夫 音楽教室に入るとすでに白板にはクリスマスの雰囲気醸し出す和タオルでの飾り付けが成されていた。それが今回の授業で手作りされる作品であるとより効果的との説明があり、環境構成の工夫が歌う心情に働き掛ける効果があることが学生達に示しているようであった。 		
<p>その他気付いた点：</p> <p>畑中先生は言葉一つひとつをととも丁寧と話され、学生達も一生懸命に聞き取ろうとしていた。助手として入って下さっている種田先生は、畑中先生の説明の後に大切な部分は板書する等のフォローを心掛けて下さっていた。</p> <p>歌唱指導後の学生達の歌が、前より良くなったか否か評価をして下さると次への歌唱意欲がより高まるのではないかと感じた。</p>		

科目名：造形表現	担当者： 井澤先生	参観日： 30年11月28日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
受講予定者 9 人のところ、出席者 5 名		
実技を伴う科目のために、集中すべき点には声に抑揚を付けて各人を見ていた。それぞれの速さ(進度)が違うために、複数回説明しないといけない部分があったが、各個人に説明が細かくなされていた。		
学生の小さな意見にも、色々な方法や手段を用いて解説をし 360 度から作品に向き合える環境にあった。		
選択科目で少人数での特徴もあると思うが、色々な作品を自由に取り組んでいた。		
長時間にわたると、集中できない学生や選択者・人数により講義内容が限定されるのではと感じた。		
その他気付いた点：		

科目名：教育実習ガイダンス	担当者： 小笠原 先生	参観日： 30 年 12 月 7 日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】 <ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
<p>実習実施後に各園で出た内容について話し合う自由な意見交換の場所 実習前にたてた目標について、どのように達成できたか？出来なかった理由などを自分の言葉で表現してみる。 少人数での意見交換が、話しやすい場の設定であったように思われる。 お互いに免許という同じ目標に向かってひとつの実習を終えたという達成感は感じられた。 実習に対して思い入れや印象が違うのか、少し内容が理解できていなかった人も居たように思われる。 6人という少ない人数で有りながら、自分の意見を上手くまとめられずに 表現の方法・ポイントなどアドバイスを得ていた。的確な判断で、学生の意見に応じたアドバイスしていた。 2グループのみ、代表者がまとめて述べていた。 感想も含めたコメントが非常分かりやすかったように思われる。</p>		
その他気付いた点：		

科目名：保育内容演習(環境)	担当者：芝田 先生	参観日：30年12月6日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>本時の授業は、次週に予定されている保育実践のための学生によるグループ活動が主であった。</p> <p>学生達はグループ単位で活発に意見交換を行いながら、計画書(指導案)の作成、教材準備、シミュレーションと積極的に作業を進めていた。その間、教員は各グループを巡回し、学生とやりとりを交わしながら適切な助言をされていた。</p> <p>今回のような学生主体の授業を展開するには100分の授業時間は大変有効であると感じた。</p> <p>ただ、授業の冒頭に教員から活動の説明があった際、落ち着きのないグループが見受けられ、全員に説明の内容が行き届いているとは思えなかった。聞く態勢を整えられてから始めた方がよいのではと感じた。</p> <p>また、学習環境として1台の机を6名の学生が囲み、作業するには手狭であると感じた。</p>		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名：保育内容演習(人間関係)	担当者：川崎先生	参観日：30年 12月 6日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>授業は、テキスト→プリントによるグループワーク→ブレインストーミング→テキストと学生の集中力が切れないように変化にとんだ構成で組み立てられている。また、その内容はロールプレイ形式でテキストの事例を読み込ませたり、グループワークを行ったりと、学生を参加させ、主体的、対話的な学びが出来るよう工夫されていた。そして、授業の要点は複数の事例を用いて説明を行い、理解の定着を図られていた。</p> <p>また、遅刻者一人ひとりに対しても丁寧な対応がなされ、すぐに授業に加われるよう配慮がみられた。</p> <p>コラム(テキスト)の利用法にも工夫がみられ、参考にしたいと思った。</p>		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名： 声楽Ⅱ	担当者： 畑中先生 種田先生	参観日：2018年11月29日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】 <ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
○集中力を高めるための工夫、新たな提案 音階を絵カードという視覚的手掛かりを用いて指導していた場面はわかりやすく集中して授業に参加することができた。 しかしながら、集中度が低下する場面があった。教員が質問し、学生が答えるという形式の繰り返しが続いたときに、指名されていない学生の参加度や集中度が下がっていた。質問への解答をペアで考えることや、グループで討議する学習形態を取り入れることにより、より授業が活性化すると考えられる。 本時の目標や流れに関する情報伝達がなかった。学生が見通しをもちにくい。		
その他気付いた点： 4年ほど前に、研修会で提案した集中力を高めるための工夫の基礎理論等の理解と実践に関して、今回の参観では浸透していることが窺えなかった。100分授業以前のテーマに戻る必要があると考える。		

科目名: 図画工作	担当者: 野村 先生	参観日: 2018年11月29日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>参加した授業はその次の授業と合わせたプログラムでステップ1の場面であった。主な活動のテーマは、つるす飾りの制作であった。</p> <p>○集中力を高めるための工夫ならびに授業環境の工夫が必要な点</p> <p>前に向かって縦に長机を向かい合わせにして学生が着席していた。作業中は、コミュニケーションを図りやすい形態である。しかし、話を聞くには向かない形態である。</p> <p>教員が作業の説明をしているときにも、まったく静かにならなかった。これは、教員養成のための授業として、学生のためにならないと考える。子どもたちにどのように話をきいてもらうのか、話を聞くためにふさわしい姿勢を子どもたちがとることができるに指導する立場である。それを学ぶ機会に恵まれていない。クラス集団を対象としたときの教員の働きかけ方を学生に示していかなければならないことを、教員養成課程の教員は、心に留めておかねばならない。</p> <p>○参加型、主体的な学びのための工夫</p> <p>ステップを分け、次の時間でグループの作業をするようカリキュラムが作られていた。学生が見通しをもって取り組めるような授業計画であることが窺えた。</p>		
<p>その他気付いた点:</p>		

<p>科目名： 情報処理演習</p>	<p>担当者： 中西 先生</p>	<p>参観日：2018年11月20 日</p>
<p>テーマ： 100分授業対応に向けて</p>		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 <p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>エクセルの表計算について、プリントを見て打ち込みながら、解説に沿って表計算を入力していく授業であった。先生の見本のマーカーの指示がわかりやすかった。</p> <p>クラスには、パソコンについてはまったくの初心者である学生と、高校時代にかなりパソコンを学んできた、パソコンに熟練している学生がおり、クラス内の学生の能力に大きな差がある。授業公正に置いて、授業の基本的なラインは、初心者の学生に照準を合わせているが、パソコンに熟練した学生用の課題も提供している工夫が見られた。</p> <p>学生のパソコンの作業は、集中して行われており、100分授業になっても、集中が途切れることはないと考えられる。</p>		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名： 給食管理実習	担当者：土井 先生	参観日：2018年11月22日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>クラスの半分は考えた献立を試作し、後の半分は、前回試作した献立について、先生からコメントをいただくミーティングが行われるという授業構成である。試作の班はあらかじめ決められた作業計画表に基づいて、調理を行っていた。</p> <p>ミーティングでは、試作の写真を見ながら、献立の内容一つ一つについて色彩や味などについて学生に発言させ、それに答える形で先生がゆで方や油の量などアドバイスを行っていた。献立に合う食器なども教室に持ち込まれており、学生が具体的にイメージしやすい授業環境が整えられていた。</p> <p>この授業は実習であるため135分の枠であり、100分授業の枠組みで150となっても、時間的な余裕があるなかで実習を行うことができると考えられる。</p>		
その他気付いた点：		

科目名:在宅保育	担当者: 森下 先生	参観日:30年11月19 日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>①授業構成の工夫・・・在宅保育の授業は指定された教科書を使用して行う授業なので、学生が飽きないように教科書の重要な部分を抜き出し、パワーポイントを使い説明を加えていく。始めに、前回の授業の復習を行い、重要な内容について学生に質問をして答えさせる。重要箇所にアンダーラインを入れているか確認をとる。今回の内容は「居宅訪問型保育の保育内容」とテーマを伝え教科書とパワーポイントの文字と写真を使用して授業をすすめる。途中で質問をして、答えさせる。演習を行いグループで協議をすることも織り交ぜる。</p> <p>②集中力を高めるための工夫・・・学生に覚えてほしい内容を教科書から抜き出しパワーポイントで説明する。教科書に沿って説明する時、他の教科で習った事や復習することを質問する事で、学生に参加させ飽きないようにしていた。演習では周囲の学生と課題について話し合いの時間をとり、出てきた意見を発表し合い共有させていた。卒業までの時間、日常生活の中で実践し自分を磨き高めていくことを教科書の説明とともに事例をあげて話す。</p> <p>③参加型、主体的な学びのための工夫・・・復習では重要な内容を記憶しているか質問する。重要内容に下線を引いているかの確認を行う。以前の時間に学んだ事、他の授業で学んだ事と関連のある内容は、学生に質問をして答えさせる。演習では周囲の学生と課題について話し合うことで、自分が気づかなかったことを気付かせてもらったり、相互に学びあう機会をつくっていた。</p> <p>④知識習得のための工夫・・・教科書を使い説明を行いながら、重要な箇所に下線を入れさせる。パワーポイントに教科書の重要部分を抜き出し、説明を加える。特に大事な箇所は赤字にしてその部分を学生の教科書に下線を入れさせる。パワーポイントの写真を利用して覚えておいて欲しい内容を説明する。学生に質問をして答えさせる。</p> <p>⑤授業環境の工夫・・・パワーポイントを使用したがる、カーテンを閉めて明かりは落とさず文字を書ける環境を確保してくれた。</p>		
<p>その他気付いた点:</p> <p>学生の私語が多くなった時授業をとめて、聞きたい人に迷惑がかかることを伝えた。席はクラスでかたまっていたが自由に座っていたので友達が集まり私語に繋がったと思う。 授業を止めて、学生に意識させたことはよかった。</p>		

科目名:臨床心理学	担当者: 村上凡子 先生	参観日:30年11月12 日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>①授業構成の工夫・・・前回の内容のPM理論を学んだこと感想を当番の学生が伝え、他の学生は同感するところと違う所を探す。→配布資料に目を通し予習を行う。→本時の到達目的を伝える。→資料1を読み内容を理解する。→学生が要点を発表し、教師が重要点を説明する。→授業を進めながら資料2の「教師期待効果」の記録用紙に必要事項を記入していく。→資料3「教師期待効果」のワークシートに教師の説明を聞きながら記入し授業を振り返る。最後に原因の推測と期待の高い子どもに対しての教授活動を考察する。→来週の授業では自分が共感した事を発表する。また演じた学生は振り返りを行うという課題を各自に出して授業を終わる。ねらいに向けて目標が到達できるように工夫されていた。</p> <p>②集中力を高めるための工夫・・・学生が眠くならないように、教師が講義するところ、学生に課題を与え配布資料に記入させる。学生が前に出て模擬保育を行ったり、グループで話し合いを持ったりと変化を持たせ、授業の中で色々な活動が組み込まれていて、飽かずに集中できるように授業が行われていた。</p> <p>③参加型、主体的な学びのための工夫・・・資料が配布され教師が出した課題、問いを記入していく。「教師期待効果」について失敗場面と、成功場面を設定し、子どもへの言葉かけを考えるための模擬保育を行う。グループでの話し合いでは、模擬授業でAとBの子どもに言葉かけを行ったが他にどんな対応や言葉が出来るかを考えるなど参加型で主体的な学びができていた。</p> <p>④知識習得のための工夫・・・学生に知識として習得してほしい内容は教師が説明をし、より重要な内容はパワーポイントに写し出して、資料の重要な部分に記入させる。資料2と3は記入し終わると今日の授業の内容のまとめができるように工夫されていた。</p> <p>⑤授業環境の工夫・・・授業ではまわりの学生がいつも同じメンバーにならないように、一週間に一名ずつずれて座るようにしていると村上先生から聞く。グループで話し合うときいつも同じメンバーでないのよい。模擬保育を行うとき、誰を演じているかがよくわかるように、首から大きな名札を下げていたので、役柄がよくわかった。</p>		
<p>その他気付いた点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模擬保育を行った時、あらかじめ役柄で、セリフが決まっていたが、前で学生に考えさせて言葉を言わせたら色々な言葉かけが出てくると思うが、そうなればまとめるのに時間が足りなくなる可能性があるのでは、村上先生は後でグループでの話し合いをさせたのだと思う。 		

科目名：臨床心理学	担当者：村上 先生	参観日：30年11月16日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>前回からの予習内容の発表、小グループでの短時間の話し合い、グループでの発表(授業内容を演技するなど)、ふりかえり等つぎつぎと学生達自身がやらなければならないことが繰り返されるので、とても活動的な授業となっている。</p> <p>予習用の資料を授業の終わりに、配布され次回につながりやすくしている。</p> <p>授業のはじめにその予習内容を当番のグループが発表している。</p> <p>授業の終わりにノートのまとめを係りの学生がチェックし検印を押している。</p> <p>演技等の役割も自分達できめているらしい。</p> <p>このようなことから、学生の参加型そして主体的な学びになっていると思う。</p> <p>予習、予習内容の発表、その日の内容を実際に演技や資料で確認、振り返り、話し合い、ノートにまとめるといったように、同じ内容を何重にも学習していく形であるので、理解が定着しやすいと思う。</p> <p>短時間での学生同士の話し合いが間にはさまれるので、適度に緊張がほぐれてよいと思う。</p>		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名： 声楽	担当者： 畑中先生・種田先生	参観日： 30年11月29日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>畑中先生担当の声楽の授業であるが、参観した日の授業内容は種田先生のリトミックについての授業であった。</p> <p>教育実習先でのリトミック指導について質問し、学生が見聞きしてきた内容から、リトミックの要素についてわかりやすく説明していた。ピアノを弾きそれに合わせて、学生に動作をさせ、音楽(音の高さ・速さ・リズムなど)を表現する際に色々なイメージをもってからだを使って表現するという事を、体験させていた。</p> <p>参加型の授業の進め方で、今やっていることを、その都度まとめとして板書し理解をしやすいようにしていた。</p> <p>座席に座って受ける授業の教室環境であるので、動きを伴うリトミックの授業としては、ダイナミクスさが欠けるのが残念である。継続的な授業でないので、子ども達のまえでリトミック指導をするときのピアノ技術をどうすればいいかという点まで話がいかなかった。</p> <p>学生は指導される子ども側にいるので、楽しく集中して授業を受けていたが、……。</p>		
その他気付いた点：		

科目名： 社会福祉	担当者： 桑原先生	参観日：2018年11月27日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>本日のテーマは、「社会保障制度」であった。教育実習を終えて最初の授業であったため、前回の復習を応答的なやり取りで丁寧にされていた。「社会保障制度」は内容が難しいと思われるが、学生が理解しやすいように噛み砕いて説明をし、また実習現場や保育現場に就職した時の社会保障制度を、実際に計算しながらイメージしやすいような工夫がなされていた。</p> <p>資料は配布資料で、説明はパワーポイントを利用し、大切な所は埋め込み式をされて、知識習得や理解力向上のための工夫がされていた。集中力を高めるために、事例をあげたり、関連する内容の笑いをとる話をされたり努力されている。</p> <p>学生からも質問が上がったときには、それを逃さず丁寧に応答的対応をされて、学生が安心して質問ができる雰囲気を作っていた。学生の質問以外は、基本講義形式であったので、今後の課題としては主体的に学生自身が考える時間も設定されると、なお良いのではないかと感じた。</p> <p>授業環境(1406)としては、教室が狭く教員の巡回が困難であるように感じた。またホワイトボードにパワーポイントをうつす環境であるが、後方席または両サイドの学生は見えにくそうであった。照明や遮光カーテンの環境整備も必要であると感じた。</p>		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名:教育実習ガイダンス	担当者:小笠原先生	参観日:2018年11月28日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>教育実習 8 日間を終えたあとの最初の授業であった。実習に関して要の授業であることから、無事に実習を終えてほっとした部分も学生自身あるとは感じるが、授業態度は緊張感をもち集中して、先生の話聞いていたように感じた。</p> <p>授業の最初に、本日の流れと、その先の見通しや予定を説明し、2年間続く実習の気持ちの持ち方や、やるべきことを長期的にイメージできるよう指導されていた。</p> <p>本日の内容は、実習に関する自己評価と振り返りシートの作成、ディスカッション、発表という流れで進めていた。</p> <p>この作業は、集中力、参加型、主体的な学びや気づきができる内容であると思う。</p> <p>ディスカッションや発表は、幅広い知識・考え方など学生自身での学びが大きいと考える。助手も常駐しているため、きめ細やかな指導が可能である。人的環境としては理想である。</p> <p>大人が90分着席し学ぶには机が小さく、作業するには好ましくない環境であると思われる。改善を望む。</p>		
その他気付いた点:		

<p>科目名：地域子育て子育て支援論</p>	<p>担当者： 森下 先生</p>	<p>参観日： 30年11月28日</p>
<p>テーマ： 100分授業対応に向けて</p>		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の最初に「授業の見通し」を持たせた授業 → 今日は何をするのか。今日の目標は何か。 ・はっきりとした明確な指示 「これから〇〇をします。話し合いは〇分まで」 「これから資料映像を見せます。書くことばかりに一生懸命にならないように」 ・ワークプリントの活用 DVD視聴がヒントとなる。「ないところはどこか」 まず、自分で考える。その後、話し合い。 (think pair share) ・発表に対する評価コメント フィードバック と 賞賛(やる気を引き出す) ・ワーク、共有、発表 をブロックとし、3つのブロックで構成された授業展開。だらだらすることなく、展開が程よい時間で区切られて進んでいく。飽きない展開。 		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名： 保育内容演習(表現)	担当者： 野村 先生	参観日： 30年11月30日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの活用 導入時…「本時のねらい」を書かせる 到達目標の提示、本時の授業方針の明確化 ・授業の進行位置の視覚化 今、何をしているのか。次に何をするのか。 ・実際に保育教材を作らせて、それを使って遊んでみる 体験を通じて、子ども目線で考えさせる。体験的な学びを通じて、授業展開を考えていくヒントの提示。 ・教科書とリンク 今、どこを話しているのか。どの部分と今日の活動がつながるのか。 ・プロジェクターを使つての視覚提示 話し言葉は、wordを使つてキーワードを表示。 ワークシートに記入する言葉を表示。視覚情報の提示により、伝達ロスをなくす。 		
<p>その他気付いた点：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・騒音計を使つてみた。 教員の話 70db ワークシートに記入中 60db 教材作り 90db 作成した教材で遊ぶ 105db <p>○的確な指示、視覚的手掛かりがあるため、騒ぐような活動があつても、静かに書くこともできる</p>		

科目名: 保育内容演習(言葉)	担当者: 村上 先生	参観日: 30年11月29日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点（上記観点を参考にご記入下さい）		
<p>参観させていただいた授業は、保育科の保育内容演習（言葉）の授業で、本時は園での「言葉」と小学校「国語」についてその関連（1次的言葉と2次的言葉）について学ぶことであった。</p> <p>本授業は、100分授業への対応が様々な面でなされており、多くの知見を与えていただけのものであった。</p> <p>まず、授業構成の工夫として、授業デザインにおいて学びの連続性が成立している。例えば、学生の主体的な前時の授業要旨発表、本時の学びのめあての提示、教育実習中の「言葉」に関連した気付きの分かち合い、教師の発問による少人数グループでの話し合い、全体への発表、本時の振り返りという流れが綿密に計画されていた。</p> <p>学生が教育実習を終了して1週間を経っていないという状況を有効に活用して、教育実習中の「言葉」に関連した気づきを考えさせていた。また、少人数グループでの話し合いでは、学生の議論が深まっていた。まさしく、参加型、主体的な学びの成立があり、集中力もおのずと高まっていた。</p> <p>授業において、読む、書く、聞く、話す（発表する、話し合う）ことによる学びを組み入れていたので、この面からも集中力を高めることにつながり、知識習得につながると推察される。</p> <p>授業環境の工夫としては、学生に考えさせるレジメや ICT 機器の効果的利用が見られた。特に、教材提示装置は、情報や考えを学習集団全体で共有することが可能であり、学び合うスタイルの授業では必要な環境である。</p> <p>教員からの一方通的な知識注入の多用や教師学生間の一問一答は、100分授業には全く対応しないことが定説であるが、その対極と考えられる質の高い授業であった。</p>		
その他気付いた点:		

科目名： 声楽Ⅱ	担当者： 畑中・種田 先生	参観日： 30年11月29日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>参観させていただいた授業は、保育科の声楽Ⅱの授業で、本時はリトミックの指導に関するものが主体となっていた。</p> <p>まず、授業構成の工夫としては、学生が教育実習を終了して1週間を経っていないという状況を有効に活用されていた。具体的には、教育実習集中に観察したリトミックの内容を発表させた後、学生が幼児役としてリトミックの再現体験をしていた。教師は、学生に対してどのようなテンポや音域で進めるのがいいのかなど学生に考えさせ、答えるようにしていた。</p> <p>次に、リトミックの具体例を体験しながら専門的な指導法でのポイントを学べるようになっていた。</p> <p>学生自身の将来の理想的な保育者像をイメージしながら体験的に学ぶことは、100分授業においても大切な要素であると考えられる。つまり、集中力をもって、指導に活かすことのできる知識や技能の習得が図られると考えられる。</p> <p>授業環境の工夫では、リトミックの音階を視覚的に把握することのできる実際の教材を使用していた。</p> <p>さらなる参加型で主体的な学びを成立するために、少人数グループで考え合う活動やポイントを整理するための書く活動、今日の学びのリフレクションなどを取り入れれば良いと思った。</p> <p>以上、100分授業へ対応するためには、協働的な学びを引き起こし、学びのめあてを学生が把握し、振り返りで何を学んだのか実感できるようにすることが必要と言える。</p>		
その他気付いた点：		

科目名：臨床心理学	担当者：村上凡子先生	参観日：30年12月7日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<u>授業構成</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 範囲を絞り、余裕のある授業内容であった。・ 講義・グループ討議・発表が効果的に組み合わせられていた。		
<u>集中力強化</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 発表を前提とした学習が定着していた。・ 統合性のある資料が授業内容の理解に活かされ、学生は集中して取り組んでいた。		
<u>参加型主体的な学び</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 自宅学習の定着(発表)。・ 周りの学生との相談タイムの活用。メリハリのある授業で、意見交換も積極的に行われていた。		
<u>知識習得</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 重要な点の協調(ここが大切・線を引く)。・ 動機付けとなる声掛け(アカデミックな知識)。・ キーワードに学生自身が気付ける誘導が成功していた。		
<u>授業環境</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業形態に応じた環境の設定(速やかに机の位置を変える:静かにそれができる)。・ 機器類の効果的活用。細かく準備されていた。		
その他気付いた点：ノート確認のため、押印しながら机間巡視されていた。		

科目名： 紀の国の文学	担当者： 平松正昭先生	参観日： 30年12月3日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<u>授業構成</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 課題についての発表(導入)と寸評		
<u>集中力強化</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 地域性を強調した豊富かつ貴重な資料の提供があった。・ 地域の日常生活と作品を重ね合わせ、興味・関心促す工夫が為されていた。		
<u>参加型主体的な学び</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 自宅学習の定着(発表)しており、先生からのコメントに発表者はとても喜んでいました。・ 教員からの問いかけが、学生の理解を深めるものであった。・ 課題(レポート)と授業内容との関連性の指摘。		
<u>知識習得</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 郷土理解を強調した知識習得への動機づけ。・ 作品のみならず、関連作品の紹介や、背景の詳しい説明を通して、学生は和歌山に対する新たな知識を得ることができていた。		
<u>授業環境</u>		
<ul style="list-style-type: none">・ 機器類の効果的活用。・ 出版物等の豊富な資料が紹介されていた。		
その他気付いた点： 作品鑑賞の取り入れ方についての示唆をいただいた。		

科目名：保育内容演習「健康」	担当者：今西 先生	参観日：30年12月 7日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫について アクティブラーニングを主体にした授業構成がなされていた。・ 集中力を高めるための工夫について 随時机間巡視をされており、進度の遅いグループや話し合いが脱線しかけているグループに適宜声掛けをされていた。・ 参加型、主体的な学びのための工夫について グループワークを行う際に、話し合いを終える時間の目安、(リーダーや発表者等の役割分担を決めること等の)話し合いの進め方、この話し合いのねらいを明確に指示されていたため、自分たちのペースで話し合いを進めていた学生も途中で気付いて、話し合いを時間内に終えるための工夫をしたり、この話し合いのねらいを意識した軌道修正を行っている姿が見られた。・ 知識習得のための工夫について 話し合い後のまとめの発表の際に、先生がホワイトボードに必要な事項を書き込みながら、発表者と対話をしながら聞かれていたため、学生達も他の学生の意見として必要な知識を得ていたように見えた。・ 授業環境の工夫について 話し合いがしやすいよう、机の配置を変えやすい 1217 教室を利用されていた。移動教室で行うことで、ホームルームでの座学とは違った雰囲気の中で授業を行われていたように伺えた。		
その他気付いた点： 学生達が主体的に話し合いをすることのできる環境構成や環境の工夫について大変勉強になりました。ありがとうございました。		

科目名：保育内容演習「表現」	担当者： 野村 先生	参観日： 30年11月30日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫について 授業のはじめに前回の復習をされており、学生が前回からの流れで内容がより理解しやすいよう工夫されていた。 ・ 集中力を高めるための工夫について 授業内で「理論を提示する部分」「理論を基に実際に活動する部分」「まとめの部分」が静—動—静となっており、それらが明確に分かれていたので、メリハリがあると感じた。 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫について プリントに記入しながらの授業は、ただ受け身で授業を受けるだけではなく、書き込むという作業を通して、授業に参加する自覚を生んでいるように見受けられた。 ・ 知識習得のための工夫について 授業中に「一番大切なのはここ」という先生の発言があり、90分間の授業時間内で最も大切な内容が明確であった。 ・ 授業環境の工夫について チョークを用いての板書に代わり、パソコンとプロジェクタを利用しての授業であった。これらの機器を用いることで字が読みやすく、先生の記入も早く、情報量が多くなってもスクロールして戻ることができるメリットがあると感じた。また、あえて事前に準備したパワーポイントの資料ではないので、学生の声を拾い、必要に応じて書き込んで示すことが出来る点もメリットであると感じた。 		
<p>その他気付いた点： 授業時間内の座学の部分でも情報機器を効果的に使うことで学生の集中力を引き出すことにつながる良いモデルを拝見したように思います。大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>		

科目名：造形表現	担当者：井澤 先生	参観日： 年 月 日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業構成の工夫 各課題で継続的な作業に取り組みであった。 学生自身の関心を出発点として、取り組める構成となっており、一つずつの時間が大変有意義である。 ・集中力を高めるための工夫 学生に対する個別の言葉掛けが、作品に基づいてなされており、自然と作品制作に意識が向く。 製作の過程に繊細な作業が不可分に組み込まれており、ふと気を抜けるところと、注意深く取り組むところとのオン・オフがはっきりと出ている。それにより、学生は特別な指示がなくとも、自然に集中して取り組んでいる。 ・参加型、主体的な学びのための工夫 活気のある教室内で、学生一人ひとりが声を上げやすい環境であった。しかしながら、学生は決して散漫であるわけではなく、目の前の課題に対して積極的に質問をし、学生同士でアドバイスをしあうなどの光景がみられた。もともと、実技が伴う科目の特性であるとはいえ、実技課題そのものに学生の主体性が発揮されなければ、以上のような光景は見られないと推測している。 ・知識取得のための工夫 提示する知識、技能を断続的に扱いながら製作に取り組むため、記憶の定着がなされやすいだろうと思える。基本的な用語や言葉などが実際に制作の過程と共に示されていたため、視覚と聴覚と触覚に伴う伝達であり、より効果的であろうと思われる。 		
その他気付いた点：		

科目名：保育内容総論	担当者：花岡 先生	参観日： 年 月 日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・授業構成の工夫 毎時の復習として、現在どのような話をしており、これからどのような話をしていくのか、しっかりと時間を取って提示している。 実際に学生自身との自然なやり取りを授業内に取り込めており、学生は自然体でありながら授業内容の確認をすることができていた。・集中力を高めるための工夫、参加型、主体的な学びのための工夫 数日前に起きた出来事などの時事を、授業内容と絡めながらの導入をはかっており、授業内容と実際に私たちが暮らす社会との接点を保っていた。暮らしと授業の内容とを切り分けて考えるのではなく、身近なところから問題を提示していくのは非常に効果的であったのではないかと思われる。・知識取得のための工夫 基本的な用語や言葉などが実際の社会上の出来事と共に示されていたため、イメージしやすく、効果的であろうと思われる。		
その他気付いた点：		

科目名：保育・教育実践演習	担当者：森崎 先生	参観日：30年11月27日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>模擬保育を行っていた。時間の関係上、4,5名のグループで指導案を作り、代表者1名が模擬保育を行うという形式で行われた。学生が、観察者や子ども役などに分かれて実施されていた。実施後も振り返りをできる時間も設けられており、観察者からの意見、子ども役からの意見、実施チームの反省点など、学生同士の意見交換もできるので、とてもよかったと思う。100分授業になると、グループで発表という形ではなく、実施時間を少し短く行えば、一人で指導案を立て、実施という形がとれて、学生にとってよりよい経験ができるのではないかと考える。</p>		
その他気付いた点：		

科目名：保育内容演習「言葉」	担当者：村上先生	参観日：30年12月3日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>毎回の授業で予習をさせており、予習内容を学生が発表を行っていた。グループを作り、順番で行っているようであった。100分授業で行われることによって、自分で学んできたことが今まで以上にしっかり発表時間が取れると考える。重要な要点は一人一人学生が理解しているか、先生が学生の席まで行き、回って確認をされていたので、それぞれの学生の理解度を確認することができていると考え、教員側がその点を分かっていたら、授業の進め方も変わってくると思う。また、近くの席の学生同士、意見交換を簡単に行っていたが、100分授業になることで、意見交換の仕方も変わってくるだろうと考える。</p>		
その他気付いた点：		

科目名：保育内容演習(人間関係)	担当者：川崎先生	参観日：2018年12月6日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書やプリント、グループワーク、学生の黒板への板書など、聞く場面・考える場面といった授業内での展開があり、メリハリのある90分間であった。 ・教科書を学生が読んだり、グループワークの場面では学生達が積極的に意見を交わしたりする姿が見られた。また教員は、グループワークの中からでた意見を取り上げ、その意見に共感したり、解説を加えたりしており、学びが広げられるような助言をしていた。 ・教科書の使い方を工夫している場面も見受けられた。教科書内のコラム(事例と解説が記載されている)を全文印刷するのではなく、解説部分を隠し、事例のみを印刷して配布していた。その事例から読み取れることについて学生が考え、グループワークを行った後教科書を開くよう伝え、コラムの解説を確認した。教科書の使い方一つで学びが定着すると思った。 ・以前の授業で行った「ブレインストーミング」の手法を、今回の授業の中でも用いており、15コマの中の一回だけで終わるのではなく、繋がりを持たせていることを感じた。 ・授業担当者が保育現場の保育者であるため、実際あったエピソードを用い、教科書の内容と交じ合わせながら進めており、非常に分かりやすかった。 ・教員の言葉は明瞭で、聞き取りやすいスピードであった。また机間巡視しながら全体を見て、丁寧に授業が進められていた。 		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名：保育内容演習(環境)	担当者：芝田先生	参観日：2018年12月6日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業参観日は、翌週から始まる保育実践研究の発表の為に教材研究を行う日であった。授業の初めに、教材研究や指導計画を立案する際の留意点やポイントを伝え、その後グループごとの教材研究に入った。・ 教員は、各グループを回り、学生の声に耳を傾けながら丁寧なアドバイスを行っていた。・ 保育実践を行う為の材料や教科書は豊富に揃えられており、意欲を持って取り組める環境であった。・ 実際に自分たちで保育計画を立案し、実践までに至る過程を経験することや他のグループの発表を見て学ぶことは、年明けの保育実習に向け、実践力がつくと感じた。		
その他気付いた点：		

科目名：臨床心理学	担当者：村上 凡子 先生	参観日：H.30年11月30日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ 事前に次回の授業プリントを配布し、一読し言葉の意味調べやキーワード・キーセンテンスとなる個所を調べておくという予習をしているので、自己学習したことの確認や質問を積極的に行えると感じた。・ 授業の初めに、担当者が予習内容を発表する場をつくり、・ ワークシートを使用し、講義内容がまとめられており、自身で記入し、仕上げていくことによって、理解できるように作成されていた。・ グループ討議も行われ、意見交換をしながら、色々な視点から考えることができる。・ 自分で学習する時間、グループで取り組む時間とメリハリがつけられ、集中して取り組むことができると感じた。・ これまでの内容の復習や他の授業で学習していることにつなげながら、講義されており、学習の積み上げができる。・ 授業の最後には、自分が新しく学んだことと感想を書くことで、今日の授業内容の復習ができ、読み返した時に、内容だけでなく、その過程においても振り返りができると思った。		
その他気付いた点：		

科目名：在宅保育	担当者：森下 順子 先生	参観日：H.30 年 11 月 26 日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ テキストに沿って、授業を進める中で、パワーポイントを利用して、その内容を視覚的にも解りやすくまとめられており、集中して取り組めると感じた。・ パワーポイントの中で、参考資料も加えられており、より知識を深められるように作成されていた。・ これまでの内容の復習や他の授業で学習していることにつなげながら、講義されており、学習の積み上げができる。・ 時には、学生に質問をする等、対話的に授業が進められ、これまでの振り返りや習得の確認が、学生自身でもできるよう工夫されていた。・ メディア情報、社会情勢等につなげた話も聞け、学生が興味や関心をもって、学習しようとする環境をつくられていた。・ また、実体験に基づく話も加えられ、より身近に、より具体的に感じたり、考えたりできる機会となり、理解を深められると感じた。		
その他気付いた点：		

生活文化学科
生活文化専攻

科目名：社会福祉	担当者：桑原 先生	参観日：2018年11月27日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>授業構成の工夫では、復習を最初に入れながら、新たな単元に進む等積極的におこなわれていた。</p> <p>講義形式なので学生の集中力を維持することはなかなか難しいが、パワーポイントを用いながら配布したプリントの穴抜き部分を記述させ、完成させる等、主体的な学びにつないでいる。</p> <p>知識習得のための工夫としては、わかりやすい事例や興味のある事例を紹介して理解を促す工夫がおこなわれている。また、質問し、学生に回答させて授業に主体的に参加できるように工夫されている。</p> <p>授業環境を整える工夫としては、座席を指定するなどの工夫をおこなっているが、始語をしている学生や寝ている学生への注意がなされていない点が気になった。口頭注意などの対応が必要である。</p> <p>最後に100分授業に転換されることについて教員が触れていたが、学生も教員も共に大変といった感じであった。講義のために、100分授業への対応はなかなか難しそうで、さらなる工夫を要するといえる。</p>		
<p>その他気付いた点：</p> <p>パワーポイント、プリント、テキスト活用と多面的な展開をしている点が良かった。</p>		

科目名：造形表現	担当者：井澤正憲 先生	参観日：2018年12月5日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>授業形態が演習なので、参加型であり、学生は生き生きと楽しそうに取り組んでいた。時間内全てにおいて集中力を持続することは困難であるが、教員は、適宜アドバイスを施し、高めるようにしている。</p> <p>保育科2年生の選択科目なので比較的人数も少なく、一人ひとりの進み具合や感性に合わせて指導している。作る作品も異なり、主体的な学びの工夫が凝らされ、授業構成も工夫されている。</p> <p>また、作業しながら作品制作のための技術や材料に関して、口頭説明だけでなく、黒板に板書し、目に見える形で表現し、知識習得のための工夫をしている。</p> <p>教室内には、参考になるように過去の作品も展示され、完成形をイメージしやすくし、授業環境を整える工夫をも施している。</p> <p>以上より、100分授業への対応は十分可能であるといえる。むしろ、作品作りには時間は必要である。</p>		
その他気付いた点：		
<p>すでにされているかもしれないが、完成した作品の発表を学内展示等積極的に行うと、さらに主体的な学びの効果が上がるのではないかと。</p>		

科目名：生活工芸	担当者：井澤 正憲 先生	参観日：2018 年 12 月 5 日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・90 分の授業時間の中で、型取り作業とアクセサリーのデザイン作業とに分けて実施していた。・作業が中心なので自ずと学生の集中力は高まっていた。・作業が中心なので学生が主体的に授業に参加する形になっていた。・学生の個別の質問に丁寧な指導がなされていたので、進捗に大きな差が生まれないようになっていた。・工芸のための教室であるので、最低限の環境は整っていた。		
その他気付いた点：		
演習で、しかも作業が中心の授業は 90 分授業と大差なく 100 分授業が行えると思われる。		

科目名：秘書実務1	担当者： 浅田 真理子 先生	参観日：2018年12月5日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・座学と演習(ロールプレイング的な内容)がうまく組み合わせられていた。 ・座学のみではなく、実際に身体を動かす機会が設けられていた。 ・適宜、学生に問いかけるなど参加意識を高める工夫がなされていた。内容についても、なぜそのことを学ぶのかが明示されていたので、学生も能動的な姿勢で学んでいた。 ・学生の個別の質問に丁寧な指導がなされていたので、進捗に大きな差が生まれなくなっていた。 ・全般的に静粛を保ちつつも、メリハリをつけた対応をしていた。 		
<p>その他気付いた点： 特になし。</p>		

科目名：社会的養護内容	担当者：西原 先生	参観日：30 年 12 月 5 日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前回授業の復習から入り、知識の定着が図られていた。 ・ スライドで提示される資料がわかりやすい。文字の大きさも見やすく簡潔に作成されている。 ・ 配付資料が丁寧に作成されており、授業準備に尽力されている様子が窺える。 ・ 声が大きく、聞き取りやすい。 ・ 例え話の際、先生の話し方に演技力があり楽しんで聞くことができる。 ・ 開始時、学生の私語が気になったが、すぐに授業に集中していった。 ・ 欠席者の配付資料をどうするか、学生から先生に尋ねており、普段からの先生の指導により、学生が気配りできているのが分かった。 ・ テンポ良く進んでいくので、時間が早く感じられた。 ・ 動きを取り入れられており楽しみながら興味を持って取り組むことができ、参加型の工夫がなされている。 		
<p>その他気付いた点：</p>		

<p>科目名：造形実習</p>	<p>担当者：井澤 先生</p>	<p>参観日：30 年 12 月 5 日</p>
<p>テーマ：100分授業対応に向けて</p>		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身に向き合う集中力が養われる授業である。 ・各自の作品に取り組むため、まさに主体的な学びが実現できる。 ・声が大きく、聞き取りやすい。 ・先生の口調が柔らかく質問しやすい雰囲気である。 ・実習室ということもあるが、通常の教室形式の配置とは違うため、この授業にふさわしい環境で楽しい気分になる。 <ul style="list-style-type: none"> ・準備や細やかな気配りが必要なため、単に楽しいだけではなく、仕事に必要な計画性、配慮さらには、人間性を養うことができる授業だと感じた。 ・3 コマについて、説明や作業時間配分などが効率よく、授業構成がなされている。 		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名：フードコーディネイト	担当者： 藤澤先生	参観日：30年12月3日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫 よく目にする広告から、文化について興味を引き出す工夫・ 集中力を高めるための工夫 自らの環境を振り返らせ、考えさせる。・ 参加型、主体的な学びのための工夫 アイデアをスケッチさせ、的確な助言・ 知識習得のための工夫 地域の伝承の再認識・ 授業環境の工夫 グループワーク出来る環境		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
「如何に学生の集中力を維持させることが出来るか」という点で、教師と学生とのやり取りが非常に参考になった。学生一人一人に声を掛け、密度が濃く楽しい授業であれば100分は問題ない。		
今までの15回授業が14回になっても、授業時間数は変わらないので、より密度の濃い時間が得られる。		
その他気付いた点：		

科目名:秘書実務	担当者: 浅田真理子	参観日:30年12月3日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫 到達目標の明示・ 集中力を高めるための工夫 内容についての意見交換・ 参加型、主体的な学びのための工夫 学生一人一人への的確な助言・ 知識習得のための工夫 配布物の工夫(教材をより分かりやすく興味が引き出せる内容)・ 授業環境の工夫 グループワーク出来る環境		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>授業構成の工夫は非常に参考になった。</p> <p>授業全体の流れを説明し、到達目標を確認させることで、学生が到達目標を各自設定出来、集中力も上がる。</p> <p>また副教材を利用する事で、より内容が理解できるとともに学生とのディスカッションも生まれる。</p>		
その他気付いた点:		

科目名:CG	担当者:井澤先生	先生	参観日:2018年12月4日
テーマ: 100分授業対応に向けて			
【観点の参考項目】			
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫			
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)			
<ul style="list-style-type: none">● 授業の基本構成が、教員が説明する・学生が作業をする、の繰り返しでできているので、あまり退屈しないで授業が進んでいく。● 作業内容は、できるかぎり学生の興味を引きそうな内容を選択している。● 指示内容はある程度あいまいになっている(色の指定や線の長さ、図形の大きさなど)ので、学生は自分の好みに合わせて作業内容を変更することができる。● このため、指示のあいまいさの残っている作業について、学生は主体的に取り組んでいる。● 作業が完了したあと、作業内容のファイルを提出させることによって、授業参加を促している。● このように授業を構成することや作業内容を提出させることは、90分授業でも100分授業でも有効だと思う。● 多目的コンピュータ室で大人数の授業なので、コンピュータ作業にトラブルが発生すると、その対処のために授業が中断してしまう。			
その他気付いた点:			

科目名：プログラミング	担当者：大山 先生	参観日：2018年12月5日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">● 授業の基本構成が、教員が説明する・学生が作業をする、の繰り返しでできているので、あまり退屈しないで授業が進んでいく。● 作業内容をそれぞれ提出させることによって、授業参加を促している。● 授業用プリントは一部穴あきになっていて、授業で答え合わせをしている。● 以前の授業で扱った内容を題材にしてプログラムを作成させることによって、復習を促している。● 新規のプログラムの内容解説において、重要な点は繰り返し説明している。 その際、例題を作成し、学生を当てて、答えさせている。● このように授業を構成することや作業内容を提出させることは、 90分授業でも100分授業でも有効だと思う。● 多目的コンピュータ室で大人数の授業なので、コンピュータ作業にトラブルが発生すると、 その対処のために授業が中断してしまう。		
その他気付いた点：		

科目名： 地域子育て子育て支援論	担当者： 森下先生	参観日： 2018 年 11 月 28 日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>実習が終ってからの授業だったので、記憶を呼び覚ますために授業で使っていたワークシートを使い、丁寧に振り返りを行っていた。その振り返りも近隣者でグループになりお互いの意見交換を行いながらだったので、気安く取り組めていたように感じた。また、意見交換の際、制限時間や発表することを伝えられていたので、より積極的に取り組んでいたように感じた。</p> <p>保育 1 年全員での授業ということもあり、セシリアホールでの授業だったこともあり発表はマイクで行っていた。普段とは違う発表の仕方も学生には緊張が生まれるのかもしれない。</p> <p>DVD の視聴も授業に取り入れられていた。ただ見るだけではなく、メモをさせるのは良くあるが、メモの提出を求めず、書くことに集中して、視聴内容を逃さないようにとの指導がされていた。メモを取るようにとの支持は良く行いが、理由や何が重要なのかをはっきりと伝えていることで、学生も理解しやすく戸惑わないような工夫がされていた。</p> <p>授業では意見交換と発表を多く取り入れられており、時間もとっているように感じた。また、それぞれ出てきた意見に対して、否定はせずどれも正しいとの考え方で授業が進められていた。そのため、学生がのびのびと考え、いろんな考え方や感じ方があることを知り、保育者としての心のありかたを学んでいるように感じた。講義中心の授業ではどうしても学生の動きが少なくなり、集中力の持続が難しくなるが、意見交換や発表を入れることで学生に動きが出て一息入れられるような時間になっていた。100 分授業を行うに当たっても、このような学生に動きが出るような内容を盛り込むことは良いと考える。</p>		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名：食品学Ⅱ	担当者：西出先生	参観日：2018年11月29日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>授業はじめは前回の復習として、小テストの返却と共に答え合わせと振り返りを行っていた。この授業は視聴覚教材としてプロジェクターを使用しており、写真の映像がとて多く、学生にはわかりやすい内容になっていた。また重要語句も映像として写され、わかりやすい工夫がされていた。また、今回の授業が豆類ということもあり多種類の実物の豆を学生回覧することでより理解を促していた。普段目にする事の少ない豆などもあり、とても分かりやすい工夫だと感じた。その分、授業準備はとても大変なものであったと想像できるが、分かりやすく丁寧な授業だと感じた。また、講義形式の授業ではあったが学生に教科書を音読させる、質問を投げかけるなどをして、教員が話し続けるといった一辺倒な授業ではなく参加型の授業への工夫もされていた。</p> <p>授業最後も今回の授業の復習として小テストが行われていた。授業をきちんと聞いていなければ答えられない問題で、毎回その形式を導入されているようである。集中して授業を聞くという姿勢や授業の復習にも繋がる工夫がされていた。</p>		
その他気付いた点：		

科目名：英語 I	担当者： 辻 先生	参観日：2018 年 11 月 16 日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・授業構成の工夫として、はじめに英語の絵本を使って英語の意味の理解を深めていた。・集中力を高める工夫として、学生の要望に応えた英語の曲を使用し、プリントの空欄を埋める問題を作られていた。それにより、学生も知っている歌詞の英語なので聞きやすく、また解答合わせとして1人1人当てていくため、皆集中してリスニングをしていた。・参加型として、2・3人のグループを作り、グループとして問題に答える作業も行っていた。協力が必要な内容となっておりそれぞれが必然と参加できる授業構成となっていた。・知識習得の工夫として、覚えたことを確認するため先生の質問に時間内に解答できるか楽しいゲーム方式で行っていた。学生も楽しみつつ単語の習得に励んでいた。・授業環境として、少人数だったため、授業のほとんどをグループでまとまって行っていた。質問も学生同士確認しながらできるため、より理解が深まっていたように感じる。		
その他気付いた点：		

科目名：保育内容総論	担当者： 花岡 先生	参観日：2018年11月30日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・保育の実習が明けてはじめての授業だったため、授業のはじめに実習についての声かけを行っていた。学生がどんなことがあったなどの話から、授業内容につなげ説明を行っていた。・集中力を高めるため、間で数分の休憩をはさみ、後半時間を有意義に使っていた。学生も眠く重たい頭をリフレッシュすることにより、後半時間また集中して受けることができていた。・参加型として、人数が多いため、全員に問いかける質問に対し選択肢を与え、分からないなら分からないでもよし、どれかに反応するよう促していた。・知識習得の工夫として、前回の復習から入り、学生に問いかける形で行っていた。また、以前に習得したことを理解できているか確認をしていた。		
その他気付いた点：		
<ul style="list-style-type: none">・教科書を忘れた学生に対し、隣に見せてもらう場合は丁寧に頼むようにと普段から礼儀・マナーに気をつけられていた。		

生活文化学科
食物栄養専攻

科目名： 食品学Ⅱ	担当者： 西出充徳先生	参観日：30年11月22日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業の構成は、前回に実施したテストを返却(10分)→前講義内容の復習および解説後テスト(15分)→今日の講義という構成がなされており、時間がゆったり流れているように感じる構成であった。・ 集中力を高める工夫としては、講義は、すべてパワーポイントを用いており、学生の手元には教科書と筆記用具のみでした。パワーポイントは、重要箇所は赤字で新しい専門用語は青字などで工夫されていた。学生は、講義を聴講しながら教科書の重要な場所にチェックをしていた。集中力がなくなる時間には、先生の声が小さくなるり、学生達は、また集中するようになった。・ 参加型、主体的な学びのための工夫としては、学生が答えられるような事柄についての質問をし、学生に回答を求めている。また、講義終了前に、教科書を先生が読み、学生各自が重要箇所に印をつけていた。・ 知識習得のための工夫としては、重要な箇所は、とてもゆっくり解説をし、何度も反復されていた。・ 授業環境は、視聴覚室で行われ映像の見やすさ、イス、机のバランス、室温ともによく、授業に集中できる環境であった。		
その他気付いた点：		
私が聴講講義内容は、豆類であり、大豆や小豆の品種については、すべての種類が映像で示しており分かりやすかった。		

科目名：食品各論実験	担当者：西出充徳先生	参観日：30年11月30日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業の構成は、事前学習(実験が始まるまでにチェックされた。(10分)→実験の解説(本日はリンゴジャム)40分→解説終了後に、指名した学生に、実験操作を復唱させる(10分)→各班に分かれて実験開始(90分)→終了のまとめ(10分)に構成されていた。保存性の必要なリンゴジャムを作る実習であり、長時間かかるはずであるが、事前学習をさせることで時間内に終了できる配慮がなされていた。・ 集中力を高める工夫としては、実験方法の解説は、すべてパワーポイントを用いており、学生の手元には、事前学習ノートがおかれていた。パワーポイントは、視覚で理解できるように、図示されており、重要箇所は赤字などで強調するなど工夫されていた。・ 参加型、主体的な学びのための工夫としては、実習班は、3～4名で構成され、学生一人一人が参加できるように工夫されていた。・ 知識習得のための工夫としては、講義において学習した大切な知識を、実験操作の解説に組み込まれており実践しながら知識が身につくように工夫されていた。・ 授業環境は、調理実習室で行われ、実験に必要な器具(糖度計、リンゴを洗う新しいスポンジ)などきちんと準備されていた。		
その他気付いた点： 学生達は、楽しいそうに、積極的に実験に取り組んでいた。 数人の学生が、この実験が一番楽しいと言っていました。		

科目名： 臨床心理学	担当者： 村上 先生	参観日： 2018年 11月 12日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>授業無いでは以下の様な工夫が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元のテーマを板書していた。 ・ワークシートを準備し、配布。 ・学生が先生役となって授業を進行していた。 ・最初に何をするかを明示し、到達目標を具体的に示す。 ・課題として予習をかし、ノートを確認して印鑑を押す。 ・学生は資料を読み、分からないところは下線を引くなど、自主学習を行う。その間、教員は巡視する。 ・資料に関する説明があまりないが、学生はすることが分かっているようで自主的に作業を始めていた。 ・順番に当てて発表させること、偏りを無くす配慮がみられた。 ・書写カメラやパワーポイントの映像など、視覚的に示す工夫がなされていた。 ・ワークシートに書くことは最小限に。 ・事前に用意した班によるロールプレイ。その間、他の学生は記録。 ・最後にグループによる討議。ロールプレイを行った学生が巡視。 ・最後に、まとめ。パワーポイントで要点をまとめ、振り返る。 ・課題を与え、自宅学習を促していた。 		
<p>その他気付いた点：</p> <p>資料やロールプレイなど、教員からの説明が少ないため、学生が理解しているのか不安に。</p>		

科目名： 情報科学	担当者： 中西先生	参観日：2018年 11月 15日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>以下の様な工夫が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に前回の復習を行う。 ・プリントを配っての演習形式 ・学生は授業を聞きながら、問題を解いていく。 ・学生を指名し、答えさせて授業を進める。 ・最後にまとめを行うと共に、次回の予告と資料を配付し、家庭学習を促す。 		
<p>その他気付いた点：</p> <p>学生の私語が無い。</p> <p>その一方で、学生からの反応も無いため、理解しているのか不安。</p> <p>学生が無言で席を立ち、トイレ等に出かける姿が目立つ。</p> <p>講義はかなり早口でなされているため、ついて行けない学生がいるのではと危惧する。</p>		

科目名：食品衛生学	担当者：松本 先生	参観日：30年11月27日
テーマ：100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>他大学を非常勤講師として教えておられる松本先生から100分授業に向けた工夫を得るために参観する。</p> <p>①【授業構成】</p> <p>この授業参加では、多くの内容を進める方法について学ぶべき点が見出された。具体的には、学生に講義する方法については、最初から全てを網羅した教え方に重点を置き、ペースを上げて進行する場合と、必要な箇所に多くの時間をかけ、その他は省くタイプのような二極化が多いと思われるが、この松本先生の授業では、その様な二極化ではなく、学生の理解度により重要部分と少し省けるような場所について、声や説明する言葉の速度に強弱を明瞭に分けて講義されていた。このことは、一般に教員としては周知されていることのようにであるが、実際に授業を実践する場合には、「これもあれも重要で学生に伝えなければ・・・」と欲が出てしまうため、周知されているはずのことと実践での行動は相反する場合がある。このことは自分にとって授業の経験を積んでも難しいことに思われる。</p> <p>しかし、今後は90分から100分となり1回の講義時間は増えるものの15回から14回での回数が減となる実際には、100分となれば心理的に圧迫を感じることとなりそうである。そのような体制に対して松本先生の授業の進め方から、100分授業に対するヒントが得られた私は考える。</p> <p>②【集中力を高めるための工夫】</p> <p>やはり、この授業参観からも得られた様に、学生の集中が途切れそうな場合には、学生への問いかけが必要であることを改めて認識した。</p> <p>③【参加型、主体的な学びのための工夫】</p> <p>④【知識習得のための工夫】</p> <p>授業終了時に、その授業で学んだことを毎回、簡単な10cm位の用紙に「ミニメモ」としてまとめさせて提出させていた。</p> <p>⑤【授業環境の工夫】</p> <p>授業進展には、テキスト内容にもパワーポイントを利用し、テキストの理解を深めていた。</p> <p>その他気付いた点：</p>		

科目名：栄養指導論実習Ⅱ	担当者： 塚 みどり 先生	参観日： 30年11月22日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>実際に栄養士となり、栄養士指導を目指す学生達に社会での実践的な栄養指導を学ばせる授業から、どの様に個々の性格や能力の違いがあるなかで、栄養士としての人間的で情動的な指導を学ぶことは、自身もつ実験や実習の他、社会的へ出て即に必要な講義内容を学ばせることのヒントをえるためこの授業に参加した。また、この授業から今後の時間的な環境の変化にも適応できるヒント得るため、塚先生の授業参観を受講した。</p> <p>①【授業構成】</p> <p>授業は、学生達が二人一組になり栄養士役と指導される側に分かれ、各組でテーマ別に非常に実践的な指導をしていた。テーマ内容は、糖尿病患者、妊婦、高齢者、腎臓病患者、小児の栄養指導などと学生達がテーマ別に時間内で説明していた。普段の講義や実験で見られる様な学生達の面影はなく、非常にリアルな栄養指導の授業を取組んでいた。学生達は、個々にかなり時間をかけて練習してきた様子であった。指導者の塚先生にどれくらい指導するのに時間がかかったのかと質問すると、塚先生は、個々の問題点を指摘し、学生達自身に自分で考えさせ、教える側が学生達にどれだけ授業に真剣に取り組んでいるのかを伝えただけで、後は学生が努力したと返答を頂いた。つまり、学生が自主的に大切と気付かせることにより、授業時間が変更しても対応できるのではないかと思われた。それには、塚先生から教わった教える側の真剣な取り組みと、学生達が自ら学ばなければならないということだと、これからの授業にヒントを得ることができた。</p> <p>②【集中力を高めるための工夫】</p> <p>発表での持ち時間や緊張感、さらに学生達同士で評価させる取り組み。</p> <p>③【参加型、主体的な学びのための工夫】</p> <p>指導する場合には、必要最低限のことを伝え、学生達に自ら考えさせ、さらに判断させること。</p> <p>④【知識習得のための工夫】</p> <p>発表前に学生達に良く調べさせる工夫が見られた</p> <p>⑤【授業環境の工夫】</p> <p>学生達に少人数での発表の場を設けること。</p> <p>その他気付いた点：</p>		

<p>科目名：子どもの食と栄養</p>	<p>担当者：藤澤 先生</p>	<p>参観日：2018年11月12日</p>
<p>テーマ：100分授業対応に向けて</p>		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 テキストを見直すなど、かなり時間をかけて前回の復習を行っていた。 ・ 知識習得のための工夫 テキストに直接書き込む作業などを学生にやらせていた。 ・ 授業環境の工夫 少し遅いのでは？と思うぐらい、ゆっくりとしゃべっていた。 常に前を向いて話していた(テキストを手にも持っていない下を向かない)。 学生から見て、教卓の左、中央、右と、時々立ち位置を変えて話していた。 		
<p>その他気付いた点：</p>		

科目名：運動生理学	担当者：後和 先生	参観日：2018年11月22日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ 集中力を高めるための工夫 時々学生を指名して、答えさせていた。・ 知識習得のための工夫 スライドの記載内容を、自分のノートの記入させていた。また、そのための時間をちゃんと設けていた。		
その他気付いた点：		

科目名： 地域文化論	担当者： 千 森 先生	参観日： 30 年 11 月 29 日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前回の復習を行うことにより、本時へスムーズに繋がっていました。 ・ 導入部分で、歴史的な背景を説明されていたことは、本時への興味を駆り立てるものであり、さらに講義の理解度が増すものでした。 ・ 授業プリントを説明された後、視聴覚教材を用いた説明は前述の内容を再確認し、知識を理解することに有効なものでした。さらに、授業形式が変化することによって、聴講の集中力が一新され、学習意欲が増すものと考えます。 ・ 授業内容と、単元の課題を自ら見出して記入させる自記式プリントの様式は、しっかり聴講していなければ記入できない内容であり、自主的かつ参加型の学びを促すためにたいへん有効なものでした。また、同プリントには返却希望の有無を問う項目を設けられ、本時に対する学習の姿勢や意欲を読みとることができる内容も盛り込まれていました。 ・ 授業終了後に記入する振り返りシートは、5項目で構成されており、時間を要せず回答可能な内容から、学生自らの受講態度の反省を促すとともに、教員にとっても学生について端的に把握できるため、是時参考にさせていただきたいと考えています。 		
<p>その他気付いた点：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 興味深い講義内容にもかかわらず遅刻してくる学生が目立ち、大変残念に感じました。 		

科目名： 子供の食と栄養	担当者： 藤 澤 先生	参観日： 30年11月26日
テーマ： 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<ul style="list-style-type: none">・ 導入では、前回の授業(離乳食の調理実習)に関して、「作ってみて」、「食べてみて」どう感じたかを問いかけていました。机上の知識のみにとどまることなく、体験(実習)することによって理解を深めることができたかを確認し、本時へスムーズにつながるようにされていました。・ 本時は教科書に沿って進行しており、ポイント箇所を繰り返し強調するとともに、チェックすることを指示し、途切れていた学生の集中力がつながるように工夫されていました。・ 「幼児向けの弁当」献立作成の課題を出された折、興味を示さない学生や課題を進めていくことが困難であると思われる学生に対して、次のような助言をしていたことが印象的でした。それは、インターネット等で得た情報を模倣してもよいこと、実際に弁当を作成するときは家族の助けを借りて調理してもよいと指導されていた点です。このことは、学生が興味をもって課題に取り組めるように促し、主体的に学ぶ意欲を育むという観点からみると有効であると考えます。		
その他気付いた点：		
<ul style="list-style-type: none">・ 一部には集中力を欠いていると見受けられる学生がいました。教員は、授業内容に工夫を凝らし、学生が集中して取り組めるように対応しているにもかかわらず、学生に届いていないことが残念でなりません。		

科目名：栄養指導論 I	担当者：堺みどり先生	参観日：2018年12月3日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>堺先生の授業を参観し、特に印象的であったことは具体例がふんだんに利用されていることであった。</p> <p>授業は成人期の栄養指導についてであったが、学生が具体的に栄養士として学生が働いた際にどのようにかわるかを中心に話が進められ、学生にとって自分に関わる事として聞けるので、分かりやすく興味をもてるように勧められており、大変参考になった。</p> <p>授業構成は穴あきのプリントと、授業前に書かれている板書を中心に進められていた。ホワイトボード一面に書かれた板書が順に説明され、手元のプリントが埋められていく授業は、ホワイトボードを見ることで、授業内容を考えることができ、かつプリントを埋めることで学生の眠気を防ぐことができていたのではないかと思う。</p> <p>集中力を高めることや主体的な学びにつなげるための工夫として、具体例を有効に活用していたと思う。具体例の内容は、学生が今説明されている内容が自分に関わる事だと理解できるような内容で、興味を持ちやすい話題としてあげる具体例の有効性がよく分かった。</p> <p>100分授業に向けて、堺先生のとられていた具体例の活用による学生の興味を引くことや、ホワイトボードによる授業内容の整理といった方法を、参考にしていきたい。</p>		
その他気付いた点： 本学卒業生でもある堺先生の授業はやはり学生の目線をよくご存じで、その点を踏まえた授業は必要であるとよく分かった。		

<p>科目名：健康管理概論</p>	<p>担当者：土井有美子先生</p>	<p>参観日：2018年12月3日</p>
<p>テーマ：100分授業対応に向けて</p>		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>土井先生の授業では、穴あきのプリントを活用し、教科書の内容を進められていた。</p> <p>授業の構成としては、授業中ごろに休憩としてストレッチを導入されていて、授業の長さを楽に感じられる工夫がなされていた。特に100分の授業を行う際には、こういった工夫は大変重要であると感じられた。</p> <p>集中力を高めるために、また参加型、主体的な学びのために土井先生はランダムに学生を指名し、教科書を読ませる、あるいは質問に答えさせるといったことを行っていた。さらにそこででた回答に先生が補足を加えることで、学生が今自分が持っている知識に加えてどんなことを加えていったらよいかを示されていた。そのようなやり取りが、学生の主体性をもたせることにつながっているように思えた。</p> <p>知識習得の為、土井先生は先生の担当科目である調理学、給食管理といった科目の内容を所々つながりのありそうな場面で挟むことで、知識を関連付けやすくしていた。こうすることで、異なる科目の知識を結び付け、より深い知識として身につけられる方法だと感じられた。また、栄養士実力試験の問題も取り入れており、知識習得のために、テスト対策という形でポイントを絞った形で知識を身につけられる方法であると感じられた。</p> <p>100分授業に向けて、体を動かすレクリエーション的なものや、異なる科目の知識と結びつけて伝える方法など参考にしていきたい。</p>		
<p>その他気付いた点：栄養士として勤務されていた土井先生の授業は、実践的なアドバイスを交えたもので、実際の現場を知っていることは非常に大切だと感じられた。</p>		

科目名:キャリアデザイン	担当者: 塚 みどり 先生	参観日:H30年 11月 20日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>本授業は、12月8日(土)における「栄養士実力認定試験」への対策講義的な位置付けで行われるものであった。授業は、各専任教員の担当分野について週替わりでの講義を行うものであった。今回の内容は応用栄養学ならびに栄養指導論に相当するものであり、スクリーンに映し出される模擬問題を各自取り組み、順々に指名された代表者が問いに答えていくというスタイルで行われた。</p> <p>100分授業における重要課題として、集中力の持続がひとつ挙げられると思う。本授業では、スクリーンを用いて行っており、これにより顔を上げて受講する必要性から集中散漫の抑制、授業外行為の防止、また眠気を感じたなど集中力を欠く学生の発見などが効果として期待されると見て感じた。</p> <p>さらに、順々に学生を指名して回答させることは、間違った回答としたりたくないという気持ちや他の学生に負けたくないという闘争心を刺激すると学生らが意見しており、多角的にやる気の向上すなわち集中力の増加に機能しているようであった。また、本講義の趣旨である試験対策的な学力向上にも効果的であることから、実に理にかなった授業形態であると言える。</p> <p>担当の先生は、学生たちの回答に対して、正誤や付随する知識を教え与えるだけでなく、各学生をきちんと名前で呼び各々に応じた言葉やアドバイスを投げかけているような印象を私は受けた。だからといって、学習内容に関係のない雑談をするだけではなく、かつ他授業の課題をする学生をスルーするようなこともなく、講義内容に集中するための配慮がなされていると感じた。これらのような、学生と教員間を密にしたようなやり取りが、学ぼうという授業環境づくりに少なからず影響を与えていると考えられる。</p>		
その他気付いた点:		

科目名：食品学総論演習	担当者：西出 充徳 先生	参観日：H30年 12月 7日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>本講義は、前期に開講される「食品学Ⅰ」の修学範囲より進んだ学習内容として、食品の成分などについて学ぶものであった。見学回の内容は、食品に含まれる栄養素としてのビタミンに関するものであった。</p> <p>講義は、主にスクリーンを用いて行われた。その内容は、教科書の内容を理解しやすくまとめたものであり、また教科書外の重要な内容や実生活に絡めての関連事項、学習内容を深めるための補足スライドなどであった。この資料と教科書およびホワイトボードを使い分けて授業は進行された。具体的には、学生を指名し教科書を朗読させ重要な箇所にラインを引かせる、そしてその内容をスライドで補足したうえで、学生の反応により必要性を感じればホワイトボードで図示や例文・例問への挑戦といった形がとられていた。授業の最後には、今回の内容を凝縮した小テストが行われており、このテストがあることは授業開始時に告知されていた。</p> <p>一番印象に残ったことは、ホワイトボードを用いて出題した模擬問題を学生に解答させていたところであった。自身の経験上、(授業内容が)わかりましたかと学生に問いかけたとき、ここをもう一度教えてくださいなどのリアクションを返してくれる学生はある程度決まっている。ランダムスクリーニング的に、無作為の学生を指名し模擬問題を解答させることは、クラス全体での理解度の把握に役立つし、思わぬ躓き箇所を炙り出すことにも繋がっていた。授業時間が100分となれば、このような授業内での習熟度確認に使える時間が増え、それはより学びを深めるひいては学生の授業への満足度の向上に繋がるのではないかと考えた。また、小テストの採点と返却を増えた10分内で行えば(助手との連携)、より効果的な復習への結びつきが期待でき、100分授業により1回分減った講義回数分の学習以上に匹敵する学びへの影響が見られるのではないかと思う。</p> <p>また授業は、問いかけ形式で指導教員と学生とのやり取りを重視していると私的に感じた。100分ともなれば、今までよりも長い時間学生と向かい合う必要が生じるため、両者の距離感を密に保つことが、お互いの集中力やモチベーションの維持向上にこれまで以上に重要になっていくのではないだろうか考える。</p>		
その他気付いた点：		

科目名: 保育内容演習(健康)	担当者: 今西香寿 先生	参観日: 30年11月30日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>教育実習後の授業であったため、実習のふりかえりを含めた授業構成であった。</p> <p>学生には事前課題として、「子どもの発育と発達」について、子どもたちの様子を観察してくるという課題が実習前に学生に与えられていた。各施設の遊具や、遊びの種類、また遊び方のバリエーションなど各施設によってルールなどの違いを報告し、施設の指導の違いなどを確認していた。</p> <p>授業環境の工夫として: 保育現場の中で実際に子どもたちに向けて話しているような言葉づかいや表現で進められていた。また、各施設によって子どもたちへの伝え方や表現が違うことなど、その都度、学生にどのような違いがあり、子どもたちの何を育てるために行っているか等を学生に伝えながら授業が進められていた。そのため、学生たちは、実習を通してどのような指導がされていたのか、クラスの学生に伝えており、学生自身が積極的に参加している様子が伺えた。課題の記入時間では、教室全体を回り、学生に声をかけながら行っており、学生の様子をとらえ指導していた。また、重要な説明の時は、はっきりとしたより大きな声で伝えられており、学生が注目しやすく、聞き取りやすいように伝えられていた。</p> <p>集中力を高めるための工夫: 調査用紙の記入時間を十分にとるだけでなく、残りの記入時間を伝えることで、より目の前の課題に取り組む姿勢の環境をつくり、学生の集中を高めるような工夫がされていた。</p>		
<p>その他気付いた点:</p>		

<p>科目名：食品学Ⅲ</p>	<p>担当者： 山東英幸 先生</p>	<p>参観日： 30 年 12 月 5 日</p>
<p>テーマ： 100分授業対応に向けて</p>		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100 分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>授業構成の工夫:教科書からまとめた内容をプロジェクターで映し出して解説しながら授業が進められていた。プリントは、重要な語句など()に記入するように作成し、学生に配布されていた。</p> <p>知識習得のための工夫:プリントは、各項目・専門語句にわけられおり、ページ番号が記入され、学生が内容の振り返り・復習が行いやすいように工夫されていた。</p> <p>参加型、主体的な学びのための工夫:プロジェクターを使つての解説では、配布されたプリントに記載されていることだけでなく、専門用語の意味や今まで学んだ食品・食材についての解説や、その関連ページ番号なども色分けをして記されていた。また、関連する食品の実物写真も取り入れて授業が進められていた。何度か出てくる用語に関しての意味やページ番号などプロジェクターに記されているため、学生自身が自主的にそのページに戻り、解説を確認するような姿勢に導いていると感じた。</p>		
<p>その他気付いた点:</p>		

科目名：ライフステージ栄養学	担当者：塚 みどり 先生	参観日：30年 12月 5日
テーマ：100分授業対応に向けて		
【観点の参考項目】		
<ul style="list-style-type: none">・ 授業構成の工夫・ 集中力を高めるための工夫・ 参加型、主体的な学びのための工夫・ 知識習得のための工夫・ 授業環境の工夫		
100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)		
<p>授業構成は導入、講義、まとめであった。導入は約10分、前回の授業復習と栄養士に関する雑誌の中身を紹介する場面があった。「仕事に勤める事」について話されていた。</p> <p>授業は教科書、プリントをもとに行われており、白板には授業開始前から授業内容が既に書かれていた。その為、今回どのような内容を学ぶのか理解することが出来た。</p> <p>プリントは穴埋め方式であった。教科書を読みながら、教科書内に線を引いたり、プリントの穴埋めをする場面が見られた。</p> <p>学生達が復習しやすいよう参考になるページを積極的に伝えており、また、学んでいる内容が他の科目にもつながる事を伝える場面があった。</p> <p>授業の最後に、今日学んだ内容の一部を後期試験に出題する事を学生達に伝えていたが、大事なところであり、身に付けて欲しい部分であった為、試験に出題すると学生達に話されていた。</p>		
その他気付いた点：		
参観の際、教授より教科書を貸していただいた。線が多くひかれており、学生へ知識を伝えるために勉強に日々努めておられるのだと感じた。		

科目名: 社会的養護内容	担当者: 西原 弘 先生	参観日: 30年 12月 4日
テーマ: 100分授業対応に向けて		
<p>【観点の参考項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業構成の工夫 ・ 集中力を高めるための工夫 ・ 参加型、主体的な学びのための工夫 ・ 知識習得のための工夫 ・ 授業環境の工夫 		
<p>100分授業対応に向けて気付いた点(上記観点を参考にご記入下さい)</p> <p>授業構成は導入、講義、演習の3構成となっていた。導入部分は5分程度であり、演習が約1時間弱であった。講義は前回の内容を復習し今回の内容のテーマを伝え演習へとつなげていた。</p> <p>集中力を高めるために、時おり学生に答えてもらう場面や、講師自ら教室内を移動する場面が見られた。また、演習では学生4人1班で話し合う場面もあり、学生達も積極的に話し合いを行っていた。講義中や演習中の説明の際、身近なたとえ話を用いて説明するところがあり、学生達もイメージしやすい雰囲気であった。</p> <p>授業は教科書、スライド、演習プリントを使用していた。スライドでは、授業内容の他、右上に小さく時計が映し出されていた。時計の映像は集中力や視線を外さない為の工夫なのではと思った。</p> <p>演習プリントは授業最後に回収されていた。以前は後日提出としていたそうだが、提出率が低いため、授業終了後に提出にすると提出率が上がり、後日提出する学生も少数になったと講師は仰っていた。</p>		
<p>その他気付いた点:</p> <p>声は大きく、大事な個所は特に大きく講義されていた。そのさい、学生達は講師に集中してるように見えた。</p>		

3. FD 実践報告書

保育内容演習（健康）の授業の取り組みについて

今西 香寿・保育科

【科目名】

保育内容演習（健康）

【授業概要】

幼児期におけるからだの特徴や健康な生活など、発育発達の基礎的理解とともに、保育者として子どものための運動処方を理解する。保育者として、保育現場での安全指導や幼児期の心身の健康を助長するかかわりについて学ぶ。指導案を構成し、分かりやすく指導し、将来の保育に活用できる能力を身につける。

【科目の到達目標】

子どものからだの特徴や発育発達について理解し、子どもの姿に応じた対応ができる。獲得した知識を活用し、子どもの育ちに関する問題を解決する。

【実践した内容】

領域「健康」は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のいずれにおいても、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」ことがねらいとされている。このねらいは子どもの頃の基本的な生活習慣（食事・睡眠・運動）の基盤が、大人になって生きていく力を養うための大切な土台の時期であると考えられている。保育者がねらいを達成するためには、子どもの取り巻く環境を知り、子どもが幼少期においても将来においても健康で元気に活動ができるためにはどのような経験が必要か理解しておく必要がある。本科目において、子どもを取り巻く環境が子どもにどのような健康問題を引き起こしているのか、どのような点を改善する必要があるのか、学生の幼児期の経験を振り返りながら授業を進めた。また、学生の現在の生活リズムで子どもと一緒に生活をすると、子どもにどのような健康課題がもたらされるのかについて学んだ。子どもの生活リズムを整えるためには、大人の生活リズムが大きく影響を及ぼすと考えられている。そこで、学生自身の生活リズムを見直す機会にできるよう実践した。また、教科書だけではなく、子どもの体力問題や生活環境が及ぼす健康問題など、新聞記事などに記載された新しい情報などを参考資料として、配布することも心掛けた。（図1）理解を深めるために、毎時間プリントを作成し、学生自身で記入ができるよう作成をした。（図2）

保育内容演習「健康」の授業は、1回生の後期にあり、後期期間中に教育実習が行われる。授業内で、実習の課題として、保育現場では、どのような遊びをしているのか、子ども自身で身支度や食事など出来ているのか、保育者が子どもに対してどのような援助や環境づくりをしているのか観察をしてもらうよう伝えた。実習後に振り返りとして、いくつかの設問を記載したプリントを準備し、記入後グループワークを

行った。グループはいろいろな実習園の話を書く事ができるように、実習先が同じ園にならないようにグループを作った。グループ内でプリントに記載したことを発表し、内容をまとめ、全体で発表を行った。発育発達が違えば、子どもの遊びも違い、子どもに対する保育者の援助の仕方も変わってくる。教科書通りに子ども達は成長しているとは限らないので、保育現場ではどのような取り組みがされているのか理解するために行った。

運動すれば「諦めない子」に？ =体力と達成意欲分析—17年度体力調査

2017年度の体力・運動能力調査では、12～19歳について、達成意欲と運動習慣、体力との関係进行分析した。その結果、運動する頻度が高いほど、最後まで物事を諦めず、やり遂げる気持ち強い傾向にあることが分かった。「何でも最後までやり遂げたいと思うか」の問いに対し、週に3日以上運動する15歳の男子の46.7%、女子は49.9%が「とてもそう思う」と回答した。一方、まったく運動しない男子は23.1%、女子が21.1%と低かった。体力との関係では、「とてもそう思う」と答えた15歳男子の新体力テストの合計点は52.8点、女子は53.1点で、最も高かった。18歳の男女でも同様の傾向がみられた。

スポーツ庁は「子どもを持つ親にとっては関心が高いので、スポーツとやり遂げたいと思う気持ちに関係があることを示したかった」と話す。小学生に対する入学前の外遊びと体力などの関係も調査。入学前に外遊びを週6日以上していた10歳男子のテスト合計点は58.6点で、週1日以下の男子より6点高かった。10歳女子も同様に約6点高かった。また、10歳の男女は入学前に外遊びの回数が多いほど、現在も運動する頻度が高かった。同庁は「幼児期の外遊びの習慣の大切さが出ている」としている。



(図1 配布資料の1部 2018/10/7掲載)

○滞育症候群

滞育症候群とは、3間の原因が引き金となり、運動経験の（ ）が不足し、動けないから（ ）が好きではなくなり、結果的に動かなくなり、動かないからさらに動けなくなることをいい、体力や基本的な運動発達が停滞することを意味する。

(図2 配布資料の1部)

【成果と評価】

授業評価の結果として、「教員の言葉の聞き取りやすさ」は、5段階評価において、4.24、「教科書、板書、配布資料、視聴覚教材、実演などは、授業内容の理解に役立った」4.21と高い評価であった。言葉の聞き取りやすさについては、「声が大きくて分かりやすかった」というコメントもあったが、中には「少し早口であった」というコメントもあり、改善していかなければいけない点である。また、授業の内容について、「この授業は自分のためになる内容だった」4.28と高い評価であった。しかし、「この授業に意欲的に取り組んだ」という質問に対しては、4.13、「授業の成果について」は、4.17と「教員の言葉の聞き取りやすさ」や「教科書、板書、配布資料、視聴覚教材、実演などは、授業内容の理解に役立った」より低い評価であった。「授業内容の理解に役立った」にも関わらず、「授業の成果が低い」点においては、学生の学びに結びついていないと考えられる。

【今後の課題と改善計画】

今後の課題において、学生自身が意欲的に取り組める環境を考えていかなければいけないと考える。現在の子どもの健康課題や生活環境について、教員側が伝える事を理解してほしいという思いが強かった。これからは学生自身をもっと考えて学べる環境を作っていきたい。また、世の中はますます便利になっていくであろう。便利になっていくとともに、日常生活において、ますます身体を動かす機会が減っていくと考えられる。子どもの健康課題においてもまた新たな課題が出てくることも考えられる。日々、新しい情報を取り入れ、今後も学生たちに伝えていきたい。

【参考文献】

- 1) 厚生労働省（2017）『保育所保育指針』〈平成 29 年告示〉
- 2) 内閣府、文部科学省、厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』〈平成 29 年告示〉
- 3) 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』〈平成 29 年告示〉

保育のこころの授業における、実践的学習

「現場体験」の取り組みについて

小笠原 眞弓・保育科

【科目名】

保育のこころ

【授業概要】

信愛・保育科の教育理念の体得をめざし、保育のこころと奉仕の精神を理解する。また、保育者を目指すために必要とされる基礎技術や、保育現場に入るための保育学生としての基本的な心得を身に付ける。そして、近隣地域保育施設の体験を通して、和歌山の保育の実情と課題を発見する。

【科目の到達目標】

- 1) 信愛・保育科の伝統を学び、保育者になるという夢の実現に向けて、保育の基礎を修得する。
- 2) 保育学生として保育現場に入ることの意義を理解し、基本的な心得を体得する。
- 3) 理想とする保育者像を目指し、互いに学びあい高めあう姿勢を身に付ける。

【実践した内容】

本教科は本学保育科独自の科目であり、保育者を目指す新入生に対して保育の現場を体験し、子どもと直接関わることで保育の魅力を感じさせ、保育者の役割を体得することを第一の目標としている。授業ではこの実践的学習を「現場体験」と呼ぶ。

現場体験は、本科の実習協力園として養成の理念を理解してくれている地域の保育施設の協力のもとに実施する。正科の学外実習とは異なり、保育者養成の初期段階の経験として子どもと関わり、遊ぶ中で子ども理解を深める。協力園は本年度 15 園、1 園に 3 名～12 名の学生を配属、時期は 6 月下旬～7 月にかけて 3 回、学生はほぼ 9 時～17 時の終日、保育に参加する。実施日は科の専任教員が園を訪問し、学生の様子を観察するとともに園長面談により状況を把握する。体験の為の学内での主な事前指導は①実習生としてのマナー講座②乳幼児の発達過程の講義③現場で利用できる手作り名札の製作④現場体験の基本的な心得⑤上級生による手遊びの講習などである。途中、中間指導として 2 回の体験後大学に戻り、園毎のグループで話し合い、発表、学びを共有するとともに、後半の課題を明確にする。3 回の体験終了後は振り返りレポートを作成して園に提出、学びの報告を行っている。

【成果と評価】

2 回の現場体験後のグループ発表（12 グループ）で多く出た意見をまとめ、次に挙げる。

- 1, 保育者の保育技術や子ども対応の仕方について学んだ。（12 グループ）

- 2, 保育者は子どもをよく見ている、一人ひとりに合った言葉がけを行っていた。(11 グループ)
- 3, 子どもの年齢による発達の違いを学んだ。(8 グループ)
- 4, 保育者は常に子どもを見守り、安全面の配慮を行っていた。(7 グループ)
- 5, 大学の授業では学べないことを沢山知ることができた。(6 グループ)
- 6, 子どもの発達過程に合った対応を学んだ。(4 グループ)
- 7, なんでも手伝うのではなく、子どもの活動を見守り援助することの大切さを学んだ。(3 グループ)
- 8, 保育者の大変さを実感した。(3 グループ)
- 9, 保育者間の連携の大切さを学んだ。(2 グループ) 等

これらの意見より、たった2回の体験であっても、保育現場が新入学生に与える影響はかなり大きいことが窺える。

学生は保育者と子どもの関わりを直接見、体験することにより課題や保育の本質に気づき、目指す保育者の方向性を見出すとともに、保育職に対する意識の向上がなされたことが確認できる。そして、この主体的な活動を自己成長の機会と捉え、その後は目標をもって専門職の学習に取り組むことも期待できる。また、保育を具体的にイメージができるので、授業の理解度が増し、学習効果の向上にも繋がると予測する。なにより、入学後専門的学びの広さと深さに自信をなくしていた学生が、この体験によって気持ちの立て直しができると考える。

園訪問時、保育者になりたいという学生の言葉を多く耳にした、現場体験の意義を学生自ら十分に認識したと捉える。

また、これらの成果は授業評価アンケート(n=92)からも読み取れる。総体的に高い評価を得られたが、特に高かったのは授業の成果についての項目で、「この授業を通して新しい知識、技術、能力が身についた。」4,54、「授業に意欲的に取り組んだ。」4,53 であった。さらに、授業の内容についての項目も「この授業は自分のためになる内容だった。」4,59、「授業の目標がわかりやすく示されていた。」4,45、「この授業は興味、関心が持てた。」4,41 との結果であった。自由記述欄にも「子どもの発達などわかった。」「発表があり、よい体験となった。」「沢山のことを学べた。」「丁寧に教えてくれ、わかりやすくてよかった。」などのコメントがあり、授業の目標は概ね達成できたと考えられる。そのなかで一人の学生から、「後ろの席で字が見づらかった。」と板書に対する記述があった。この意見より、どのような場面でも、授業を受けている学生達にとって適切な学習環境であるかを確認し、細やかな配慮を欠かしてはいけないと改めて思った。

【今後の課題と改善計画】

今年度の授業を振り返り、次年度に向けて改善したい点を次に挙げる。

- 1、 事前指導の中に、現場体験で学生が子ども達と楽しく遊び、関係を深めるための遊びを身に付ける時間を確保し、学生が主体的に活動する時間をもつ。
- 2、 2回の現場訪問後、グループワークの時間があるが、学生から仲間の体験談をもっと聞きたかったとの意見が出ている。この前向きな学生の意見を尊重し、しっかり話し合える時間を持つ工夫する。
- 3、 現場体験の曜日は、他の実習関連の教科等で構成されている。しかし、事前指導、準備を行うには時間的に十分とはいえない現状である。1の課題を達成するためにも、他の教科担当者にも協力を依頼し、さらに充実した体験となるよう連携を図っていきたい。

【参考文献】

大豆生田啓友他、「幼稚園実習 保育所・施設実習」ミネルヴァ書房

ミネルヴァ書房編集部編「保育所保育指針幼稚園教育要領 解説とポイント」ミネルヴァ書房

小笠原眞弓、金谷有希子「保育現場と養成校の協働による保育者養成」保育士養成協議会、2015

音楽の基礎の授業について

田原淑子・保育科

【科目名】

音楽の基礎

【授業概要】

歌うこと、聴くこと、ピアノを弾くこと、体を動かして感じることを通して、将来子ども達と共に音楽をするために必要な音楽理論を学ぶ。

【科目の到達目標】

保育士として現場での音楽活動を行う上で必要な音楽知識を身につける。

音楽の基礎的な楽典を理解し、ピアノを弾く、歌を歌うといった表現技術につなげる。

【実践した内容】

昨年まで「わかりやすい音楽理論」という教科書を使用し、その補充として内容理解のための書き込みプリントやドリル的なプリントを作成配布し使用していた。しかしピアノの進度もかなり低く、いわゆる理論・楽典の学習し理解する力が乏しいあるいは理解スピードが遅い学生も多くなってきていた。そこで、本年度は教科書を変更し「おんがくのしくみ」（今川恭子ほか編著・教育芸術社）を使用し、配布プリントも厳選した。基本中の基本を確実にマスターするという考え方に徹する事とした。

音名・・・ト音記号およびヘ音記号の譜表での階名・日本音名・ドイツ音名をすばやく認識する、楽譜に書かれた音符と鍵盤位置との関係をマッチングさせるという今後の音楽活動の基礎になる部分であるので、よりスモールステップの授業を行った。教科書のドリル部分は、コピープリントを配布し回答時間を設定してさせた。一定時間内にどこまで回答できるかによって自分の現在の理解度を自己判断させた。教科書のドリルは自習や復習する時に、口ですらすら回答できるようになるまで何度も使用できるように、教科書への直接の書き込みは指示した以外はさせないようにした。ドイツ音名は、とくに派生音のダブル＃やダブル♭の付く音に関しては発展問題としてのみ扱った。調の説明時に言葉自体でつまづきやすい事に加えて、コードネームの説明になるとアルファベットが英語読みとなるため、初歩段階の音名の説明は階名と日本音名について重点的に行い、理解させるようにした。復習としてプリント問題の答え合わせやミニテストを繰り返した。

音符とリズムや拍子・・・時間的や感覚的なものである音符の長さやリズムの理解は、言葉や視覚的な説明ではなかなか理論と実践とが結びつかない学生が多いので、とくに今年度は、簡単なわらべうたを「歌う」・「歩く」・「手拍子を打つ」などの動作を多く取り入れた内容で行った。また「聞き役・観察役」を含め10名くらいのグループごとに単独で一つの行動を行ったり、また組み合わせたりして、ひとりひとりが各動作をすべて体験できるようにした。

言葉遊びで拍子の理解を促したが、まず全員で教科書の例を体験した後、2～3名で3文字や4文字の言葉を考えさせ、それを組み合わせリズムに合わせて歌う、手を打つなどの課題を発表させた。ピアノ I での課題曲となっている生活の歌(5曲)を教材として階名唱やリズム打ちをさせ、譜面上の拍子とリズムの理解を実体験させるようにした。各曲のポイントとなるリズムは、拍子を口で数えながら手で打つなど重点的に繰り返し練習させた。

音程・・・調や主要三和音・コードネームの学習で特に必要となる3度音程や半音と全音に関して重点的に説明を行った。派生音によって変化する音程名称やその理論説明、また練習問題は実際の場面で出てくる頻度の高いものや間違えやすいものをピックアップし基本の考え方を徹底させるようにした。

復習をかねてプリント問題を授業時間にさせ、時間内に出来なかった問題は宿題とした。次の時間に学生が順番に1問ずつ口頭で答える形で、答えあわせをした。単に答えを聞いて書き写すだけでなく、一度は必ず自分で問題をやり、間違えたところは再考するという作業を促した。

調・移調・転調・・・音階の説明にいきなり入るのではなく、童謡の曲を例にし、リズム打ち、音名や階名の確認、歌詞による歌唱等をし、ある程度曲に馴染んだところで「調」の仕組みを説明するようにした。保育現場で使用されている曲は、ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調などの曲がほとんどであるため、調号の#・bが2つまでの長調を確実に理解できるようにした。短調に関してはイ短調の説明にとどめた。調号の見方、#・bの付く順番と位置と書き方、主音位置と音階は各調を対比して見やすいように板書し、しっかり時間を与えて学生にノートに書き写させた。また教科書にまとめられている調の名前と調号の位置(ト音記号でのもの)をノートに書き写させ、さらにヘ音記号での調号位置を加えさせるなどし、伴奏譜で左手部分の読み方に慣れさせるようにした。

移調では簡単な曲(カエルの合唱など)を課題問題として使用した。実際に色々な調で歌わせて歌い易さや反対に歌い難さを体験させ、移調する意味の理解した上で、楽譜上での移調譜を書かせるようにした。教科書と配布プリント両方を使用した。

和音・・・主要三和音を中心に理論説明した後、移調問題で使用した(配布プリント)曲に和音付けの練習をさせた。和音も調によって譜面上も鍵盤上でも位置が違うことを理解させるようにした。コードネーム・・・基本のコードのしくみおよび主要三和音とコードそれぞれの利点を説明した。

「こぎつね」の曲を筆者がA・B・Cの3パートにアレンジした楽譜を配布しML教室を使い、メロディーや和音伴奏(主要三和音・コード)の楽譜上での説明と、実音での練習を繰り返し、理論と実践を結びつけるようにした。電子ピアノ2台ずつを連結し(1台に2名着席)、4名でパートを分担して演奏するようにした。練習したものをグループ(4名)ごとに発表しみんなで聞きあうことをした。

楽語・・・読み方を復唱させ、意味を説明し、覚える事を宿題とし、よく使用されるものを中心に3回に分けて小テストした。

各内容を連結させるように、前回の授業内容を復習しつつ、新しい内容を少しずつプラスするようにした。

説明を聴く、板書を書き写す、問題をやる、動作をする(歌う、リズムを手で打つ、歩く、スキップをする、など)などその時に集中するものをきちんと指示するようにした。

問題や小テストなどは所要時間を提示し、だらだらするのでなくその時間内ですることに慣れさせるよ

うにした。

一つの内容の説明、一つの作業、動作を長く連続させないで、次々と授業を展開するようにした。

各回の授業のおわりには次回にする内容やそれに向けての復習や宿題をしっかりと伝えるようにした。

ML 教室のシステムを使い、譜面上の内容を、電子ピアノで実音として弾いたり聞いたりすることで理解を深める

ようにした。

【成果と評価】

音楽の授業であるが理論系なので、じっくりといわゆる座学的な授業展開にし、内容を深め、出来る学生には少し高度な内容にも踏み込んでもらいたいという思いもあるが、一度にほぼ 50 名のそれも音楽的な知識がほとんどない学生を相手に必要最低ラインの理論内容を十分理解させる事も不可能に近いものがある。まず、これから保育士として行っていく音楽活動は楽しいものであるという気持ちを持たせることが第一である。そしてそれには必要な音楽的知識を理解し身につけておかなければいけないという事を意識させ授業に取り組みさせていく事が大事である。音楽に対して拒絶反応を示して、「わからない」の一言で終わらせないようにしたいと考える。今年度、教科書を一新し、授業展開にも学生の能動的な行動を多く取り入れた事によって、授業を受ける態度も良く、興味を持って熱心に取り組んでくれた。歌にあわせて歩いたり、スキップしたりと座席から離れて動作をする時は大人数が移動し、動き回るため、大騒動になるが学生は楽しそうに生き生きとやっていた。次々と授業展開をしていったことも、学生にとって寝る間もなく忙しいと思っただろうが、飽きないで授業についていけたのではないかと考える。ML でのグループ演奏の取り組みはピアノが苦手な学生も得意な学生に助けられながら、また自分が出来るパートを選び無理なく参加でき、学生同士のコミュニケーションや出来栄えのお互いの聞きあいを兼ねた評価等、学生間での共同作業という点からも主体的な学びとなったといえる。授業評価においてもほとんどの項目で保育科や全体の平均値を上回っている。「この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた」という授業の成果の項目では保育科平均 4.28、全体平均 4.30 であるのに対し、本科目は 4.48 となっていて成果は上がっていると評価できる。しかし「学生の理解にあわせて授業が進められていた」という項目は保育科平均が 4.12 であるのに対し本科目は 4.08 と下回っている。また期末試験の結果 99 名中 8 名が再試となり、さらに再試後の最終結果において 3 名が単位を取る事ができなかった。学生の理解力の幅がとても大きい中、限られた授業時間で必要な内容を網羅していく授業を進めるスピードや、到達度や理解度を測る試験問題の難易度をどこのラインに持ってくるかが大変むずかしい問題である。

【今後の課題と改善計画】

来年度における本授業は「音楽表現の基礎」となる。本年度までの「音楽の基礎」を基盤に「声楽」の授業内容を加えた形で行う予定である。「音楽表現」といっても何を観点に置くかで捉え方が変わってくるが、先ず学生の基礎的な知識や技能が根底にあることが前提となろう。今年度改良を加えた授業はかなり成果が上がったと思える。そこで今年度の体験活動に加え、弾き歌い曲などの歌唱教材を使用し歌唱することを多く取り入れた形で表現への基礎作り、音楽的知識を身につけることにつなげたいと考える。授業が楽しく、頑張りたいと思えるように、学生の資質や理解度を随時見極めながら臨機応変に授業を進めたいと思い、授業内容や課題の量などに幅を持たせた内容でやりたいと考えている。

【参考文献】

今川恭子 志民一成 木村充子ほか おんがくのしくみ 歌って動いてつくってわかる音楽理論 教育芸術社

100分授業に対応可能な英語コミュニケーション力の 育成を目指す協働学習型授業について

辻 伸幸・保育科

【科目名】

英語 I

本学における「英語 I」は、基礎教養科目群に設定されており保育科、生活文化専攻の1年生は必修科目であり、食物専攻の1年生は選択必修科目である。平成30年度は、全てのクラスを能力別クラスに編成して指導を行った。

保育科は3つの能力別クラス、生活文化専攻と食物専攻は2つの能力別クラスにして授業を行った。

日本英語検定協会の準2級レベルの問題（リスニングを除く）を解かせ能力別クラスの編成を行った。

【授業概要】

楽しみながら無理なく英文法の概念を学び直し、使える語彙を増やすとともに「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やりとり・発表）」「書くこと」に関する活動を通して使える英語を実感していく。

【科目の到達目標】

「文法」「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やりとり・発表）」「書くこと」の使える英語運用力を高め、自ら学び続ける。

【実践した内容】

本実践は、後期の生活文化専攻の授業「英語 I」（能力別は基礎クラス）での実践内容に絞って扱う。

「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やりとり・発表）」「書くこと」に関する活動をバランスよく配置した授業と協働的な小グループ学習を行い英語コミュニケーション力を高められると考えられる。

受講生は、10名という語学教育には理想的なクラスサイズである。残念ながら1名は、様々な事情から登学できなくなったが、残りの9名は、能動的に授業に参加できていた。

毎回、見通しをもって学習に参加できるようにするため以下の学習課題の順序で内容を構成していった。

① 始まりの挨拶

学生の側から英語で Good Morning. などと自発的にできるようになってきている。英語でのコミュニケーション能力を養うためには、まずは、適切な挨拶表現を実際の場面で使えることが重要である。

② ウォームアップのための英語の歌

学生の英語に対する興味関心を高めるための工夫として英語の歌を毎時間、取り入れた。この活動はウォームアップの役割を果たした。日常の日本語の世界から、英語を使用する環境へと誘うためである。ただ聴くだけの活動ではなく、英語の歌詞の中に空欄を設けて印刷し、どのような英語で歌われている

のか考えながら聴くようにさせた。理解を深めるために、歌詞の日本語訳を英語の歌詞の反対側に配置した。

また、2～4人の小グループで、協働的に空欄の英語を考えるようにさせた。そのため、英語に苦手意識をもっている学生も活動に参加しやすくなった。

③学習用小カードを用いた復習課題またはミニテストの実施

学習してきた表現や語彙を使って、実際に2～4人の小グループで尋ね合う活動を実施した。具体的には学習用小カード(AGO Q&A)やプリントを用いた。小カードには、質問と返答の例文が掲載されており、写真や絵もあることから理解しやすい優れた教材である。

また、教科書のユニットが3つ終了するごとに、ミニテストを行った。ミニテストでは、整序問題を中心に出题した。単語の綴りを正確に覚えるのではなく、語順を意識できるような問題にした。単語の意味や綴りは携帯電話等で簡単に検索することができる。そのことを学生に伝え、英語の学習に対する心理的負担を少なくした。

④英語Iの教科書を用いた学習

本教科書は、ユニットごとに学ぶ文法項目を核として、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の言語活動がまんべんなく組み込まれた教材である。

「聞くこと」「読むこと」に関しては、教科書の課題を使って、2～4人の小グループで考え合う協働学習スタイルを積極的に取り入れた。また、英文を文字情報なしで聞かせ、どのような語彙や表現が使われていたのか、メモを取らせ、発表させた。その後、英文と日本語訳を併記した学習用シートを用いて、日本語の理解をしたところで、教師の範読に続けてリピーティングをさせた。この時に、ある程度の意味のまとまり(チャンク)ごとでリピーティングさせ、それができれば、文ごとリピーティングさせた。最終的に、ネイティブスピーカーの録音音声を再生しそれに重ねて言わせた。このようにスモールステップで取り組めば、無理なく英語をリピーティングすることができた。

「話すこと」では、教科書のダイアログをペアで練習させた後、教師とともに行うパフォーマンス課題に取り組ませた。「書くこと」では、主に教科書の課題を家庭学習として取り組ませた。

⑤終わりの挨拶

See you next week. と挨拶を交わし、今日の学びを来週に繋ぐ期待を抱いて授業を終える。

【成果と評価】

全学で取り組んでいる授業評価アンケート結果から、授業内容、教員の教え方、授業の成果の全項目において学生は5段階尺度の平均が4.8を超える肯定的な評価をしている。また、授業後の会話からも、授業が楽しいと感想を伝えてくる学生が何人かいた。さらに、授業中において、主体的に学習に参加する状況も指導者の観察から確認することができた。

以上の評価や成果に結び付いた要因を考えてみると、1コマの授業で、多様な学習内容や学習形態を導入したことが大きく関わっていると推測される。また、協働的な学び合う学習スタイルは、学習課題が難しい場合でも解決できることが多くなり、効果を発揮したことも考えられる。

さらに、大学生といえども、学習課題ができたときや、技能が上達したときに教師が適切な賞賛を伝えることで、学習意欲の増大に寄与したと考えられる。高校の英語の授業で、学生の頑張りや成果に対して賞賛を受けた経験は皆無であると訴えていたので、大学でも適宜適切な賞賛を学生に示すことは重要と考えた。

【今後の課題と改善計画】

本実践により学生の学習意欲が向上し、主体的に学ぶことへつながったが、英語の4技能における力の向上に寄与したかどうかは不明である。今後、授業の事前事後で英語の4技能のテストを実施し、その影響を量的に把握していかなければならない。また、今年度は100分授業を実施していないので、実際の運用が必要である。授業の内容や構成を本時例のように多様化すれば、100分授業にも十分対応が可能と考えられるが、実践での検証が必要である。

【参考文献】

江利川春雄編著（2012）『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店

社会的養護内容の授業における主体的な学びの 取組について

西原 弘・保育科

【科目名】

社会的養護内容

【授業概要】

「すべての子どもたちの最善の利益」を守るということを理解したうえで、児童福祉施設での暮らしや、その背後にいる保護者・地域社会や行政機関との関係、そして支える側の施設職員の係わり方を学び、社会的養護を通して、家庭支援、児童家庭福祉、地域福祉について理解や認識を深める。

【科目の到達目標】

社会的養護の現状の理解、施設養護の具体的内容を演習により学ぶとともに、必要とされる援助技術やケース記録の取り方等施設養護の基本を学習する。又、専門職としての倫理と責務、児童観、施設観を養う。児童の権利擁護、里親制度、家庭支援等地域福祉についても理解を深めていく。

【実践した内容】

(1) 前期科目「社会的養護」の取組みから

本科目は、前期科目「社会的養護」を受講した後、社会的養護に関するより深い学びを演習により学んでいく。入学直後の学生にとって「社会的養護」という言葉に触れるのは初めてであり、児童虐待が社会問題になっているものの、児童虐待のイメージは報道でみられるような凄惨な身体的虐待のイメージしかなく、社会的養護の対象となる子どもの実態や児童養護施設に関して全くといってよいほど予備知識はない。そのため、前期開講科目「社会的養護」では、和歌山県の社会的養護の現状について最新の統計値を示し、社会的養護に関する資料映像をふんだんに使い、「赤ちゃんポスト」や最近の児童虐待に関するニュースなど社会的養護に関する報道等身近な話題にもふれ、自らの現場経験なども盛り込みながら、興味関心が持てるようにすることで、後期開講の本科目に繋げるように取り組んできた。学生からは、「虐待を受けた子どもの話を聴くのは辛いことだが、現状を知ることが大切だと思った」「虐待のことは目を背けたくなるような内容だが、保育現場では自分が発見する側になるという意識を持つことができた」「施設にいる子どもの思いを知ることができた」などの感想が多くあった。また「わかりやすい授業だったが、覚える用語や法律が多く、試験が不安です」といった感想もみられた。授業ではパワーポイントを使い、難解な法律用語はできるだけ平易な言葉で解説したり、システムについては要約し、図式化したりすることで、おおよそのイメージがつかめるようにした。また、社会的養護の辛い現実を「かわいそう」と思うだけにとどまらずに、冷静に保育者としてどう対応すればよいのか、また似たような境遇に遭ったことのある学生もいると想定しながら慎重にかつ丁寧に教授してきた。前期科目「社会的養護」において、授業評価アンケートでは、「この授業は自分のためになる内容だった」4.66/5.0 ポイ

ント、「教科書、板書、配付資料、視聴覚教材、実演などは授業の理解に役に立った」4.60/5.0ポイント、「この授業を通じて、新しい知識、技術、能力が身についた」は4.62/5.0ポイントあり、学生の興味・関心に繋げることができた。

(2) 後期科目「社会的養護内容」の取組

後期科目「社会的養護内容」は、「社会的養護」の学びをより深めていくための演習型の授業である。パワーポイントを使い視覚的にわかりやすく示すようにし、ワークシートを使いながらグループワーク形式の演習を進めていった。授業展開としては、①導入「本時の課題における基礎の学び」②展開「事例から学ぶ」「演習：事例検討（グループ討議）」③まとめ「グループ討議の発表と共有、まとめ」の構成で毎時行った。

(展開例) 第7回「自立支援計画の作成～アセスメントから、自立支援計画の策定まで～」

- ・授業のねらい 「自立」とは何かについて整理し、自立支援計画を作成する上での基本を学ぶ。
- ・基礎の学び 自立について理解を深め、社会的養護の対象となる児童の自立支援の考え方を学ぶ。
- ・事例から学ぶ 「事例 5歳より施設に入所する小4児童への自立支援計画の作成」
児童の実態把握・課題分析を行い、児童の強みを生かした課題解消と将来の自立につながる支援計画（長期目標・短期目標）の作成方法を学ぶ。
- ・事例検討 「事例における自立支援計画に基づいた具体的な支援内容の検討」
先の事例での実態把握・支援計画（目標）に基づいた、具体的な支援計画（どのような場面でどのような活動から目標達成に導くのか）について検討を行う。
- ・グループ発表と共有、まとめ 各グループからの発表を元に、多面的な見方、考え方を共有する。

【成果と評価】

グループ協議に入る前に、事例における討議のポイントを明示し、まずは個人で支援の方向性を考えさせ、ワークシートに記入し自分の考えをまとめた上で、その意見を持ってグループ討議に入らせた。

グループ協議においては、教員が机間巡視し、グループ内の意見にコメントし、さらに発想を膨らませるヒントを出したり、斬新な意見や提案はその場で全グループに伝え、「こういう考え方もヒントにして」と考え方が画一的にならないようにした。発表場面では、各グループの着眼点についてよい評価をし、賞賛することを意識的に行った。

授業評価アンケートでは、「学生の理解に合わせて授業が進められていた」4.50/5.0ポイント。「教科書、板書、配付資料、視聴覚教材、実演などは授業の理解に役に立った」4.52/5.0ポイント。「この授業を通じて、新しい知識、技術、能力が身についた」は4.62/5.0ポイント。「この授業は興味や関心が持てた」4.51/5.0ポイントであり、学生の興味・関心を深めることができた。

【今後の課題と改善計画】

話し合うグループメンバーが固定化しないよう月ごとに座席指定を行い、グループワークがマンネリ化しないように工夫した。今年度は、グループワークを始める前にワークシートに自分の考えを記入させることで、話が活発になるようにした。これにより、昨年度より意見の交換はより活発になったと感じる。一方で、意見交流が苦手な学生は少なからずおり、「考えは持っているがその場で上手く言えない」学生への参加意欲をどう引き出すかについて検討を進めていく。

宗教行事への主体的参加への促し（信愛教育の立場から）

保育科・二平京子

【科目名】

信愛教育 I・II

【授業概要】

聖書と入門書をテキストとして、建学の精神の基礎となるキリスト教を学ぶ。

講義の他に、祈り、聖歌練習、ミサなどの宗教行事への参加をとおして精神生活を豊かにし、人格の向上を図る。

【科目の到達目標】

建学の精神の基礎となるキリスト教の精神を理解し、幅広い教養に基づく豊かな人格形成を目指し、同時に、奉仕の心を培う。

【実践した内容及び、評価】

経緯

本来、本学における宗教行事は、クラスミサを除いては、宗教委員会の活動範囲にある。しかし、この活動と信愛教育とには、一部に相関関係にも似た関わりがあると考え、考察を行ってみたい。

敢えて、このような標題を設定した理由として、早急に対処しなければならない課題が生じたことがある。

それは、宗教行事の不可欠要素である沈黙の遵守の徹底が、困難となった点である。しかし、省察すれば、

（１）〈沈黙の遵守〉以外にも、少数であれ（２）参加者の中にスーツの着用を怠る学生の姿があった点も重要な課題である。更に、全学生に課した感想文の中には、（３）ミサ中のスマートフォンの使用、（４）居眠りを残念に思うとの意見もあった。こうした状況に、信愛教育の課題を見出すべく、（１）～（４）に関連した事で実施した内容をまとめてみたい。

内容

（１）沈黙について

「沈黙」の大切さについては、新入生が初めて与る聖母祭ミサで説明している。「祈り」は神との対話である。対話には当然相手があり、私たちは相手からのメッセージをキャッチするために注意を集中し、心を込めて耳を傾けている。神との対話も同様だと話している。しかし、私語が目立った11月の追悼ミサの後で、自覚と反省を促すべく、「祈りと沈黙との関連」として、学生全員の考えを集めたところ、殆どの学生が両者の関連性を認める一方、関連なしとする少数意見もあった。

- ・沈黙は祈りへの導入だと思う。
- ・騒がしい中での祈りは、もしかすると神様に届かないかもしれない(?)。
- ・祈る気持ちがあれば、静かでなくとも祈れる。だが、静かな空間は祈る気持ちを強めてくれる。

- ・祈っていると、自然に沈黙になる。
関連なしとする意見は、ほぼ次のようであった。
- ・関連しないと思う。沈黙は、音を出さずに黙ることだけを目的にしている。
- ・関連はないと思う。～静かに黙っていない時にも、「祈り」はある。

(2) 服装について

沈黙同様、服装についても次のように新入生には伝えている。つまり、目的を理解して、それに合った服装をすることは、社会人にとって大切である。ミサに相応しい服装は、スーツなので、ミサには常に正装で臨む事。一度このように話した後は、各ミサ前に、聖母委員を通じて、「スーツ着用」と注意を促すだけにとどまった。

(3) スマートフォンの扱い

スマートフォンについては、着信音を警戒して、持参しないよう伝えた事もあるが、毎回注意を促すという事はなく、指導が不徹底であった。ミサ中に使用する事を想定していなかったため、配慮が全く欠落していた。

(4) 居眠り

ミサに向けた注意事項として、居眠りを具体的に挙げた事はない。うかつにも、その必要性を全く感じていなかったからである。ミサの意義をしっかりと伝えることが何よりも大切であると反省した。

また、ミサの流れの中で、特別な事情のない限り、立つところと座るところは定まっている。しかし、椅子の上げ下ろしに生じる雑音を避けるため、参加者は終始、着席している。この姿勢も、居眠りの要因の一つにもなっているのかもしれない。

評価

全学礼拝において生じた、少なくとも、上記の3点の状況を、即ち評価であると捉え、先に進む必要があると考える。

学生の感想文からは、問題点以外にも、女性の使命(聖母ミサ)、死者への祈り・生命への感謝(追悼ミサ)、小さくなられた神の子誕生への驚き・助け合いの大切さ(クリスマスミサ)等、「建学の精神の基礎となるキリスト教の精神を理解し、幅広い教養に基づく豊かな人格形成を目指し、同時に、奉仕の心を培う。」とする「科目の到達目標」に沿った内容もあったが、ミサ(1)～(4)といった問題は取り組みの甘さとして、事前の対応によって改善できる部分もあったはずだと思う。為し得る準備や配慮を端折ることなく確実に実行してゆく事の大切さを痛感している。

幾人もの学生が、「セシリアに入った時、そこはいつものセシリアとは違って、別の空気が流れていた」と感想を記したミサの静けさを思い起こし、これを蘇らせていきたい。

【今後の課題と改善計画】

(1) 沈黙について

「祈りと沈黙との関連」に記された内容から、殆どの学生が、沈黙の大切さを、少なくとも頭のレベルで理解していることが分かった。そこで、今回は次の2点を課題としたい。1点目は、単なる知的な理解を、生活に浸透した受け止めへと浸透させる指導の工夫。そして、少数意見への対応である。つまり、「沈黙」を、「黙らされて、ただじっとしていること」といった理解に対しては、沈黙のもつ豊かさや心地よさに気付けるよう具体的に、体験を交えて伝えていきたい。なお、また、「神様を信じていない者にとって、ミサや聖書の勉強は苦しい」といった正直な感想にも同様に対応しなければならない。尚、その際は、カトリックの「普遍性」をキーワードとしたい。

(2) 服装と髪型について

活動の場と内容に相応しい服装を自ら選択できる事は、社会人に当然要求される能力である。事前の伝達や確認で十分だと考えていたが、徹底しない現状が見え始めている事を契機に、入学の早い時期を中心に、その都度注意を喚起したい。長い髪をくくる点についても、同様である。

(3) スマートフォンと居眠りについて

スマートフォンをロッカーに入れて移動する事の徹底・確認は、から思いのほか困難であるが、事前に指示しておくことは続けたい。

スマートフォンと居眠り防止については、ミサに対する学生の理解を深める事に尽きるが、無視できない事情の1つに、参加者が皆、終始着席の姿勢でミサに与るという状況がある。これは、礼拝の形としても不自然な、一考を要する問題ではあるものの、設備の構造上の限界と考え、放置してきた。しかし今、この2点を問題とする時、起立・着席双方の姿勢が（ミサ中に、1回でも）取れないものか、抜本策はないにしろ、工夫の余地を模索してみる事は、担当者の責任であると考えている。

なお、30年度最後の宗教行事として、3月中旬には、体育館にて「卒業ミサ」が実施される。主に宗教委員会が担当することになるが、これまでの反省を踏まえ、可能な対応策を模索しているところである。

【参考文献】

教皇フランシスコ 使徒的勧告『喜びに喜べ』（カトリック中央協議会）

来住英俊著『ミサのあずかり方』（女子パウロ会 1974年）

国井健宏著『ミサーイエスを忘れないために』（ドン・ボスコ社 2005年）

奥村一郎著『祈り』（女子パウロ会 2006年）

図画工作における、主体的な作品制作と、 相互鑑賞に関する取り組み

野村 真弘 保育科

【科目名】

図画工作

【授業概要】

素描、水彩、彫塑、版画など、美術や図画工作の基本的な表現を学ぶとともに、作品の展示、鑑賞について実践を通して学習する。主に、基礎的な造形材料を用いて課題制作にあたり、モノクロームの描画材料（鉛筆・木炭・墨汁）から、色材（色鉛筆、クレヨン、絵具）の使用を経て、立体造形に至る筋道を設定した。各材料を用いた基礎課題の後、自由設定による課題制作に取り組み、これをもとに作品展として展示、鑑賞、講評を行うことで、それぞれの材料を用いた、主体的な制作活動を行うことができるような工夫を試みた。

【科目の到達目標】

- 1、保育の指導力 保育現場に必要な造形的表現に対応できる。
- 2、知識・理解 表現の基礎的な技法や、鑑賞の知識を身に付け、理解することができる。
- 3、生涯学習力 生涯学び続ける態度を身に付けることができる。

【実践した内容】

●授業進行の設定

全体を4つのターンに分節し、それぞれを（前期）1、素描表現 2、色彩表現 （後期）3、立体表現 4、版画 5、グループ制作とした。

●授業内における主体的な作品制作への取り組み

各回では、鉛筆やクレヨンといった回に応じた材料を用いて、教師主導による基礎的な課題制作に取り組む。そして、各ターン終了時には、そのターン時に扱った材料を用いて、学生自身の自由な設定による作品制作を課した。その際に出来上がった作品は、次回の授業時に展示・鑑賞の機会として扱うことを指示し、基礎課題に対する理解度や、それだけにとらわれない自身の表現意欲、素材を扱う際の工夫を示す場としてこれを設けた。

●作品展と相互鑑賞に関する取り組み

展示・鑑賞の授業回では、毎回の作品制作に対する自主性や、技法的な発見や向上心、そして作品に対する自分なりの観点を、他者との相互鑑賞のなかで自然に獲得していくことを目指した。その際は、自己採点を含めた感想シートを利用した。また、鑑賞にあたって赤丸シールを学生に手渡し、他者の作品から、

新しい発見があったものや、自身の関心を引くものを見つけ、作品キャプションに張り付けるという時間を設けた。これにより、他者からの関心が目に見えるかたちで示され、自分自身の作品に関する客観性を得る機会になるのではないかと考えた。付随して、赤丸シールを集める、というようなゲーム性が得られ、単純ながら、授業全体を通して学生の目標意識に繋がるのではないかと考えた。

【成果と評価】

30年度図画工作の授業評価アンケートでは、それぞれの評価項目（5段階評価）で「Ⅰ．授業の計画について」科目平均が4.72、「Ⅱ．授業の内容について」科目平均が4.66、「Ⅲ．教員の教え方について」科目平均が4.67、「Ⅳ．授業の成果について」科目平均が4.76であり、平均として4.7と、概ね満足に行く成果が得られているのではないかと思える。前年度図画工作の科目の授業評価アンケートと比較してみると、前年度平均4.3であり、0.4ポイントの上昇が見られている。

【今後の課題と改善計画】

●授業内における主体的な作品制作への取り組み

各回の授業毎の取り組みは、基礎的な課題制作から学生自身の自由課題による制作を経て、展示・鑑賞を行うことを1つの区切りとして進めていくものであり、一定の成果は得られていたように思える。しかしながら、学生自身の主体性に任せた自由課題に対し、発想を得るための助言が不足していたことを実感している。自由に何かをすることこそ難しい、というような初歩的な課題点である。今後、同様の方法論をとるのであれば、ある程度の方針を定めた課題設定は当然必要であろう。

●作品展示と相互鑑賞に関する取り組み

上記の課題点があるなかでも、幸いなことに自由課題における学生の参加度は、主観ながらある程度満足いくものであった。技術的な発見や向上心、自分なりの観点の獲得が目標であったが、学生の鑑賞点は、やや技術的なものに寄ってしまうきらいがあった。その授業回においては、教員による講評を差し込みながらの機会ではあったが、個々の作品に関するコメントが主となってしまっていた実感がある。一つの作品における事例をもとに、可能な限り全体をカバーできるような観点を紹介することが必要であった。

●次年度以降の図画工作の方針

図画工作の初回授業時に行ったアンケートによれば、「絵を描く」ことに関して「好き」、「やや好き」と回答した学生は31%、絵を描くことに限らず、「ものをつくる」ことについて関心を示した学生は63%に達した。対象は保育科の学生であり、子どもと造形に関わる意識を身近に感じているからゆえの結果であろう。このことから、主体的な作品制作と相互鑑賞をより充実するためには、このような学生たちが持ち合わせた本来的な関心に基づいた課題設定を成していく必要があるだろう。

【参考文献】

- 1) 福田隆眞、福本謹一、茂木一司編著、2015、『美術科教育の基礎知識』、建帛社
- 2) 岡健・金澤妙子編集、2013年、『演習保育内容 表現』、建帛社
- 3) 花篤實・岡田愨吾編集、2010年、『新造形表現 理論・実践編』、三晃書房

「保育内容総論」における視聴覚教材を用いた授業実践の 取り組みについて

花岡 隆行・保育科

【科目名】

保育内容総論

【授業概要】

保育内容とは保育・幼児教育の特性を具体的に示すものである。保育内容総論では、今日の保育・幼児教育の現状（和歌山を含む）をふまえて、俯瞰的視点で保育内容を捉える。

【科目の到達目標】

乳幼児の成長・発達、および具体的な生活への理解を深め、保育・幼児教育の特性とその可能性を理解し、保育の内容を俯瞰的視点から学ぶ。保育・幼児教育における現状と課題を理解する。

【実践した内容】

「保育内容総論」の授業において、毎時間自作のプリントを配布した上で、次の各回では、授業内容の性質上、特に写真資料や説明のための図を示すことで、学生の授業に対する理解度をより深めることを目的としてパワーポイントを用いた授業を展開した。

第5回「0歳児の生活と保育内容」では子どもの発達と保育内容について、第12回「環境を通じた保育・幼児教育（3）：まとめ」では子どもの「遊び」と「学び」と「環境」との関連について、また第13回「保育内容と指導計画（1）：保育における指導計画作成の基礎」では保育の計画の全体構造について、それぞれ写真資料の紹介をしたり、グラフ等の図を示し、図を指し示しながら説明を行った。また、子どもの活動を映した映像資料（VTR）も使用した。

パワーポイントではパソコン上で図に直接書き込みを行う機能を用いながら説明が出来るほか、スクリーンで直接指さしができるため、より明確に図の説明を行うことができ、アニメーション機能を用いて視覚に訴える授業展開が出来るため、学生からも口頭ではあるが「分かりやすい」等、おおむね肯定的な声を聞くことができた。

また、写真資料もプリントで配布すると白黒印刷になるが、プロジェクターにより示すことでカラーのイメージを提供することが出来、学生のより深い理解に役立つことが期待できる。

【成果と評価】

授業終盤に行い、受講者99名のうち93名が回答した授業評価アンケートの結果によれば、「教科書、板書、配布資料、視聴覚教材、実演などは授業内容の理解に役だった」の問いに対して「強くそう思う」は66.7%、「そう思う」は26.9%で、合わせて93.6%、「どちらともいえない」は5.4%、「そう思わない」

は1.1%、「全くそう思わない」は0.0%であった。本設問項目の科目平均値は4.59であり、全体平均の4.15を上回っていることから、肯定的な評価を得られたと考えられる。

【今後の課題と改善計画】

授業評価アンケートでは、視聴覚教材を用いた授業実践が比較的肯定的な評価を得たと考察したが、他方で「どちらともいえない」「そう思わない」と回答した学生が合わせて6.5%いたことから、更に満足度が上がるようにすることが課題である。

パワーポイント等の視聴覚教材をより効果的に用いる工夫と、あえて用いない利点についても考慮しながら、配布プリントの改良と合わせて、より分かりやすい授業づくりを行うことが必要であると考えられる。

【参考文献】

なし

学生の授業観から捉える「わかって楽しい」授業方法の検討 —授業「保育内容演習（言葉）」の感想をもとに—

保育科 村上凡子

【科目名】

保育内容演習(言葉)

【授業概要】

乳幼児期における言葉の発達の道筋を取り上げる。また、子どもの言語発達にふさわしい応答性の豊かな保育環境を構成するための保育者の援助について検討する。絵本の読み聞かせの演習も導入し、実践的な学びを構成する。

【科目の到達目標】

学習成果の区分		学生の到達目標
◎	保育の指導力	言葉のはたらきを理解し、言語発達を支援する方法を実践できる。
○	子ども理解	子どもの言語発達の過程についての知識を身につける。
△	社会性	適切な言葉遣いにより人前で分かりやすく話す力を身につける。
△	論理的思考力・問題解決力	保育の課題解決のために必要な情報を収集し、分析することができる。

【実践した内容】及び【成果と評価】

1. 本授業に対する学生の授業観

本稿の目的は、学生の対象授業に対する授業観から、「わかって楽しい」授業の方法について検討することである。定期試験の時間内に、解答を終え時間がある場合に、授業に関して感想の記述を求めた。92名中 58名が記述していた。その記述内容の中にみられた高頻出の語句を抽出し、その頻度を算出した。その結果、「わかりやすい」「眠くならない」「楽しい」という3つの語句の記述頻度が最も高く、その数は共通して18であった。これらの語句は、本授業に対する学生の授業観を示すものとして捉えられる。

次項以降の報告で、この3つの授業観が生成された授業方法について学生の記述から抽出してみたい。

2. 「わかりやすさ」「楽しさ」「眠くならない」といった授業観を生成させる学習活動について

2.1 予習

学生のコメントにみられた「わかりやすい」という授業観を説明するための1つの授業実践の方法として、予習がある。予習への取り組みは、一次的レベルでは学習成果の区分の「論理的思考力・問題解決力」に該当し、二次的レベルでは、「保育の指導力」、「子ども理解」に関連する活動として位置づけられる。

授業では、教科書を使用している。翌回で扱う教科書の範囲の予習を課した。推奨した予習の内容は、指定された範囲で分からない語句の意味調べや要点と判断した箇所の抜き書きである。その他、自分なりにまとめのノートを作ること、また予習した範囲で自分の考えや疑問を書くことも勧めた。予習の量は、個々の裁量であり到達目標はない。初回の授業で、予習範囲やその授業のキーワードを記載したシラバスを別途全員に配布した。ある回の内容は「前言語期のコミュニケーション：言葉が発現する前の*非言語的コミュニケーションを学ぶ。p. 41~47（第3節の前まで）」となっている。先述の授業へのコメントの中ですべての学生が予習は授業の理解に役に立ったと記述していた。「予習をすることで授業に内容が先に分かり、先生の話がとてもよく理解できた」とある学生は述べている。

本授業の授業評価における「私はこの授業に意欲的に取り組んだ」という項目の評価点は4.42で、科の平均より高い。これには、予習、授業という一連の活動に対して、意欲を持ち続けた学生が多いということが示されていると考える。

2.1 実行機能に配慮した「眠くならない」授業の組み立て

実行機能とは、実行機能とは、複雑な課題の遂行に際し、思考や行動を制御する認知的システムの総称のことをさす（室橋，2005）。下位機能として、一定時間、対象に注意を集中させる〈注意集中機能〉、不要な情報を抑制する〈抑制機能〉などがあるとされる。学生のコメントには、「騒がしい時にはしっかり注意してくれた」「集中できる空気感があった」という内容があった。集中を生み出す授業方法として、私語を止めるように指導するだけでなく、書く作業の導入がある。書く場面は板書の代わりにスライドを写すこと、自分の考えを書くことの2つに分けられる。双方とも書くことに集中できるようにした。書く時間と聞く時間を完全に分けるのである。スライドは1時間当たり、4枚~5枚に収め、不足する情報は配布資料で補った。スライドに提示する情報量は、精選を心がけた。

書く時間の保障は、注意集中機能と抑制機能に配慮した実践として位置づけられる。これは、どちらか一方の学習活動に集中できるという利点がある。「書く動作の途中は、眠くならない」と学生がコメントしていた。もちろん、写し終えた後、口頭による説明を聞いて、メモを残しより充実したノートづくりを行っている学生もいた。学生のコメントをもとに、逆に「眠くなる授業」を考えると、受け身で話を聞く時間が長い授業が当てはまると考えられる。これは、注意集中機能が発揮されにくい授業である。

2.2 情報提示

学生のコメントには、情報提示に関するものもあった。スライドに提示する内容に関して「写真やイラストも用いて示されていた」というものがある。コミュニケーションを説明するために下記のようなモデル図を用いた。これ以外の概念も図で示すことを多用した。

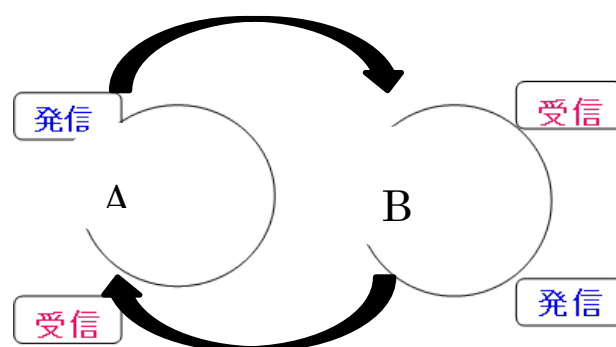


図1 コミュニケーションのモデル図

ある学生は、「パソコンの画面を写した後、先生の分かりやすい説明の話にいつもわくわくして聞いていた」とコメントを記している。学生は、自分で写し終わったあと、顔をあげて前のスライドを見て再度教員の説明を聞く活動をしている。

必要に応じてDVDを用いて保育場面の映像を教材とすることもあった。どの教材も一つの場面が4分以内と短い。漫然と視聴することを抑止するために、事前に視聴の目的を告知したり、必要な情報を提示したりしたこともあった。多様な媒体による情報提示を心がけた。これは学びのユニバーサルデザイン(CAST, 2011)の第一原則に該当する。

2.3 発言する時間の導入

10名の学生が、授業時間中における「話す活動」について言及していた。「話す活動」の具体的な内容は、①予習の内容を予め決められた日に当番で発表すること、②共通の題材について考えを相互に意見交換すること、③絵本の読み聞かせを相互に行うこと、④実習の経験を語り合うこと、⑤ペアで言葉遊び歌を実践することなどである。学生はこうした活動に関して、「当番制もグループワークもあり、楽しかった」「ペアで話したり、グループになったりする事が多く、コミュニケーションの大切さを学ぶことができた」「全員が参加できるようになってよかった」と述べている。①の予習に関して「予習内容を週交代で発表することで、人の前に立ち、意見を言う練習になった。」と所感を述べている。また、1名の学生が、「授業に楽しく取り組めたのは、絵本の読み合いなど授業中に言葉にして話す取り組みが入っていたからだと思う」と分析的に所感を述べている。このコメントは「話す活動」全般がもたらす学習効果に関するものである。これにより、「楽しい授業」を創り出すことの1つの方策として、話す活動を多様に取り入れることが挙げられよう。話す活動は話す相手が存在し、コミュニケーションが成立する機会となる。学生同士の相互交流の場にもなっていると捉えられる。これは、学習成果の区分「社会性」に該当すると考えられる。

対人専門職をめざす学生にとって、コミュニケーション能力は不可欠である。授業の場で、設定された環境において分け隔てなくコミュニケーションを図ることが自然にできるようになることが期待できる。

2.4 ノート点検とコメント

授業回の2回に1回の割合でノート提出を求め、翌回の授業の数日前に返却した。予習の期間を保障するためである。ノート点検時に、わずかではあるがコメントを記したり、良い箇所を印を入れたりした。「ノート提出の後のコメントがいつも嬉しく感じた。」「コメントもしてくれるので、やる気がでた。」と学生はコメントを残している。努力に対する承認を教員がかたちとして学生に示すことで、やる気が持続する。こうした教員が承認を学習者に示す実践の効果は、既に多くの専門家が提起してきたことでもある。

3. 学生の視点から捉える「眠くならない」授業の基本

学生のコメントの中に、「眠くならない」授業という語句を用いたものが多くみられる。「寝ることが一度もなく自分でも驚きました」、「『言葉』の授業ほど眠くならない授業は初めてだった」などである。ある学生のコメントには、「理解できたから眠くならず集中して授業をうけることができたのかなと思う」とある。学生の立場に立つと、本授業は「わかりやすい」から「眠くならない」のであり、「常に常に思考を働かせることが出来」と、ある学生は述べている。「わかる」ことを創出するために、先述のように、書く活動も重視した。また、教員が提示した内容に関する自分の考えを他者に伝える機会も

意図的に設けた。書くことと話すことは、身体の器官を動かすことで成立する。身体の動きを創り出す授業方法が集中を創出するために必要な授業方法であると考え。これは学びのユニバーサルデザイン (CAST, 2011) の第2の原則に関する実践として提起されている。

「寝ないというより、眠くならない授業だった。このような授業が増えてほしいと思う」という学生の願いを私たち教員は真摯に受け止めなければならない。

【今後の課題と改善計画】

本授業における今後のさらなる改善点について述べたい。それは、学生自らが、既に持っている知識と新たに得た知識とを関連付け、「生きた知識」を身につけられるよう指導することである。一部の学生の中に、スライドの内容をノートに写し、教員の説明が始まるまでの間、何も思考せず、教科書や過去のノートを見返すこともしていない状態が散見される。いわば、写して終わりの状況がみられるのである。改善点は、その状態を変えるための働きかけを行うことである。ノートに写した内容を、教科書の文章や自分の経験と関連付け、書字として残すことを日常的に指導してきたが未だ不十分である。この指導の根拠となるのは、認知心理学者が「生きた知識」として提起している概念である。それは、問題解決に使える知識とされる。換言すれば、新たな情報に遭遇した際に、過去の情報と関連付けて、その意味を考え、既に保持している知識と統合する能力である(今井, 2018)。「生きた知識」は、学生が履修する他の科目全般を理解し、専門職として自立するために基盤的な能力として機能することが期待される。本授業においても、予習してきた内容と授業の当日の板書、教員の説明等の情報を関連付けることを学生が自然に実践できるようになることが望ましいと考える。本授業においては、専門用語が毎回多く取り上げられる。保育者として外から見える保育実践力として、学んだことが「生きた知識」として実効性のある働きをすることを志向していきたい。

本稿の最後に、ある学生のコメントを紹介したい。「もっとこの授業のように『面白い』と思えるような授業が増えたらいいなと思う」という内容で、授業の総体を捉えたものである。これを受けて、一層学生の利益となる授業を創り出していきたいと考える。

【参考文献】

- CAST(2011)Universal Design for Learning Guidelines version2.0.:Full-Text Wakefield, MA:Author .日本語版
翻訳 金子晴恵・バーンズ亀山静子
- 今井むつみ (2018)生きた知識をはぐくむ教育—子供の言語の学習から考える 日本教育心理学会第60回大会 公開シンポジウム『授業改善—心理学からの提言』話題提供 日本教育心理学会第60回総会発表論文集 p.12.
- 室橋春光 (2005) 実行機能からみたLD・ADHD・自閉症の心理的特異性と共通性 LD研究, 14(1), 41-45.

保健体育実技」の授業における 体験型学習の取り組みについて

森崎 陽子 ・ 保育科

【科目名】

保健体育実技

【授業概要】

これまでに培ってきた基本的な技術段階の上に、保育者として必要な裏付けとなる理論を深め、より高い技術能力を養うとともに援助法を学ぶ。また、「動くことの楽しさ」、「生涯体育の意義」を学び、生涯を通しての「健康づくり」の為、健康管理法を身に付ける。

【科目の到達目標】

- 1) 「動くことの楽しさ」「仲間づくり大切さ」を体得する。
- 2) 「動きの原理」を学び、より高い技術能力を養うとともに援助法を身に付ける。
- 3) 生涯体育の意義を理解し、各自に適したトレーニングを実施することで健康管理法を修得する。

【実践した内容】

生活が合理化し日常生活における運動量は減少するばかりである。しかし人間の身体の仕組みは筋肉を動かすことで成り立っている。生涯、健康を保持していくためには意識的に運動を生活に取り入れていかなければならない時代に入っている。本授業においては「私の10分間トレーニング」と称して各自に適したトレーニング計画とその実施、成果の確認と反省までの体験学習を試みている。

猪飼氏の体力の分類には狭義の体力として、身体的作業能力である「筋力」「瞬発力」「持久力」「平衡性」「敏捷性」「協応性」「柔軟性」が挙げられ、これらの体力要素を養うことが体力向上に繋がると考えられている。しかし、人間は生まれてから身体が出来上がる青年期にかけては、体力向上のためのトレーニングは形態的成長と関連して考えられることが望ましいことが知られている。人間の形態の成長を現しているスキヤモンの発育曲線には、幼児期から12歳ごろにかけては脳や感覚器の臓器の成長が著しく、その後、青年期にかけては筋肉、骨、呼吸器、消化器等の内臓が大きく伸び、20歳頃に身体の作りが完了していく過程が示されている。この形態の発育と運動機能である体力要素との関連をみると「平衡性」「敏捷性」「協応性」即ち「調整力」は脳や感覚器の成長と関連が深いこと、「筋力」、「瞬発力」、「持久力」は、筋肉や骨、呼吸器や消化器の成長に関連することが明らかにされている。まさに高校から学生時代に掛けては、身体の完成期にあり「筋力」、「瞬発力」、「持久力」の体力要素を伸ばすに相応しい時期と言える。また、生涯の健康を見据えると「滑らかな動き」を保持し、身体の疲れを取り除くためにも「柔軟性」も今後重要な体力要素となることも忘れてはならない。

学生には以上の事柄を理解するとともに、一方では文科省による体力診断テスト（旧）を実施し、結果

を元に各自の体力の弱点を分析するよう促した。

上記の二つの観点を踏まえ、生活の中に運動を取り入れ習慣付けるための、学生個々の対策体力トレーニング「私の10分間トレーニング」を立案し三ヶ月間の継続を目標に実践を試みるよう働き掛けた。

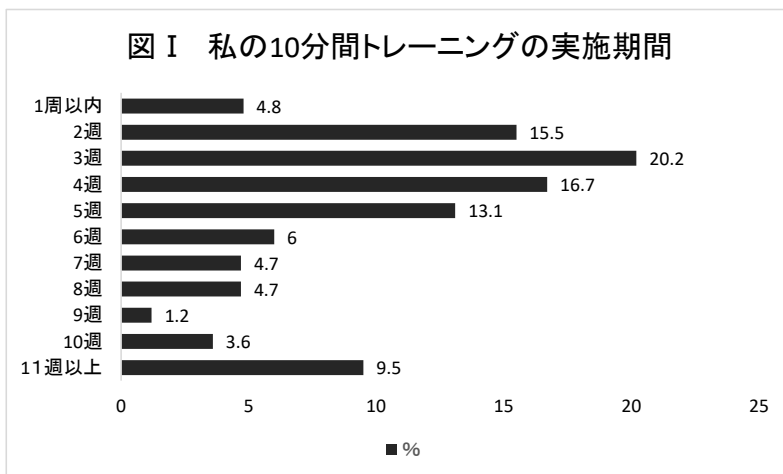
5月下旬体力診断テストを実施、6月第一週目の授業においてそれぞれの体力要素を高める為のトレーニング内容と方法を紹介した。翌日より、「日時」「行ったトレーニング内容」「身体に感じた変化」を記録する用紙を学生自身が作成し自主的な活動としてスタートした。1週間毎の授業の際に学生の励みとなるよう教員が確認を行い、夏期休暇中は課題とし挑戦を促した。後期最初の授業において各自が目標として取り組んだトレーニングに係る診断テスト項目のみの測定を実施しトレーニング効果を確認した。

【成果と評価】

まず、本取り組みの成果を見ていく。

保育科1年生97名中、実施を試みたのは86.6%の84名であった。

1) 実施期間



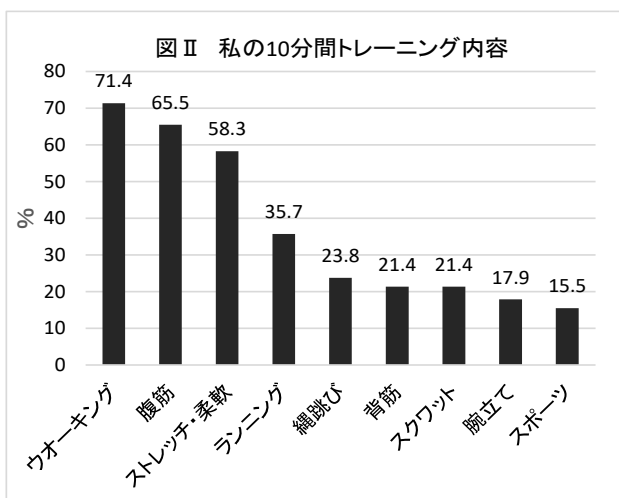
実施した期間から見ていく。

84名が実施した期間を図Iに示す。3週間が一番多く20% (17名)、次いで約一ヶ月17% (14名)であった。約二ヶ月以上 (7週間~9週間) 続けたのは10.6% (9名)、目標であった約三ヶ月 (10週間~11週間以上) を達成したのは13.1% (11名)であった。

三ヶ月間、毎日か1日おきにトレーニングを実施すると一定の効果が確認さ

れると言われている。目標どおり約三ヶ月続けた学生は約1割であったが、たとえ数日であっても自らの思いから行動を起こしてくれたとしたら今回の取り組みの成果として捉えたいと考えている。

2) 実施された内容



次に実施された内容を見ていく。84名の内一番多くトレーニングに取り入れたのは「ウォーキング」71.4% (55名)であった。行った時間は5分~1時間と幅広いが、ねらいとする「心肺持久力」「下肢の筋力」を高めることに適している。また、用具も必要とせず、一人で自分の力に応じた強度で行うことができることは利点である。「歩くこと」の効用は、心電図検査、動脈硬化による調査結果等いろいろな研究で示されており、1年間継続すると、「腰痛」「肩こり」「胃部の不快感」「便秘」他自覚的効果も明らかにされている。青年期であれば「ランニング」の方が「心肺持久力」

を高めるには効果的であるが、運動経験の少ない者であれば奨励して行きたい運動である。

3位にある「ストレッチ・柔軟体操」は58.3% (49名)であった。トレーニングとは言えないが「柔

「柔軟体操」は筋肉の曲げ伸ばしにより血液の循環を良くし、「ストレッチ」は筋肉を伸ばすことで収縮しようとする筋肉の特性を活かし血液の循環に作用する。それによって筋組織に酸素が運ばれ疲労物質とされている乳酸を分解し疲れを取る身体の仕組みとなっている。学業による座姿勢や、アルバイト先での同じ作業による姿勢等、長時間に渡り同じ姿勢を続けることは疲労をためる原因となる。「柔軟体操」や「ストレッチ体操」を取り入れることで疲労回復引いては怪我の防止に繋がると考えられる。「ウォーキング」同様に生涯を通して是非生活の中に取り入れて貰いたい。

筋力トレーニングは、2位「腹筋」65.5% (55名) 5位「背筋」21.4% (18名) 7位「腕立て」17.9% (15名) であった。組み合わせて行っている。室内でも可能であるし女性の願望として身体を引き締めたいとのねらいが多かった。

以上、日常取り組みやすい内容、個人の体力に応じて行えるものを上手に行っていることが読み取れる。期間と同様に腹筋の1回でも自分の意思をもって行なってくれたのであれば今回の取り組みの成果であると考えられる。

3) 感想から

最後に、約3ヶ月以上継続した11名の感想を挙げておく。

「3ヶ月ほど10分間トレーニングを続けて、毎日続けることの大切さ、動くことの大切さ、達成感、の気持ちを持てたこと良かった。」(8名)、「これからも続けていきたい。」(5名)「自分の限界を昨日の自分より少し越えて行く事嬉しかった」(1名)等、精神面での充実感を得ている。また、「記録が伸びた。」(4名)「身体に変化が起こり、成果が現れてきた時は嬉しかった」「運動は1つのことだけでなくあらゆる動作や活動に良い影響を及ぼすことが分かった。」「柔軟をすることで1日の疲れが取れた。」「体重が減った。」「身体が柔らかくなった。」(各1名)等運動の効果を感じたり、逆に「再測定で結果が良くなっていなかった。」(5名)「トレーニングの内容があっていなかった。」(2名)等、数字として成果が得られなかった者も約半数いたが、その者達も身体の上での変化を感じている。身体的にも運動を続けることの意味を体得している。

以上感想からも今回の経験は学生達に、日常に運動を取り入れることに対する抵抗を取り除き、今後も運動を行おうとする姿勢作りとなっていると読み取れる。これも本取り組みの一つの成果と考える。

授業評価を見ていく。

本授業の全体の評価は「授業計画」4.42、「授業の内容」4.43、「教員の教え方」4.35、「授業の成果」4.45であり全ての項目で保育科平均、全体平均を上回っている。中でも「授業内容」の項目では「興味関心をもてた」「ためになる内容」「目標の分かりやすさ」ともに科、全体より高く、「10分間トレーニング」を終えた感想を鑑みても、今回の取り組みもある程度の評価を受けていると読み取ることが出来るのではないかと考察する。

【今後の課題と改善計画】

今後「保健体育実技」の授業においては、動くことの「大切さ」や「喜び」、「楽しさ」を感じさせ運動志向を高めること、「講義」からも「体の仕組み」「働き」を伝え、自身の身体に興味関心を抱かせことができるかが大きな課題である。具体的には今回の取り組みのように「理解と実践」の繋がりを工夫した主体性促す授業展開を考えていきたい。

これからも、人間が意識的に運動を生活に取り入れていかなければならない時代に入っていくこと、生涯体育の必要性をこれからも強く伝えていきたいと考えている。

【参考文献】

1) 「運動・生理・生化学・栄養」 図説・運動の仕組みと応用 第2版 編集中野昭一 医歯薬出版
株式会社

2000

2) 短大生のための保健体育教本 浅田隆夫編 学術図書出版 2005

障害児保育の指導法の授業における 体験型学習の取り組みについて

森定美也子・保育科

【科目名】

障害児保育

【授業概要】

保育現場では、理解し難く、関わりが難しい発達が気になる子どもたちについての対応が求められる。様々な障害について理解を深めながら、障害を抱える子どもが健やかに成長していくための保育現場における生活環境の在り方と保育者の役割、和歌山の状況について修得する。

【科目の到達目標】

「障害児」とされる子どもたちを「発達に課題を持つ子」としてとらえ、その理解と保育場面での支援方法を学ぶ。保育士として障害児保育に必要な知識を身につけることを目標とする。

【実践した内容】

乳幼児期の発達課題と障害特性を学ぶため、黒澤（2009）による乳児用、幼児用の発達障害の基礎調査票を用いて、その施行方法を身に付けた。1歳半、3歳、5歳の年齢について、自閉症、ADHD、LD項目に相当する質問文に4件法、または5件法で回答していくと、その子どもの特徴がつかめるというものである。保育現場で気になる子を理解する上で有効な方法である。使用方法を学習し、小グループでそれぞれの発達障害の特徴をまとめて話し合いを行った。まとめた内容は教員が添削し、修正してもらった後に、グループごとにクラス全体に対して発表を行った。また、その結果をもとに、レポートを作成してもらった。

【成果と評価】

授業評価では、「発達障害の子どもの基礎調査票の内容や、それぞれの発達障害の特徴が良く分かった」、また、「保育現場で生かすことができそうだ」という意見が多かった。「書く」、「読む」、「話しあう」という言語活動を通してまとめる作業に取り組んでおり、学生が得た知識を積極的に表現することが可能な内容となっている。グループの話し合い、まとめ作成を取り入れたことで、学生が能動的に学習内容にかかわる機会を提供できた。

【今後の課題と改善計画】

昨年度の発達障害の基礎調査票のグループ学習では、グループでの話し合いに時間をかけ過ぎた点が反省点であった。今年は、グループでの話し合いについて、いくつか焦点を絞って伝えた。学生もグループ学習に慣れ

てきており、活発に話し合い、要領よくまとめを作成していた。今後は、時間的な余裕をもって、教科書などの手持ちの資料を十分に活用するように改善していく必要がある。

【参考文献】

黒澤礼子 2009 「0歳～3歳まで 赤ちゃんの発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」講談社

黒澤礼子 2009 「4歳～就学まで 幼児期の発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」講談社

在宅保育における主体的な学びを目指して ～指定されたテキストを使用する科目の試み～

森下順子・保育科

【科目名】

在宅保育

【授業概要】

子育ての現状を幅広く概観し、ベビーシッターの社会的役割や基本姿勢を理解する。家庭訪問保育の知識と技術を学ぶ。子どもの健やかな育ちのために、専門性と責任感をもって職務に臨む必要性を理解する。

【科目の到達目標】

在宅保育の意義と社会的役割を理解する。家庭訪問保育者の基礎的な知識と技術を身につける。全国保育サービス協会認定ベビーシッター資格取得を目指す。

学習成果の区分		学生の到達目標
◎	教育的愛情	在宅保育の専門性を学び愛情をもって支援する必要性が理解できる。
○	子ども理解	子どもの発達や諸対応について理解できる。
△	論理的思考力・問題解決力	実際の個別対応について自分で考え行動できる力を身につける。
△	保育の指導力	家庭内での個別保育の専門性について理解し実践力を身につける。

【実践した内容】

本科目は、全国保育サービス協会より、認定ベビーシッター資格取得指定校に認定され、指定保育士養成施設として開講している科目である。学生は、保育士の資格取得に必要な単位を取得し、さらに「在宅保育」に関する科目（半期2単位）も取得し、卒業（見込みも含む）した者で、希望者に「認定ベビーシッター」資格が付与される。そのため、全国保育サービス協会監修のテキスト「家庭訪問保育の理論と実際」の内容に沿って、授業を進める必要がある。内容は、居宅訪問型保育の概要や国の制度、保護者支援、乳幼児の生活と遊び・発達と心理・食事と栄養・小児保健・保育内容と環境整備や、居宅訪問型保育の運営に関する事など幅広い内容で、教員側も知識と実践が求められる科目である。学生にとっては、2年次後期開講の科目であり、これまでの集団保育の学びの総復習にくわえ、個別保育の専門性を学ぶ機会となるため、保育の多様化に対応できる人材育成のひとつとしては、重要な科目として位置づけられるといえよう。

指定されたテキスト（指導書）を使用する科目を、学生の自ら学ぼうとする力を引き出しながら、主

体的に学ぶことができる授業展開と、専門内容を定着させていくためには、教員の工夫とアイデアが必要である。平成21年度から平成30年度までの10年間、本科目を担当し授業構成の検討と改善を重ねてきた。近年、高等教育機関でも求められている「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」を目指した、今年度の本科目の取り組み実践について以下に述べたい。

本科目のオリエンテーションでは、国の課題と現状、行政説明、資格取得について、活躍の場等について丁寧に説明を行った。開講期は2年後期であるが、半数以上（70.6%）の学生が受講した。

本科目は、テキストが決められているという観点からテキストは最大限に使用する、事例をビデオや写真で示し説明をする、内容に関係のあるDVDを観ながらポイントをまとめる、グループワークで確認する、テキストの内容をさらにわかりやすく学生に定着させるためにオリジナルのパワーポイントを作成し、テキストと照らし合わせながら確認させ、必要に応じてテキストに記載されていない内容を書き込んだり、ラインを引きながらパワーポイントとテキストの内容双方から理解を深めるなど、授業をパターン化することを避けて、毎回その内容にふさわしい方法で変化をつけて授業を進めていくことを意識した。学生が特に興味を抱いたと思われるのは、オリジナルで作成した実際の子どもの映像である。何気ない日常の生活の様子から発達が確認でき、親子の自然なやり取りから読み取れるこころの動きに気づき、それを学生同士で共有する活動であった。映像がリアルであること、身近なエピソードであるためわかりやすかったと思われる。オリジナルのパワーポイント資料については、学生にあえて配布せず、テキストに合わせながら必要に応じてページ数を伝え、重要な箇所にラインを引きながら進めていくことを試みた。そうすることにより、授業を聞いていなければ、書き込みやラインを引くことが困難となる可能性があるため、学生は集中して授業を聞いていたように思う。また、これまでに修得されているであろう内容も含まれていたため、学生に教員側から質問をして、クイズ形式で確認することも試みた。基本的には学生の声を拾い上げ、自由に発言できる授業の雰囲気大切にしているため、複数の学生から、質問に対しての発言があり、やり取りする中で知識も定着されたのではないかと考える。

以上のように、授業内容により、主体的な学びができる最善の方法を試行錯誤しながら授業を展開した。

【成果と評価】

本科目、2018年度後期授業評価結果（5段階）をもとに成果と評価を述べる。

【Ⅰ】授業の計画「1. シラバスに示された授業内容に基づいて進められた」は、平均値4.33で、保育科（4.23）、全体（4.30）より高い結果であった。テキストの内容を網羅しなければならないため、科目担当者も意識し授業を進め、学生も理解があったという結果であると考え。「2. 急な休講や補講、教員の遅刻や早退などはなかった」は、平均値4.53、保育科（4.38）、全体（4.44）より高い結果であった。保育科2年一斉授業のため計画的に進める必要があった。「3. 授業の開始時間や終了時間は守られていた」は、平均値4.51、保育科（4.30）、全体（4.36）より高い結果であった。授業計画については、学生から高い評価を得ることができた。

【Ⅱ】授業内容「4. この授業は興味や関心が持てた」は、平均値4.37で、保育科（4.08）、全体（4.11）より高い結果であった。「5. この授業は自分のためになる内容だった」は、平均値4.39で、保育科（4.14）、全体（4.16）より高い結果であった。「6. 授業の目標が分かりやすく示されていた」は、平均値4.33で、保育科（4.02）、全体（4.07）より高い結果であった。授業内容に関しては、これまで学んできた内容も含まれているため再確認する機会となったのではないかと考える。そのため、学生自身の蓄積され

た知識と、実習等での体験を思い起こしながら授業を理解できた結果であると考える。

【Ⅲ】教員の教え方「7. 教員の言葉は、聞き取りやすかったか」は、平均値 4.54、保育科 (4.07)、全体 (4.14) より高い結果であった。「8. 学生の理解に合わせて授業が進められていた」は、平均値 4.37、保育科 (4.00)、全体 (4.05) より高い結果であった。「9. 教科書、板書、配布資料、視聴覚教材、実演などは授業の内容の理解に役立った」は、平均値 4.33、保育科 (4.08)、全体 (4.15) より高い結果であった。「10. 授業に集中できる環境、雰囲気を整っていた」平均値 4.14、保育科 (4.05)、全体 (4.16) であった。この結果より、72名、大教室での講義であったため限界はあると思われるが、多人数での講義の雰囲気作りは今後の課題である。「11. 学生の質問に対して適切に対応していた」は、平均値 4.24、保育科 (4.13)、全体 (4.20) より高い結果であった。

【Ⅳ】授業の成果について「12. 私はこの授業に意欲的に取り組んだ」は、平均値 4.36、保育科 (4.20)、全体 (4.25) より高い結果であった。「13. この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた」は、平均値 4.37、保育科 (4.19)、全体 (4.23) より高い結果であった。本授業開講期までに実習を終え、開講期中にはたいの学生は就職が内定し、保育者になる自覚も芽生えている時期でもある。本科目で、集団保育の再確認と、新たな個別保育の学びが、学生自身の学習意欲につながったのではないかと考える。

総合評価は、【Ⅰ】授業の計画については、平均値 4.46、保育科 (4.30)、全体 (4.37)、【Ⅱ】授業内容については、平均値 4.36、保育科 (4.08)、全体 (4.11)、【Ⅲ】教員の教え方については、平均値 4.33、保育科 (4.07)、全体 (4.14)、【Ⅳ】授業の成果については、平均値 4.36、保育科 (4.20)、全体 (4.24) と、すべてにおいて、保育科・全体の平均値より高い結果となった。これは、10年間かけて授業内容や方法を、検討・改善してきた結果であるといえる。

【今後の課題と改善計画】

成果と評価の結果より、おおむね実践内容の目標は達成できたと思われる。

今後の課題は、50名以上の授業で、ひとりひとりの学生のレベルにあわせた一斉授業の検討である。その中でも、唯一課題である項目は、授業に集中できる環境、雰囲気づくりである。主体性を重視するのであれば、多数の学生の声を反映する必要がある。しかし70名の学生から自主的な声を拾うためには、ややにぎやかになる場面もある。また静粛すぎると発言を控える学生もいるため、バランスをどうとっていくかが課題であると考え。改善計画としては、授業のメリハリを強めていくことではないかと考える。自由発言の時間は思い思いに声を出す、それ以外は話を聞くという区切りを、教員から仕掛けていくことであると考え。

また、より身近なものとして理解できるように、映像やDVDなどを利用していくことである。理論的な内容に関しては、保育現場経験や子育て経験の実践を理論にどうつなげるかにより、学生の興味関心が異なることもこれまでの授業の中で感じることである。今年度で本科目の担当から外れるが、この経験を活かし今後も授業改善に努力していきたい。

【参考文献】

公益社団法人全国保育サービス協会監修 (2017) 家庭訪問保育の理論と実際, 中央法規.

公益社団法人全国保育サービス協会 (2016) 居宅訪問型保育の研修内容に関する研究 居宅訪問型保育基礎研修シラバス・指導書, 公益社団法人全国保育サービス協会.

公益社団法人全国保育サービス協会（2016）居宅訪問型保育の研修内容に関する研究 報告書，公益社団法人全国保育サービス協会。

文部科学省，学習指導要領「生きる力」，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1401806.htm
(2019, 2, 1 検索)。

文部科学省，大学教育部会の審議のまとめについて（素案）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1318247.htm (2019, 2, 1 検索)。

「保育の表現技術(言葉)」の授業における、体験型学習の 取り組みについて

山本玲子・保育科

【科目名】

保育の表現技術(言葉)

【授業概要】

- ・子どもの発達と絵本、紙芝居、お話に関する知識と技術を習得する。
- ・日常会話、手遊び、歌遊び、人形を使ってのお話を通じて子どもの気持ちを動かすコミュニケーション法を身につける。
- ・子どもの発達段階を踏まえて、子どもに応じた言葉かけや援助法を具体的に学ぶ。

【科目の到達目標】

- ・子どもの遊びを豊かに展開するために、言葉の表現に関する知識や技術を習得する。
- ・子どもへの愛や願いを込めて、保育教材を製作したり演じたりできるようになる。
- ・保育者の思いが子どもに届くように、コミュニケーション能力を身につける。

【実践した内容】

最初に子どもへの愛や願いを込めて、保育教材を手作りして演じることができるという、科目の到達目標があることを伝える。

子どもの文化財を手作りすることの意義と、オリジナルの人形を手作りするメリット、子どもの前でお話を演じることを前提に話しを考えると、人形を作る技術には個人差があるため人形は各自の力量にあったものを作ることを伝える。

2～4回は手作り人形を製作する。学生の取り組みを机間巡視しながら、質問に答えアドバイスをする。具体的に縫い方を教え、工夫している箇所は認め、丁寧な仕事ができている箇所を褒める。それと共に学生一人ひとりとコミュニケーションをとることでお互いを知る時間とする。

5～8回は手遊び、歌遊び、伝承遊び、絵本の読み聞かせ、紙芝居の実技を行う。絵本の読み聞かせでは、聞く側が演技者の良い所を見つけて自由記録を取る。

9～13回は手作りした人形を使って一人ずつ、学生の前でお話を演じる。演技者は演じる前に対象年齢と発達段階を踏まえての本時のねらいを、観ている学生に伝え観る側は演技者の良い所、工夫すべきところを見つけ記録を取る。学生が演じた後で、指導者が一人ずつに良い所や工夫がみられたところなどを総評する。

14回はグループワークを行う。実習を終えて言葉を通して行う教育についての学びを分かち合う。

最後に授業を振り返り、各自の課題を明確にする。

【成果と評価】

力量にあった手作り人形を作る前に、昨年の学生が配慮したことを資料として配布し、それを参考にして人形の大きさ、表情、小物や背景、見た目やかわいらしさ、扱いやすさ、素材や肌触りなど具体的に伝える。実際に学生が作った人形の種類は以下である。

① 学生が作った人形の種類

・手使い人形・・・33%
・手袋人形・・・63%
・指人形・・・ 4%
(学生数=103名)

* 手使い人形・・・人形の中に腕を入れて動かす人形、人形そのものを動かす人形。

* 手袋人形・・・手袋に人形をつけて演じる人形。

* 指人形・・・指に人形を指して演じる人形。

事前に力量に合った人形作りを指示していたので、手袋人形を選んだ学生が63%と半数以上で、昨年よりも製作し易い人形を選んだ学生が多かった。手使い人形を選んだのは裁縫が好き、以前に小物を作った経験のある学生が多かった。人形作りの過程は個人差があった。机間巡視をして指導をおこなったが、主体的・積極的に取り組める学生が多かったなかで、何を作るか決められず時間を費やす学生、作業の見通しが立てられず悩む学生が数名いた。

② 人形を作っていく過程で配慮したこと

・人形の大きさ・・・・・・・・・・・・・・・・51人
・人形、小物、背景の色・・・・・・・・49人
・人形の表情・・・・・・・・・・・・・・・・33人
・本物らしく子どもに分かり易くする・・・・・・・・33人
・人形を扱いやすく作る・・・・・・・・32人
・見た目を丁寧にきれいに丈夫に作る・・・・・・・・25人
・かわいらしく作る・・・・・・・・20人
・素材(肌ざわり)触れても安全に作る・・・・・・・・16人
・立体的に作る・・・・・・・・12人
・情景が浮かびやすいように小物や背景を作る・・・12人
・感触を柔らかくする・・・・・・・・9人
・人形や小物の形を意識する・・・・・・・・4人
・親しみやすいキャラクターにする・・・・・・・・4人
・心を込めて作る・・・・・・・・3人
・口が開くようにする・・・・・・・・2人
(学生数=103人、複数回答あり)

今年度は人形作りの説明の時、昨年の学生が配慮した事を資料として配布し言葉でも伝えたので、人形のイメージが出来やすかったようである。人形の大きさ、背景、人形や小物の色を配慮した学生が多かった。人形の表情は目、鼻、口

を全てつけるのではなく、意図的につけないことで、子どもが情景にあわせて想像できることをねらいとした学生もいた。人形を自分が扱いやすく工夫した学生も多かった。子どもに何の人形か伝わるように本物らしく作ること、見た目を丁寧にきれいに丈夫につくことも意識していた。素材の肌ざわり、柔らかい感触、特に年齢の低い子が舐めたり口に入れても大丈夫なように衛生面や安全面も配慮した学生もいた。

③ お話を演じる過程で配慮したこと

・声の大きさ	44人
・笑顔で明るく演じる	35人
・人形の動き	34人
・子どもの顔と反応を見ながら演じる	33人
・人形の向き、立ち位置を考えた	32人
・子ども参加型にした	25人
・導入を工夫した	24人
・ゆっくり話をした	24人
・伝えたいねらいを大切に	18人
・はっきりした声で話した	16人
・自分が楽しみながら演じた	13人
・声のトーンを高くした	12人
・しっかり練習した	8人
・場面に合わせて声の大きさ、声色に変化をつけた	8人
・人形が際立つように背景の色、自分の服装や髪型を考えた	7人
・話しのテンポを考えた	7人
・子どもが飽きないよう会話を短くした	5人
・子どもの目線を考えて、人形の目線を下に向けた	5人
・人形の高さを工夫した	5人
・リズム感を大事にした	3人
・場の切り換えのタイミングを工夫した	3人
・背景や小物を工夫し内容を伝えた	2人
・話をオリジナルで考えた	2人
・まとめを工夫した	2人
・声に抑揚をつけた	2人
・音程に気をつけた	2人
・歌を通じてストーリーを伝えた	2人

(学生数=103人、複数回答あり)

お話を演じる時には、子ども全員に話を伝えるために声の大きさ、演技者が笑顔で明るく楽しそうに演じることを意識していた。人形の動きを大きくし、子どもに話が伝わっているかを確認するために子どもの顔と反応を見ながら、自分の立ち位置や人形の向きを考えて演じていた。

ねらいを達成することを目標に、導入を工夫し、楽しい雰囲気の中で演じることができるように、子ども参加型にして自分も楽しく演じていた学生が多かった。

今年新たに「絵本の読み聞かせ」と「人形で演じる」時間に、観ている側の学生に演技者の「良いところを見つけよう」という課題を出す。実際に子どもと関わる時、子どもの良い面を見つけて褒めて育てていける保育者になってほしいという願いから、まずは身近にいる同僚の演技から良さを見つける練習をする。「読み聞かせ」の時間には見所、視点を始めに伝える。演技者は「心を動かされた絵本」を持参して皆の前で読み聞かせをする。

絵本関連の幅広い業績のある石井桃子氏は「子ども時代をしっかりと楽しんでください。おとなになってから老人になってから、あなたを支えてくれるのは子ども時代の『あなた』です。」と述べている。「子ども時代を楽しめるように支えるのは、『こどもの文化』や環境を準備するおとなの責任です。」というメッセージとも受け取れる。その為、学生には事前に、今までに最も思い出に残り心を動かされた絵本との出会いをレポートにまとめ提出してもらっていた。

聞く側の学生には、教師があらかじめ学生の氏名、絵本の題名、以前提出した「心を動かされた絵本」のレポートの内容から印象に残った文章を抜粋し印刷した記録用紙を配布しそれに自由に感想を記入してもらう。

ひとり当たりの持ち時間が短い「読み聞かせ」の時間の中で、読み聞かせを観ながら記録していくことは難しかったが学生達は意欲的に取り組めた。以下にクラスメートの演技を観て良かった所として記入されていた内容をアトラダムに選んでみた。学生の記入内容からは、優しさや温かさが感じられる表現が多く見られた。演じた学生個人の頑張りを評価し毎日一緒に生活していないとわからない励ましもあった。

④ 絵本の読み聞かせで良かったところ

学生の記録より（良い所）
<ul style="list-style-type: none">・笑顔で読んでいて、優しい声で良かった。温かい気持ちになった。・声が大きくてはっきりと読めていました。挿絵が綺麗で繊細で、すごいと思いました。ページをめく前に子どもの顔を見てからめくっていたのがよかったです。・絵本を持つ高さが高く、子ども全体に見えるように持っていた。・ページをめくるまで、少し間があったので絵をじっくり見ることが出来た。・ハキハキした声で聞き取りやすく絵本に集中できた。落ち着いて安定して読めていた。・話し方が工夫されていてよかった。登場人物の声の違いを変化させている所がとてもよかった。・声が大きくてはっきりと読めていました。文字が真っすぐじゃないのが素敵だと思いました。持ち方が安定していました。絵が綺麗でした。・明るく、強弱をつけたりスピードを変えたりして聞いていて楽しさが伝わってきた。・口調はやさしいけれど、ハッキリしていて聞きやすかった。・声が大きくて聞きやすかった。セリフに感情が込められていてよかった。・声の出し方がよく、感情が込もって見入ってしまった。表情も場面場面で変えていてよかった。・めくる速さ、読む速さも良く、ゆっくり読めていて落ち着いていた。目線も同じところだけでなく、いろんな子どもに向けることができていた。

次の「人形で演じる」授業では、『2ストライク・1ボール』というテーマで、「良い所を2つ+もう少し改善する所1つ」を見つけることを目標に自由に感想を記入することにした。絵本の読み聞かせの授業の課題に少し難度を加え、良い面だけでなく自分ならここを工夫するという改善内容も記入してもらうことにした。以下は学生の記録からアトラ

ンダムに選んだ内容である。

⑤ 人形で演じて良かった所と改善する所

学生の記録より（良い所+改善する所）

- 声がかわいらしく、笑顔が良かった。子どもの方を見るとさらによくなると思った。
- 声のトーンが良く、ゆっくりで歌も聴き取りやすかった。人形をもう少し向きを変えたりしながら、みんなに見えるようにすれば良いと思った。
- 子どもの方を見ながら笑顔で歌っていてよかった。いっしょに歌えるのが楽しい。ビスケットが少し見えにくかった。
- 色々な種類のだるまさんが出てきて面白かった。手を裏返して突然出てくるのがよかった。だるまが下を向いていて見えないときがあった。
- うさぎが上手に作れていて、子どももうさぎに惹きつけられ楽しめると思った。あまり、話しの内容が入って来なかった。
恥ずかしさをなくせばよくなる。
- ねらいにもあったように繰り返しが面白かった。動物によって声を変えるともっとよくなると思う。
- 笑顔がよかった。歌いながら家の付け替えがスムーズにできていて見ている気にならなかった。もう少し、ゆっくり話すの良い。
- うさぎの出し方がよかった。人形が可愛い。ストーリーをしっかりと覚えていた。もう少しスラスラと話を進めた方が良い。
- 子どもの想像が膨らみ、楽しさが増し、私たちも楽しめた。人形をつけるのに一生懸命で、子どもの顔があまり見れていないと思った。
- 楽しそうに演技していたからよかった。「ビスケット好きですか。」と問いかけているところがよかった。恥ずかしそうにしていたから堂々とできたらいいな。
- 人形を反対向けると男の子が女の子に変わるところがよかった。歌を切らずに進めるとよかった。
- おにぎりが大きくて見やすかった。1つ1つ種類を確認していて、ねらいに合っていた。お話を覚えきれてなくて紙を見ていたので、覚えて子どもの方を見てほしかった。

最終的に、観ていた学生が記入してくれた記録を個人用にまとめて学生一人ひとりに配布する。クラスメートがどのような評価をしてくれたかがわかり、自信につながり今後の課題や目標になる事を願う。

以下は個人に配布した絵本の読み聞かせの内容である。まとめる時は重複する内容と似た内容は一項目にしたが、出来るだけ学生の記録が演技者に届くように記録の表現をそのまま記載した。

⑥ 絵本の読み聞かせの個人に配布した資料

7回 絵本の読み聞かせ 「さるくんぶたさん」

- はきはきと一語一語でいねいに読んでいて聞きやすかった。声に変化をつけていてよかった。
- 間の取り方がとてもよかった。
- 優しい声で読んでいて話に入り込むことができた。
- 子どもの様子を見ながら読んでいてよかった。

- ・はきはきと一語一語でいねいに読んでいて聞きやすかった。声に変化をつけていてよかった。
- ・間の取り方がとてもよかった。
- ・優しい声で読んでいて話に入り込むことができた。
- ・子どもの様子を見ながら読んでいてよかった。
- ・声色を変えていて良かった。表情も明るかった。
- ・子ども達の目を見ながら読んでいた。強弱をつけていた。
- ・読むスピードがゆっくりで聞きやすかった。「」の読み方に力が入っていてよかった。声の大きさも大きくてよかった。
- ・可愛らしい声が作風によく合っていた。
- ・ゆっくり感情を込めて読んでるのがよい。サルくんがブタさんに声を教えてあげる所がとても良かった。
- ・大人が読んで泣ける本と紹介されていた。大きくゆったりした声で聞きやすかった。
- ・口調はやさしいけど、ハキハキしていきやすかった。
- ・読み方が上手だった。本が安定していた。子どもの方をきちんとみていた。
- ・声色が優しく、聞いていて落ち着く。
- ・子どもが聞き取りやすい声の表現だと思った。
- ・読みながらこちらに視線を向けていて良かった。優しい声で絵本に合っていた。落ち着いて見ることができた。

⑦ 人形で演じた後で、個人に配布した資料

9回 人形で演じる「白くまちゃんのホットケーキ」

* 良い所

- ・ホットケーキを作っているのがよく伝わってきたのでよかった。
- ・大きな声で、感情を込めて演じていたのでよかった。
- ・笑顔を絶やさずに演じていたのがよかった。
- ・声が高くてよかった。
- ・ホットケーキが変わる瞬間が凄くおもしろかった。
- ・演技者の表情と言葉のレパートリーが豊かでとても楽しめた。
- ・問いかけて興味を引いているところがよかった。
- ・人形に動きがありよかった。
- ・構成がとてもおもしろく、しろくまちゃんになりきっていて凄いと感じた。
- ・話しの入り方がよかった。
- ・小道具が見やすかった。
- ・ホットケーキが焼けていく途中、白い布を取るのよかった。
- ・ホットケーキの焼き色が変わっていく過程の仕組みがよくできていた。
- ・参加型でとても楽しめる内容だった。
- ・優しい口調でとても柔らかい雰囲気だった。
- ・子どもの視線で楽しかった。

* 改善すると良くなる所

- ・ホットケーキの材料の名前を言ったほうがよかった。

- ・対象年齢が5歳なので、材料を問いかけたりするとよいと思う。
- ・ふとした瞬間に人形が背中を向いていた時、おいしいと思った。
- ・ホットケーキの作り方がもう少し詳しいと良いと思う。
- ・小道具があったのもっと物を見せるとよいと思う。
- ・愛読者としては「ぼたあん だろだろ」の台詞は欲しいと思った。
- ・5歳児が対象なので、もう少し言葉での表現を増やせばもっとよいと思う。
- ・「おいしくなーれ」を子どもと一緒に言った方がよいと思う。

演技者が前で演じるのを観て、他の学生が良い所と改善すると良くなる所を記入してくれたが、私一人で観ていて気付かないところ、普段の生活とは違いこういう面は良かったなどクラスメートではないとわからない事柄を記入していて、一人ひとりの学生の人柄が文章から伝わってきた。

子どもと関わる時は、子どものよい面を見つけて褒めて育てられるようにならないといけないので、「良い所をみつけよう」と言う課題は、学生個人の学びと、お互いに高めあう学びもできたと思われる。私も学生の個性と感性の豊かさを知る事ができ学びとなった。

9回から13回まで人形で演じる授業を行い、授業の始めに前回記入してくれた内容を紹介し演技に入ったが、観てくれていた学生の記録を個人用にまとめて、一人ずつの学生に返したのが最後の時間であったので、学生からの感想や学びについて確認できなかったことは残念であった。

授業の目標の子どもへの愛や願いを込めて、保育教材を製作したり演じたりできるようになることに関しては、人形を作る過程と演じる過程で配慮したことを書いてもらったことで、一年生の『児童文化』や『保育の表現(言葉)』で学んだ内容を総合的に活かして深く考えて実践できていたことがわかった。

私がこの授業を担当して5年目になるが今年度初めて6名の学生が人形で演じることを行わなかった。学生には何度も演じる機会を与えたが実践しなかったのが残念である。同じクラスの6名であった。その中には、話を覚えて演じることが大変な学生もいたが、人形で演じる以外に課題もできているし、レポートも提出したし、授業にも毎回真面目に出席しているので、人形で演じなくても合格点は貰えるだろうと考えた学生がいた。その考えに同調して仲のよいグループの学生が真似をして演じなかった。それ以外の学生は真面目に取り組んでいたのではねらいは達成できた。

子どもの遊びを豊かに展開するために、言葉の表現に関する知識や技術を習得すること、保育者の思いが子どもに届くように、コミュニケーション能力を身につけることは、手遊び・歌遊び・伝承遊び、読み聞かせ、人形で演じる時、本時のねらいと対象年齢を考えて実践したので、伝える方法と伝わる表現の仕方を考えて意識して実践できていた。

コミュニケーション能力に関しては幼稚園での教育実習を終えてワークショップをした時は、人前で堂々と話が出る力、誰とでも話せるコミュニケーション能力、語彙力、会話力を身につけたいという意見が多かった。言葉遣いに関しては、正しい言葉遣いで話せるようになりたい、きれいな言葉を使えるようになりたい、敬語を使いこなしたい、子どもの見本になれるような言葉遣いを身につけたい等、一人ひとりの目標と課題が自覚できていた。

授業の計画性についてはシラバスに基づいて計画的に進めることができた。急な休講や補講はなく、授業時間も意識して守るように努めた。

授業の内容は、演習の授業なので実践的な内容が多く学生は興味や関心の持てたとと思われる。

教え方については言葉の授業なので、要点をまとめてはっきりとした口調で、学生の方を向き内容を伝えることと、学生の反応を見ながら進めることに努めた。板書は後ろの学生が読めるように大きな文字で丁寧に書き、配布物も読みやすいように工夫した。学生の質問に対して適切に対応できていたと思う。只、今年度初めて人形を演じることをしなかった学生がいたので、学生の理解度や準備状況の把握が必要だったと反省する。

人の前に立ち話を演じることは、準備も練習も必要であり、人前に立つことが苦手な学生にとっては自分を奮い立たせないといけなかったであろう。普段より大きな声で話しができ、クラスメートからも良い評価をもらい自信がついたと思われる。

表現技術(言葉)の授業で取り上げる内容は、話すことはもちろん子どもの発達段階を踏まえて、教師の思いをきちんと言葉で伝えること、子どもの内面を理解したうえで言葉がけや援助法を考えること、歌を歌ったり、身体で表現したり総合的な内容であるが、学生達は感性豊かで創造力を発揮させ意欲的に取り組めていたので授業の目標は達成できたと思われる。

【今後の課題と改善計画】

100分授業に向けて、学生が眠らない授業をするには、主体的に授業に参加しているという意識を持たせること、教師が魅力的な授業を行うこと、話しの内容を学生に伝える話術も必要であるので、毎回その意識を持って学生の前に立ち授業を行っていききたい。

今年度は人形で演じると言う目標を達成しなかった学生もいたので、人形を作り演じることで、子どもに応じた言葉がけや援助法を具体的に学ぶという授業の目標を最初にきちんと伝えたい。

絵本の読み聞かせと人形で演じることは、今年と同様に行うが、今年度の学生が人形作りに入る前に、去年の学生の①人形を作っていく過程で配慮したこと、②お話を演じる過程で配慮したことを資料にして配布し説明をした結果、昨年よりも細かく配慮した人形ができていた。

来年度は今年度の内容に演じる上で「良かった所+改善する所」を資料に加えたい。そうすれば、演じる時にどういふことに気をつけて演じればよいかより具体的にわかり参考になると思う。また、自由記録を取る時には、演技者の演技の見方の参考になると思われる。

授業が14回になったので、実習終了後の言葉についてのワークショップをおこなう内容をなくした。この内容に関しては最後の時間に言葉を通して行う教育というテーマで学修したことを個人的に文章にまとめる作業をおこなう中に入れようと思う。

授業の目標2)に他者の良さを認めることでお互いに高めあうという内容を入れた。お互いの演技を見合い「良い所」を見つけることで、他者から長所を学びとり自分の演技力、技術力、表現力に活かして実践してくれることを期待したい。

手遊び、歌遊び、伝承遊びの時間では、歌を口ずさみ心が弾んできて、前向きになって遊びを楽しめる時間になりたい。今、こどもたちの遊びの中から歌と遊びが一体となったわらべ歌の伝統は絶えようとしている。保育所、認定子ども園、幼稚園といった子どもの教育を行う場ではカリキュラムの中に意図的に伝統的な遊びの紹介を入れて子ども達に伝承していく必要があると考える。

子どもの遊びを豊かに展開するために言葉の表現技術や知識、子どもに応じた言葉がけや援助法を実践しながら具体的に伝えていきたい。

津守真氏は『子どもと心を通わせた記憶は、保育者には長い年月心に留まっているが、子どもにも同様であることをいろいろの機会に私共は気づかされる。あんな場面をこの子は覚えていたのかと驚くこともある。保育者は現実の場で子どもと忙しくやりとりする。その最中に、深いところで子どもと心を通わせあっている。その記憶がいつまで

も互いに生きる力となっている。』と著書のなかに書かれている。(記憶された時間より)子どもとの何げない一瞬、一瞬のかかわりが子どもの心に記憶され生きる力になる。逆に心を傷つけて生きる力を奪ってしまうこともある。子どもは常に成長している。その成長を止めることも戻すこともできない。子ども達とかかわる保育者はよき援助者としてサポートしていかねばならないので授業を通して子どもへの愛と願いを持つことと、総合的な活動の中での保育技術と実践力を身につけてもらいたい。

子どもと忙しくやりとりする中で、深いところで心を通わせあい、その記憶がお互いに生きる力となるかかわりを多くの場面で持てる保育者になってくれることを願って授業を行いたい。

【引用文献】

浅木尚美著(2016)『絵本から学ぶ子どもの文化』P3 3～5行 同文書院

津守真著(1997)『保育者の地平』-私的体験から普遍に向けて- P250 1～5行 ミネルヴァ書房

【参考文献】

岸井勇雄・武藤隆・柴崎正行監修(2016)『保育内容・言葉』同文書院

徳安 敦・堀 科編(2016)『保育内容・言葉』青鞥社

浅木尚美編著(2016)『絵本から学ぶ子どもの文化』同文書院

秘書実務 I の授業における体験型学習の取り組みについて

浅田 真理子・生活文化学科生活文化専攻

【科目名】

秘書実務 I

【授業概要】

秘書の主要な業務である対人処理業務や総務的な業務について演習を中心に、実践的に学ぶ。教室はオフィスであると考え、ビジネスの場にふさわしい身だしなみや態度で授業に参加することで、社会人として必要な心構えを養う授業である。

【科目の到達目標】

1. 秘書業務の内容や特徴を学ぶことにより、社会人として求められる仕事の進め方や気配りを理解し、ビジネス現場で役立つ実践力を身につける。
2. 社会人として必要なビジネスマナーやコミュニケーション能力を身につける。

【実践した内容】

本授業（以下、同様に呼ぶ）は1年次前期から通年科目として開講され、秘書業務を参考にしながら、就職後はもちろん、在学中のインターンシップや就職活動に備えて早期にビジネスマナーの修得ができるよう、講義と演習を組み合わせで行う科目である。秘書検定などビジネス系検定にも深い関連がある科目であり、ビジネスシチュエーションはもちろん、日常生活、冠婚葬祭の場でも必要となるマナーや知識を、実際の場面を想定し体験的に学ぶよう取り組んだ。

1. 体験型学習として実施した内容例

入学直後の学生を対象とするため、まずコミュニケーションのきっかけとなる「挨拶」「お辞儀」の必要性和第一印象の重要性について説明した後、ビジネスマナーにおけるお辞儀の種類などを、見本を見せながら解説する。

その後、全員で立ち上がって姿勢を整え声を出し、場面によるお辞儀や言葉の使い分けを実践する。この基本説明で要領を理解させた後、毎回、授業開始時と終了時に立ち上がって挨拶を行うことを伝える。また、着席するときは、「どうぞお掛けください」と言われてから、「失礼いたします」と言って座ることもルールとしている。授業開始時は、「よろしく願いいたします。（お辞儀 30 度）」、終了時には、「ありがとうございました。（お辞儀 45 度）」を基本として行うが、動きに慣れ、声が出てくるようになると、授業内容の進捗に合わせてさまざまな場面を想定した挨拶を行うよう工夫をする。

毎回の授業で繰り返し行うことにより、動きと言葉を体で覚え、自然にできるようになることを目標とするが、演習で行う発展形の言葉の例を下記に挙げる。

- ①自己紹介「わたくし、和歌山信愛女子短期大学の〇〇××（フルネーム）と申します。よろしくお願

いたします」

- ②訪問時、受付での挨拶「失礼いたします。わたくし、和歌山信愛女子短期大学の〇〇××（フルネーム）と申します。本日、〇時に面接のお約束を頂いております」
- ③来客応対「いらっしゃいませ。〇〇様でいらっしゃいますね。お待ちしております。ご案内いたします。こちらへどうぞ」
- ④来客見送り「本日は、お忙しいところ（状況や気候に応じて）、お寒い中、お暑い中、お足元の悪い中、わざわざご足労くださいませして申し訳ございません。ありがとうございました。どうぞお気をつけてお帰りくださいませ」
- ⑤面接終了時挨拶「本日はお忙しい中、お時間を頂戴いたしましてありがとうございます。」
- ⑥謝罪「このたびはご迷惑をお掛けいたしまして申し訳ございません。今後、このようなことのないよう十分留意してまいります」

本授業では、これら挨拶の言葉を基本とし、名刺交換、茶菓の接待、席次の知識などビジネスマナーの基本全般を学ぶが、項目ごとに実際のビジネス場面を想定して演習を行う。名刺交換では名刺サイズの紙を用意し簡易な名刺を作成して受け渡しを行い、茶菓の接待は茶器を用いて設定した席次や予想されるハプニングを考えながら、グループ演習を取り入れるなど、体験を通して将来の場面で役立つよう取り組んでいる。

2. 他の科目と関連について

秘書学は学際的な学問であり、秘書に必要な職能として、経営学や簿記、会計の知識などが挙げられる。

筆者は、本授業の他、「簿記」「会計学」「家庭経営学」なども担当しており、関連する用語や社会常識的なキーワードをそれぞれの科目の中で関連付けて説明している。秘書業務を参考として、科目間に相乗効果を持たせながら修得させることが、企業等から就職内定者に卒業前に出される課題などに関連していることが見受けられ、学生も実感を持って取り組んでいるようである。

【成果と評価】

授業評価結果について、下記の結果が得られた。

	科目平均	生活文化平均	全体平均
I. 授業の計画について	4.80	4.67	4.37
II. 授業の内容について	4.71	4.45	4.11
III. 教員の教え方について	4.79	4.54	4.14
IV. 授業の成果について	4.76	4.53	4.24

学生の意見を見ると、「授業で毎回、声を出して行うので、インターンシップの時に自然に自己紹介ができた」「『座って』と言われないと座らない習慣が身に付き、挨拶をしないことがむしろ不自然に感じるようになった」「アルバイトで言葉遣いや挨拶が良いとほめられた」など、授業での一定の効果が得られていると思われ、科目の到達目標を達成したと考える。

【今後の課題と改善計画】

1. 実践後の課題

受講人数が多く全員で行うため、個人の習熟度を図ることや個別指導が困難であること、また、ペアワークやグループワークが学生同士の友人関係に影響を受け、成立しにくい場合が起こることが課題である。

2. 今後の改善計画

今後の改善計画として、演習の効率的な実施の他、2クラスに分けて少人数で授業を行うなど、学生の習熟度に応じて、より効果的な指導が行えるよう計画している。

【参考文献】

造形実習における、照明器具の制作方法と展示について

井澤正憲・生活文化学科生活文化専攻

【科目名】

造形実習

【授業概要】

地域や自身の生活環境をみつめ、土という素材とのコミュニケーションの中から表現を深める。他者の生活に潤いを与える器を含む立体としての造形の可能性を研究し、制作のみに留まらず、地域での展示活動等を行う。

【科目の到達目標】

イメージを形にする為に多様な技法の中から制作方法を選択し、またその技法に捕らわれた造形に収まる事なく、技法を展開する事で新たな造形を模索できる。作品で空間を演出する事により、生活空間を豊かにする。

【実践した内容】

作品制作に適した技法の一つである「鑄込み」による照明器具の制作を行った。指導方法は作業工程により異なるため、各回分けて記述する。各回とも作業に入る前に20分前後の説明を行った。説明内容は参考資料等プロジェクターを使い説明する他、授業内容のプリントの配布、前回までの工程確認、到達目標の指示である。また学生各自にドローイングブックを配布している。

1回目 店舗の内装（インテリアデザイン）や照明作家、現代美術等の灯りをモチーフにした造形作品や空間を使ったインスタレーションの資料や実物を見る事で制作するイメージを固めていく。

また、鑄込みによる成形方法を説明し、技法上どのような造形が適しているのか、表現したい造形物を作るためには、どの技法が必要なのかを思索する時間を設けた。

各自アイデアをスケッチし、グループによるディスカッションも行う。

2回目 「マケットの制作」今回の制作物は、焼き上げ20×20×20cm前後の形と指示。学生はまず原型制作の前にマケット数点、アイデアスケッチを参考に制作を行った。これは、平面を立体にするための第一段階として重要である。作品のフォルム、陰影、ボリュームを再確認するだけでなく、学生と教員で制作工程の最終確認を行う。この時点で装飾、特に凹凸については原型の段階で加工が必要か、離型後に行うか決めておく。

3回目 「原型制作」作品の素材は磁器土を使用するため、焼成後鉄分が混入しないよう80目の白土を使用し、収縮率を考え無垢でマケットを参考に成形する。制作時イメージから離れないよう指示。スケールアップしていく工程では、工芸ならではの「手で考える」作業も重要であるが、今回は型の制作が主になるためマケットに忠実に形を合わせていく。

4回目 「石膏取り」形状により割り型が必要な場合、原型に墨で割り線を入れる。石膏型で作品の完成度が決まるため、慎重に作業を進める。石膏の厚みが3cmになるよう外枠を組み、グループに分かれて型取りを行う。

5回目 「修正と原料調整」素材である磁器土（乾粉）重量に対し0.25%珪酸ソーダを混入。2グループに分かれて調整する。

6回目 「鑄込み作業」チームワークが必要なためグループに分かれて作業を行う。石膏型に厚み3mm前後の被膜確認後排泥。作品の形状や光の透け方を考え、各自調整してゆく。

7回目 「作品修正」離型乾燥後、バリ等の修正作業を各自行う。またこの時点で、作品に加飾が必要な場合は針やカンナ等で表層に模様を掘る。この作業では、薄い作品を割ってしまう事が多い為慎重に作業を進めるよう指示。

8回目 「焼成」今回は無釉焼き締めで焼成を行う。その為、素焼きの工程を飛ばし本焼き焼成のみ行う。窯詰め作業の説明の他、窯の構造や各地域の様式等土と窯の関係を説明する。焼成方法は酸化炎焼成で行う。

9回目 「組み立て作業」照明器具の部品を作品に組み込む。あらかじめ器具を取り付ける穴を開けているため、部材をシリコンで接着する。

10回目 「展示」ギャラリーにて展示を行う。
展示方法について、ギャラリーの空間の画像と図面を用い説明を行った。
実際展示してみないと作品のバランスが分からないが、イメージを固めておく必要がある。その為、作品点数や形状を考え話し合いの中、図面にレイアウトをしておく。
窓の多い空間は、自然光により時間と共に変化も楽しめる。

【成果と評価】

1年次生活工芸履修者がほぼ基礎の展開を行うため、素材に慣れておりスムーズに作業を進める事が可能であった。作品完成に至るまで多くの工程が必要であったが、毎回資料等を用い確認する事で確実に形に出来た。鑄込み作業や焼成作業等グループワークが必要な事が多い授業であるが、協力し合う事でより内容に対する理解を深める事が出来たと思う。また作品を学外で展示する事により、造形物や空間に対して興味や印象も大きく変化したと思う。

【今後の課題と改善計画】

4回目の授業で行った石膏取り作業は、大幅に時間超過してしまった。石膏の流し込み失敗による事が原因であるが、今後少人数で確実に作業を進めるよう改善したい。

【参考文献】

CADの授業における、体験型学習の取り組みについて

千森督子・生活文化学科生活文化専攻

【科目名】

CAD

【授業概要】

CADソフトでもJWCADを用いて、コンピュータで図面を作図する技術を習得する。CADの概念と基本操作を理解し、線の引き方から編集、多角形や円、点の描き方、図形移動や複写、文字の入力などの基本操作を学んだ上でマンションと一戸建て住宅の平面図作製に取り組む。

【科目の到達目標】

- ①CADに関する知識が養われる。
- ②コンピュータで図面を作図したり、活用するための技術を習得することができる。

【実践した内容】

授業内容はシラバスに明記し、動機付けを行っているが、毎回プリントを配布し、その日に実践する内容をさらに具体化しながら手順通りに示し、能動的学習を促すことができるように工夫している。

実践した授業内容は以下の様である。

- ① CADの概念と基本操作理解
- ② 線の引き方と編集
- ② 多角形や円、点の描き方
- ③ ハッチング、寸法の記入の仕方
- ④ 図形移動・複写
- ⑤ 文字の入力・編集
- ⑥ マンション平面図①の作図
- ⑦ マンション平面図②の作図
- ⑧ 一戸建て住宅平面図の作図

【成果と評価】

授業実践成果としては、CADに関する知識が養われ、コンピュータで図面を作図するための、線の引き方・編集の仕方、ハッチングや寸法の記入の仕方、図形移動・複写、文字の入力等の基本の操作方法が修得できた。さらに、マンション平面図①の作図(図1)、マンション平面図②の作図(図2)、一戸建て住宅平面図の作図(図3)を行い、作品として完成ことができ、科目の到達目標が達成できたといえる。授業評価結果では、「授業の計画について」、「授業の内容について」、「教員の教え方について」、「授業の成果について」の各項目共に4.54以上であり、生活文化専攻平均や全体平均をほぼ上回り、学生自身が授業実践の成果を高く評価している。

【今後の課題と改善計画】

CADの授業では、理解力や作業の進捗状況に個人差が大きくみられ、とりわけ作業が遅れがちな学生には個別指導が必要である。個別指導者の数が多くなると、一人の教員では全体の授業進行との両立が困難となる。分担指導できる助手が必要である。これは情報関係科目だけでなく実験実習科目の共通の要望と考えられるが、今後の改善計画としては、助手を必要とする科目が時間割上で重ならないように工夫することが必要性である。

【参考文献】

建築のテキスト編集委員会編、『初めての建築CAD』、学芸出版社



図1 作製したマンション平面図①

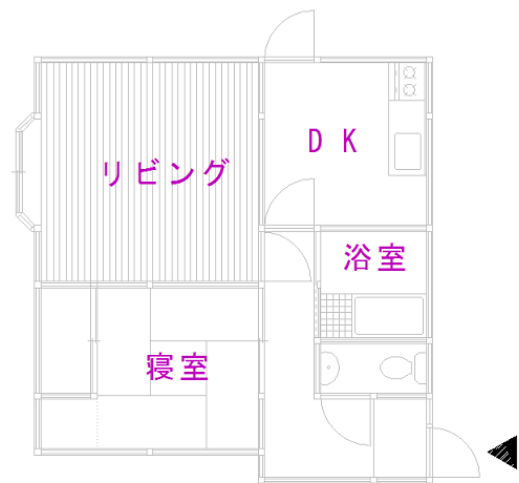
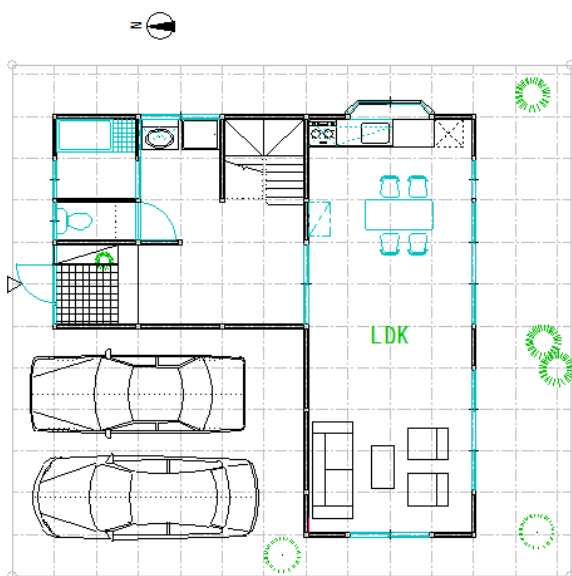
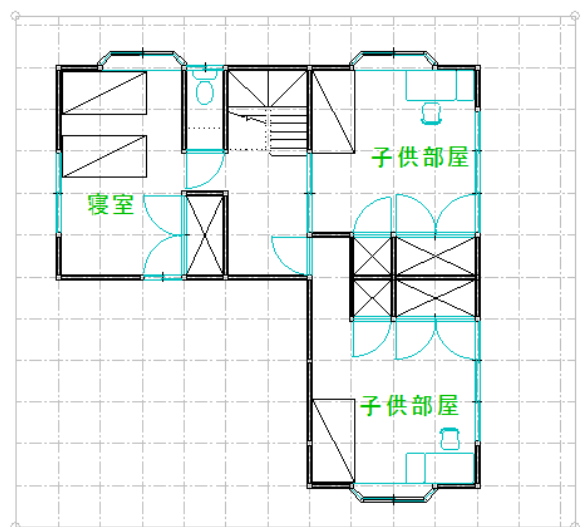


図2 作製したマンション平面図②



1階平面図



2階平面図

図3 作製した一戸建て住宅平面図

コンピュータの基本操作習得を目的とした授業について

中西 淳平・生活文化学科生活文化専攻

【科目名】

情報処理演習（保育科、後期）

【授業概要】

インターネットを活用した情報の収集方法やワードプロセッサによる論文とレポートの作成方法、表計算ソフトウェアによるデータ処理などに必要なコンピュータリテラシについて学習する。

【科目の到達目標】

現代社会を支える情報技術について学び、情報活用の実践力をふまえたコンピュータ操作を学ぶ。この演習を通して、専門教育科目の学習場面で直面すると予想される問題解決のために、コンピュータを効果的に活用するための科学的思考力を養うことを目標とする。

【実践した内容】

コンピュータの使い方、キーボードの入力方法といったコンピュータ操作の初歩から始め、Microsoft Word 2016 と Microsoft Excel 2016 の 2 つのソフトウェアを用いた基本的なレポート作成、データ処理について演習した。

特に教科書は指定せず、毎回の授業内容をプリント配付した。

プリントに記載した例題の目的を説明し、例題を処理するための作業手順を演示した後、学生に例題を処理させた。受講する学生の中にはコンピュータ操作の初心者が少なからず存在し、その学生にコンピュータ操作に慣れてもらうことをこの授業の第一の目的としているので、ゆっくり、一つずつ、確実に作業を進めてもらった。机間巡視をし、学生の理解度を何度も確認しながら授業を進めた。

プリントの例題を終了した後、練習問題に取り組んでももらった。最初に時間を与え、自力で取り組ませた。自力で進めることが難しい場合は、学生同士で相談しながら、協力しながら解決させた。ある程度の時間経過の後、教員の模範演技を見せた。演示した後は、最後まで解決できなかった学生のフォローに回った。

また、授業時間外で取り組んでもらう練習問題を提示し、次回授業までに処理をしてもらった。

7 回目と 15 回目の授業には、90 分かけて実技試験を実施した。

実技試験を除けば、授業時間は学生同士の相談・協力を奨励した。作業内容の説明、教員の作業演示中などはさすがに静聴してもらうが、学生の作業時間はお互いに会話し、協力し合いながら作業を進めることを奨めた。

【成果と評価】

授業評価アンケート結果を下の表に示す。いずれの設問項目も、科目平均は学科平均、全体平均より低い値を示した。全体的に、この授業で実践したことは学生からあまりよい評価を得られていないことがわかる。

アンケート結果をさらに詳細に見ていくと、学生の評価が一番低い設問項目は、「授業に集中できる環境、雰囲気を整っていた」であり、「強くそう思う」が29.2%、「そう思う」が36.0%、「どちらともいえない」が27.0%であった。これは、学生の作業時間にはお互いに協力し合いながら作業を進めることを奨励するスタイルの悪い面が現れたものと思われる。教員の説明する時間、学生の作業する時間を明瞭に分けて授業を進行することで、環境を整える必要がある。

学生の評価が次に低い設問項目は、「学生の理解に合わせて授業が進められていた」であり、「強くそう思う」が34.8%、「そう思う」が31.5%、「どちらともいえない」が29.2%であった。Word、Excelの操作に関して、高校で学習済みの学生とそうではない学生が混じっており、今年は特に習熟度について開きが広がったように感じられた。この授業は、コンピュータ操作の初心者が授業についていけるように進める、ということを第一優先項目としているので、習熟度の高い学生にとってはつまらない時間を過ごすことが多かったと思われる。このあたりが評価が低かった理由と考えられる。

学生の評価が比較的高い設問項目は、「急な休講や補講、教員の遅刻や早退などは無かった」、「授業の開始時間や終了時間は守られていた」であり、「強くそう思う」がそれぞれ62.9%、50.6%であった。学生より遅く教室に入ったことや定刻を越えて授業を続けたことはないので、この項目の評価が比較的高いことは理解できるが、それでも50～60%程度にとどまる理由はよく分からない。

表：授業評価アンケートの結果

	科目平均	学科平均	全体平均
I. 授業の計画について	4.25	4.30	4.37
II. 授業の内容について	4.07	4.08	4.11
III. 教員の教え方について	3.98	4.07	4.14
IV. 授業の成果について	4.16	4.20	4.24

【今後の課題と改善計画】

入学時あるいは授業開始時において、コンピュータ活用に関して習熟度の低い学生と高い学生が混じっていて、授業の特性上、習熟度の低い学生に焦点を当てて授業を進めることになる。結果、習熟度の高い学生に対して十分なフォローが難しい状況にある。また、学生相互に相談・協力をして演習を進めていくことを奨励する形式で授業を進める以上、騒がしくなり、授業に集中できない時間が発生しやすくなってしまう。

改善案として、授業内容は初心者向けの内容とし、初心者向けの提出課題を課す一方で、習熟度の高い学生には応用的な内容を含んだ課題を課す、というのが考えられる。これによって習熟度の低い学生、高い学生双方にとって適切な課題を与えることができる、という長所がある。一方、課題の評価および成績評価において、習熟度の低い学生、高い学生で同一の基準を用いることができない、という欠点がある。

ある。授業内容や課題の設定次第で、課題の評価および成績評価が不公平になっているように学生から見える可能性がある。公正・公平な課題設定、成績評価を構築できないのであれば、習熟度の低い学生と高い学生で違う課題を安易に与えるのは控えた方がよいと考える。学生に不公平感が起こらないように、適切な課題設定を繰り返し試行錯誤していくことがよいと考える。

また、授業の進行において、学生の様子をこまめに確認し、教員主導で進める時間と学生が協力して作業を進める時間を学生に分かりやすく提示していくことが必要である。

有機化学の授業における体験型学習の導入

井上和彦・生活文化学科 食物栄養専攻

【科目名】

有機化学

【授業概要】

私たちの体の中では、さまざまな物質が常に化学反応を起こし、それによって生命活動が維持されている。これら物質の構造や性質を理解し、生体内化学反応における基本的な知識を身につける。

【科目の到達目標】

- 物質の基本的概念を理解できる。
- 化学結合と化学反応について説明でき、溶液の濃度が計算できる。
- 有機化合物の構造と性質を理解できる。

【実践した内容】

タンパク質はアミノ酸がペプチド結合でつながってできている。したがって、タンパク質の電気的性質は、タンパク質を構成するアミノ酸の種類によって異なる。水に溶けると酸性を示す酸性アミノ酸(アスパラギン酸、グルタミン酸)の側鎖にはマイナス、水に溶けると塩基性を示す塩基性アミノ酸(リシン、アルギニン、ヒスチジン)の側鎖にはプラスの電荷がある。酸性アミノ酸の数が多ければ、タンパク質全体としてはマイナスに帯電し、塩基性アミノ酸が多ければ、タンパク質全体としてプラスに帯電している。

酸性アミノ酸が多いタンパク質では、中性の水溶液中では全体としてマイナスに帯電しているが、水溶液を酸性にしていくとマイナスの電荷が減少し、電気的性質がプラスマイナスゼロになる時がある。この時の水溶液の pH を、等電点と呼ぶ。等電点ではタンパク質分子間の引力が最も大きくなるため、タンパク質は凝集し、溶解度は最小になる。この性質を利用して、特定のタンパク質だけを沈殿させて分離する方法を等電点沈殿法と呼ぶ。

上述した内容の理解を深めるため、牛乳とレモン果汁を使ったチーズ作りを教室内で実施した。

- ① 学生には5~6人ずつのグループを組むよう指示し、各グループに少量の牛乳を入れたビーカー1つかき混ぜるためのガラス棒1本をそれぞれ配布した。
- ② 学生にビーカー内の牛乳をガラス棒でゆっくりとかき混ぜてもらい、そこに教員がレモン果汁(ポッカレモン100)を加え、ビーカー内の様子を観察するよう指示した。
- ③ ビーカー内の様子が変わった時点でレモン果汁の添加をやめ、ビーカー内の様子がどのようになったかをグループ全員で話し合うよう指示した。

実際には、白い沈殿ができる。これは、牛乳に含まれるタンパク質の1つ、カゼインが凝集したものである。カゼインの等電点は4.6であるため、pHが4.6付近になるとタンパク質全体の電荷がプラスマイナスゼロになる。牛乳のpHは約6.7であるため、通常の状態では、カゼインはマイナスに帯電しており、沈殿は見えない。この状態でレモン果汁を加えて牛乳を酸性にすると、pHが6.7から減少し、4.6付近でカゼインの電荷がなくなる。するとカゼイン分子間の引力が大きくなり、カゼインが凝集し、沈殿する。各グループが観察できたのを確認し、このメカニズムを説明した。また、沈殿したカゼインを集めたものがカッテージチーズであり、これをさらに発酵・熟成させて、さまざまなチーズが作られるということも説明した。

【成果と評価】

当日の授業では他の内容も扱ったため、チーズ作りに長時間をかけられなかったが、学生は楽しそうに観察していた。有機化学では、高校で学ぶ化学の復習を基本とした上で、ヒトの健康や栄養と関連の深い領域に展開している。しかしながら、高校で化学を選択しておらず、通常の授業を難しいと感じる学生も少なくない。統計的なデータはないが、座学の時間でも手を動かし、周囲の友人と話しながら作業することは、学生にとって良い気分転換になり、そこで実施した内容を強く印象づけられると考えている。実際に、学生は皆楽しそうな様子が見受けられた。

なお、単回の授業評価を実施しなかったため、学生の直接的な意見や感想は得られなかった。

【今後の課題と改善計画】

ミニッツペーパーなどを利用し、全体の授業評価以外にも単回の授業評価を実施し、授業内容や進め方の改善に努めたい。また、授業時間が現行の90分から100分へと延長される来年度以降も、安全面に配慮した上で、このような体験型学習を積極的に導入する計画である。

【参考文献】

『基礎からのやさしい化学 -ヒトの健康と栄養を学ぶために-』 田島眞 編著 建帛社

栄養各論実習の指導法の、体験型・参加型学習の 取り組みについて

堺 みどり・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

栄養各論実習

【授業概要】

胎生期から老年期までのライフステージおよびスポーツなど特殊環境の栄養学的特性を理解し、各々の時期に適した食事計画を自ら作成する。その計画を調理実習により具体化をする。具体化した食事を評価することにより栄養管理のあり方の理解を深める。

【科目の到達目標】

ライフステージ栄養学で修得した知識を活用し、各世代別の食事計画(献立作成)ができる。献立をグループで協力しながら調理をし、実際の食事として表現できる。食事を媒体としてデモンストレーションができる。最終目標は各世代の栄養管理のあり方を身につけることである。

【実践した内容】

栄養各論実習は、栄養士資格を取得するための必修科目である。この実習は、ライフステージ栄養学で学んだステージ区分ごとの栄養上の特性や生理が基盤となる科目である。栄養士は、知見の理解にとどまらず、各対象者が具体的に「健康な食生活」を実践する力を教育できる必要がある。実習は、学生自身が「聞いて」「考えて」「調べて」「行動して(作って)」「食べてみて」「評価をして」を一貫して体験をし、多様化する食生活に対応できる企画力・指導力が身につくことができるような構成している。実習は、個人別に取り組む献立作成とグループで取り組む調理実習で構成している。学生の主体的な取り組みについて、「聞く」「書く」「考える」「行動する」「話す」の5つの作業の視点で表に示した。

回	学習のテーマ	主体的・能動的学習内容への取り組み
1回 導 入	・実習の意義 45分 ・実習計画表の説明 45分 ・献立作成手順について 45分	「聞く」「書く」「話す」作業 配布プリンにより、授業の目的、これまで学習した授業との関連を述べる。重要などころには、下線を引かせる。 また、献立の提出期限などを各自で記入し、実習への参観意識がもてるように工夫している。 実習計画表についての説明後、不明な点の質問時間を設ける。 成人女子の事例を用いて、食事計画について説明する。 座学だけではなく、コンピューター室への移動など行動する作業を入れる。

		途中で2回5分のリフレッシュ時間を入れる。
2～5回	<ul style="list-style-type: none"> ・献立作成実習 個人での取り組み ライフステージ区分 成人期、妊産期、授乳期、離乳期 幼児期、老年期、特殊環境の7区分 	<p>「考える」「書く」「行動する」作業が中心</p> <p>対象者の目標栄養量を食事摂取基準に基づいて「調べて」「考えて」各自で設定する。食品構成を調べる。対象者の栄養学的特性を調べる。献立作成をする。多目的コンピュータールームにて、栄養価を算出する。目標量と比較する。献立の質の評価をする。</p> <p>作業が円滑に行うことができるように、指定の様式のプリントを準備している。また、教室・図書館・多目的コンピュータールームへの移動は、時間内は自由行動としている。</p> <p>実習開始と実習終了時には、全員が集合し、実習目的と実習の進捗状況を把握できる時間を設けている。</p>
6回	<ul style="list-style-type: none"> ・調理実習への導入 グループでの取り組み 	<p>「聞く」「話す」作業が中心</p> <p>グループ編成は、学生間のコミュニケーションがとれるように配慮して教科担当者が決める。</p> <p>グループで、調理実習についての役割分担や必要な材料などの準備等を、各班で話し合う時間を設ける。</p>
6～14回	<ul style="list-style-type: none"> ・献立から調理実習へ 	<p>「聞く」「行動する」「話す」作業が中心</p> <p>始まりの5分 教科担当者 本日の目標を学生に答えさせて、全員が目標を確認する。</p> <p>各班の栄養士役は、調理が円滑に進むように指示をする。</p> <p>栄養士役は、デモンストレーションに必要な事項を実習が始まるまでに板書する。教科担当者は実習の配時を板書</p> <p>栄養士役は(学生1回は体験)、出来上がった料理を活用して、栄養教育をする。</p> <p>実習後1週間以内に栄養士役は、レポートを作成(献立、盛り付け図、班員に試食後の評価、1人前の価格など)実習時に、観察しながら記録し、記録を基にレポートを作成する</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・ふりかえり 	<p>第1～14回目までに、配布したプリントを持ち込み、食事計画に必要な知識や技術が修得できているかの確認試験を行う。</p>

【成果と評価】

学生の授業評価アンケートは、設問が「Ⅰ」授業の計画について3項目、「Ⅱ」授業の内容について3項目「Ⅲ」教員の考え方について5項目「Ⅳ」授業の成果について2項目である。設問は、すべて肯定的な聞き方である。学生の回答は、5段階で評価するようになっている。評価は、5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わないである。科目の平均点は、「Ⅰ」授業の計画について4.68 「Ⅱ」授業の内容4.50 「Ⅲ」教員の数えた4.47 「Ⅳ」授業の成果について4.52であった。設問13項目の質問に対して、「そう思わない」「強くそう思わない」と否定的な回答をした学生がなく、「強くそう思う」「そう思う」と合わせて肯定的な回答が92%～98%であったことから、概ね学生の評価はよ

かったと考えられる。「IV」授業の成果の設問において、この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についたと「強く思う」58%「思う」38%「どちらともいえない」4%であったことから、この実習の能動的学習を促す取り組みは、一応の成果がみられたと考える。

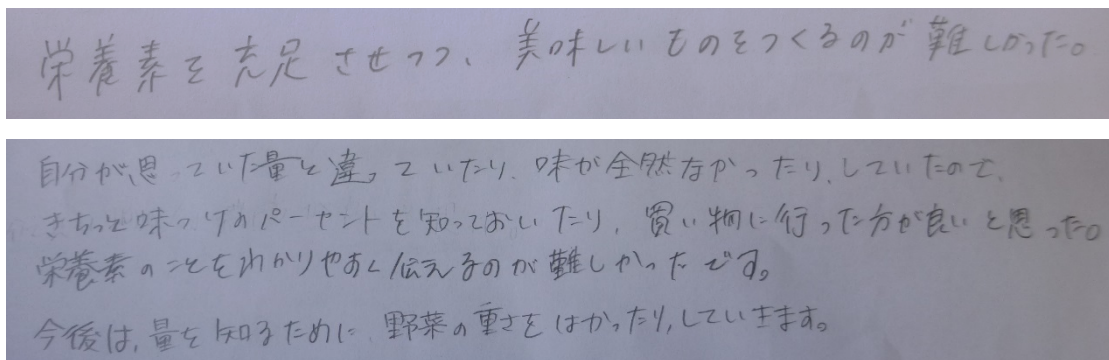
次に、実習終了後に、学生が記述した実習についての感想や問題点など実際の内容の一部を下記に示す。一番多く記述されていたのは、献立作成時に、対象者の目標栄養量に近づけることの難しさだった。また、献立から実際の食事を作ってみると、味(特に塩味)がうすい、料理の量が多い、少ないなど実践することにより、献立作成の難しさが記述されていた。

この実習の到達目標は、各ライフステージ別の栄養管理のあり方を理解し、実践できることである。学生達は、献立作成から栄養教育まで「考えて」「行動して」「話して」の一連の流れを体験することにより、栄養管理の方法を理解することには、成果がみられたのではないかと考える。

しかし、学生が卒業後に、専門職としてすぐに役立つためには、教科担当者としての問題点がある。提出された献立の添削が行き届かない場合がある。例えば、数値の間違い、調味の割合など調理実習日までに、指摘が出来ない場合がある。

今後、学生の主体性を大切し、学生一人一人に適切な教育ができるように努力する必要がある。

学生の感想



【今後の課題と改善計画】

今後の課題

本実習は、学生主体として、能動的学習を取り入れた構成である。それぞれの課題に向けて学生が、自分のペースで取り組むことになる。課題の提出期限を設定しているが、学生の能力や学習意欲が低い学生は、提出期限を守れないことも多々ある。

また、献立作成に関しては、学生自身の現在までの食生活をどのように経験してきているかが、献立作成に影響を与えるなどの問題点もある。

今後、課題については、学生の能力をみきわめながら、実習計画を作成する必要があると考える。

改善計画

- ① 学生が献立作成に取り組むやすいように、“献立作成のコツ”“料理のコツ”などのマニュアルを作成し、活用を促す。
- ② 先輩たちが、実習に取り組んでいる様子を映像で伝える。
- ③ 学生主体の実習であるが、学生の学習意欲を高める動機づけを工夫する。

今後、学生の一人一人を観察しながら、指導が必要な場面で支援をし、充実した実習内容になるように努めたい。

【文献】

- 1) 赤堀 勝彦:学生参加型授業の実践報告 2015年 教育開発センタージャーナル第6号 神戸学院大学
- 2) 平成27年度 福島大学FD活動報告書 大学教育改善の追求 2016年3月 福島大学教育委員会
- 3) 村上凡子 本学におけるアクティブラーニングとは 2016年6月13日和歌山信愛女子短期大学FD研修会資料

保育内容（環境）の指導法の授業における、 体験型学習の取り組みと効果

芝田史仁・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

保育内容演習（自然）

【授業概要】

幼稚園教育要領・保育所保育指針にある領域「環境」の観点を、子どもと自然との関わりを深める保育という視点から捉えなおす。和歌山の豊かな自然を利用し、観察、飼育・栽培活動、保育実践、グループ討議等を通じて、子どもが自然と関わることの意義を理解する。

【科目の到達目標】

身近な動植物に関する基礎知識を有し、好奇心を持って探求する態度を身につけることを目指す。そして、自然と関わる保育教材を分析・開発し、適当な保育内容を構想・展開できる力を身につけることを最終目標とする。

【実践した内容】

幼稚園教育要領における領域「環境」のねらいには、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」とある（文部科学省 2017）。そのため、保育者は、幼児がこれらの環境に関わり、豊かな体験ができるよう、意図的、計画的に環境を構成することが大切であり、幼児の身の回りの環境がもつ特性や特質について日頃から研究し、その教育的価値について理解し、実際の指導場面で必要に応じて活用できるようにしておくことが大切であるとされる（幼稚園教育要領解説：文部科学省 2018）。さらに、幼稚園教育要領解説では、保育の展開において、環境と関わる教師の姿勢の重要性が指摘されている。「教師は自分自身の自然や生命への関わり方が幼児に大きな影響を及ぼすことを認識する必要がある。」という。近年、テレビゲームの普及や空き地などの遊び場の減少、少子化などのため、外で遊ぶ子どもの数が減少している。そのため、「家庭などで自然とあまり触れたことのない幼児は、教師などの触れ方や世話の仕方から学んでいき、自然に触れて遊んだり、生活の中で必要感をもって身近な植物や飼育動物の世話をしたりするようになる。教師が生命を大切にしている関わり方をすれば、幼児もそのような関わり方を身に付けていくだろう。」としている。

このように、子どもの自然とかかわる力を育むには、保育者自身の環境とかかわる力の確立が不可欠である。しかし、保育者を志望する学生でさえ、十分な自然体験がなく、自然に関する基礎知識が脆弱かつ興味・関心が希薄なものが多々見られるのが現状である（細井ほか 2007、高木ほか）。そのため、保育者養成校では、野外活動や飼育・栽培活動など、自然体験を積極的に授業に取り込むことが求められている（大橋ほか 2008、片山ほか 2009、栗原・野尻 2008、高野ほか 2011、杉浦 2009、田尻・林 2004、）。

筆者が和歌山信愛女子短期大学保育科で担当する科目「保育内容演習（環境）」では、学生の自然とかかわる力の涵養を目指し、積極的に自然体験を授業に取り入れている。本報告では、今年度において実施した草花遊びやネイチャーゲーム、植物栽培や動物飼育活動などの自然体験活動の効果を、授業終了時に行ったアンケート調査の結果をもとに評価・検証する。

【成果と評価】

まず、講義を含め、実践した内容は以下の通りである。

- ・タケノコ掘り
- ・草花遊び
- ・ネイチャーゲーム
- ・危険な生物とその対処法（講義）
- ・カイワレダイコンの栽培
- ・動物の飼育

全授業終了後に受講した保育科2年生103名に対して行ったアンケート調査を行った。83名から回答が得られ、アンケートの回収率は80.6%であった。

まず、「授業で実践した自然体験や内容で、初めて経験したり、学んだ内容はどれですか？」の問いでは、回答が多かった項目の順に、①カイワレダイコンの栽培（68.7%）とタケノコ掘り（68.7%）、③危険な生物とその対処法（講義）（54.2%）、④ネイチャーゲーム（51.8%）、⑤草花遊び（25.3%）、⑥動物の飼育（18.1%）となった。特に、危険な生物に関する講義では、半数以上の学生が初めて学んだと答えており、自然に関する基礎的な知識の欠如が裏付けられる結果となった。

次に、「学んだり、体験した事が将来の保育者として役立つと思う内容はどれでしたか？」という問いでは、①動物の飼育（79.5%）、②草花遊び（78.3%）、③危険な生物とその対処法（講義）（73.5%）、④ネイチャーゲーム（69.9%）、⑤カイワレダイコンの栽培（47.0%）、⑥タケノコ掘り（24.1%）という順で回答が多い結果となった。これから、動植物に直接かかわる体験や動植物にかんする基礎知識の習得に対して学生のニーズが高いことが読み取れる。

一方、「そして、その活動を通してどのような知識・技能・態度の向上が図れましたか？」という質問に対して、①子どもの安全を守る能力（49.4%）、②自然と触れ合う子どもに共感する態度（48.2%）、③動植物への興味・関心（41%）、④自然を対象とした保育への理解（38.6%）、⑤自然との関わりを深める保育構想力（26.5%）、⑥子どもへの指導力（20.5%）という結果が得られた。この結果は、本演習を通して学生が、自然に対する感性や興味・関心、基礎的な知識の向上を実感出来ていることを示しており、「自然とかかわる力の涵養」という目標を概ね達成できたと評価できる。

【今後の課題と改善計画】

本演習で導入した自然と直接触れあう体験型学習は、学生のニーズに加え、学生自身が自然とかかわる力の向上に効果的であることがわかった。その一方、保育構想力や指導力の向上という点では、効果を実感している学生が少なく、課題を残す結果となった。今後は、模擬保育や保育内容の研究など、保育力向上に向けた内容を積極的に授業に取り入れていきたいと考える。

【参考文献】

- 大橋伸次・後藤範子・遠藤弘子. 2008. 保育者養成教育における感性と自然体験. 国際学院埼玉短期大学研究紀要 Vol129 : 17-20.
- 片山由美. 川井薫栄・高橋美知子・古橋エツ子. 幼稚園教育における5領域の総合的な指導への一考察-動物の世話 をととして-. 花園大学社会福祉学部研究紀要第17号 : 13-21.
- 栗原泰子・野尻裕子. 2008. 保育者養成学生の動物との関わりについて-動物への対応と幼児への援助について-. 川村学園女子大学研究紀要第19巻第2号 : 27-38.
- 杉浦広幸. 2009. 保育者養成教育での園芸・農業の授業への学生の取り組みと評価. 園芸学研究8(2) : 243-247.
- 高木義栄・木下智章・林幸治. 2016. 保育者志望学生の生物形態認識への過去の自然体験の影響. 近畿大学九州短期大学研究紀要(46) : 15-30.
- 高野牧子・打越みゆき・山田英美. 2011. 保育者養成における野外教育. 山梨県立大学人間福祉学部紀要. Vol. 6 : 15-20.
- 細井香・内海崎貴子・野尻裕子・栗原泰子. 2007. 保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について. 川村学園女子大学研究紀要第18巻第2号 : 121-132.
- 文部科学省. 2017. 幼稚園教育要領. 19頁.
- 文部科学省. 2018. 幼稚園教育要領解説. 257頁.

実践力を養う授業における 体験型学習の取り組みについて

土井有美子・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

給食管理実習 I

【授業概要】

給食管理実習Ⅱの運営における給食計画と、それに伴う準備を行う。少人数グループでの立案に基づき、郷土食や地域の特産物や行事食等を取り入れた献立作成・衛生管理・評価検討を行う。喫食者への栄養教育の方法を学ぶ。

【科目の到達目標】

給食管理で学習した内容を基礎に、食事計画や調理を含めた給食サービス提供の関する技術や知識を養い、給食運営の実践力の基礎を身につける。

【実践した内容】

大量調理とは、給食システムのなかで行われる調理であり、家庭での少量調理や飲食店での調理とは大きく異なる。給食管理実習Ⅰでは、大量調理を実施するための必要な給食計画を策定することを主たる授業内容としている。

大量調理として検討しなければならない項目として、

1. 給与栄養目標量がおよび栄養素等の比率配分を満たしている。
2. 季節感があり、質・量ともに満足できるものである。
3. 衛生的な作業工程が確保されているか、すなわち掛けもち作業せずに調理を遂行できるか。
4. 調理操作に要する時間が適正であるか
5. 給食費が適正価格であるか。等々

安全で安心な給食を提供するために、自らが十分な検討を行わなければならない。

少量を手際よく調理する基礎技術のうえに、大量調理の技能を習得することが基本である。しかし、昨今の学生は調理経験が不十分なうえ、自身が持ち合わせている料理のレパートリーが少なくかつ偏っている¹⁾。

一人ひとりが献立テーマや大量調理の条件に適合した予定献立を作成するが、学生から「献立作成は苦手である」とよく耳にする。このことは、学生の現状から考えると、料理を組み合わせるといふ献立作成を非常に難しいものと受け取ってしまっている一因であると考えられる。そこで、レパートリーを増やす手段として、調理実習では料理に使用した食材や、同様の調理法を用いた料理とともに1人当たりのエネルギー量を算出することを課題としている。これらは、献立作成において有効に利用できるものと

して、既に導入してきている。

しかし、献立作成にあたっては、調理実習で自ら調べて記載したレシピだけでは対応しきれず、多く場合レシピ本やインターネットによる情報を参考に、しかも家庭料理を参考にして献立作成しているように見受けられる。家庭料理を参考にした場合、大量調理として前述の条件を満たしているか、また前述以外にも、調理工程や味つけ・味の組合せ・料理のできあがり量・献立としての適正量であるかなどを検討しなければならない。自らが得た情報から想像する料理の域を逸脱してしまう場合があるのではないかと考える。

給食管理実習Ⅰ () 番 ()

試作検討用紙

試作日 月 日 ()

献立名

試作食数

食

試作で気がついた点

- ・見た目の分量

・給食用献立として改善を要する点(作り方、味付け、色彩等)

・給食用献立として (適 ・ 否) (どちらかに○をつける。)

・食材に関する変更点

食品名	使用量	改善後の使用量	備考

献立ができあがると、栄養価算出、レシピ作成、授業内で試作を実施するための事前ミーティング（調理工程の説明、使用食器等の説明）をした 写真貼付 一歩ごとに試作を行う。試作終了後には、再びミーティング（でき上がり等について検討）を行うことになる。試作前ミーティングでは自らの献立について調理工程を説明するとともに、試作調理中には調理員役の班員に的確な指示をしなければならない。過去には、自身の作成献立であるにも関わらず、どのようなでき上がりになるのか、調理したことや口にすることがない献立（料理）であったことから積極的に説明できなかった事例があった。このような状況では班員による試作を実施していても、十分な説明や指示ができずに不消化のまま終了してしまっていたのではないかと危惧することがあった。

そこで、まず学生自身の献立を自宅で試作し、給食献立として適正かどうかを検討することにした。少量調理によ

って調理工程を確認するなど、事前に自らが検討する（図1）ことによって、作成した献立が自分のものとして捉えることができるように試みた。

図1

【成果と評価】

15回の授業が終了すると自己評価を実施している。「経験した実習内容を通しての感想や考え」についての自由記述では、献立作成に関して難しいと感じている者が86.4%であった。食事計画を行うにはアセスメントを実施し、それに基づく給与栄養目標量を充足するための献立作成が重要となる。学生は、献立作成において栄養価を目標量に合わせることに重点をおき、できあがりの状態すなわち食品の組合せや見た目の量や食べた時の量、喫食者に受け入れられるものであるかも検討しなければならないことを後回しになっているように見受けられたものの、自身の献立を自らが事前に具現化することによって、学内での試作を行う事前ミーティングでの説明や班員への指示も円滑にできるようになったものと考えられる。このことは、全学的に実施している授業評価のうち「意欲的に取り組んだか」の項目で“強くそう思う”と“そう思う”の割合が86.3%と高い数値を示し（図2）、自らの献立に自信を持って授業に取り組めたことを表していると考えられる。

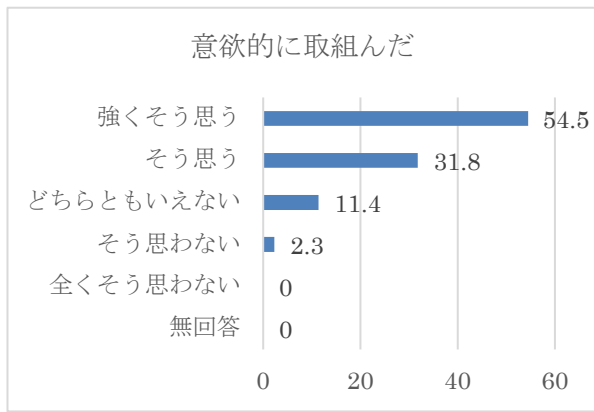


図 2

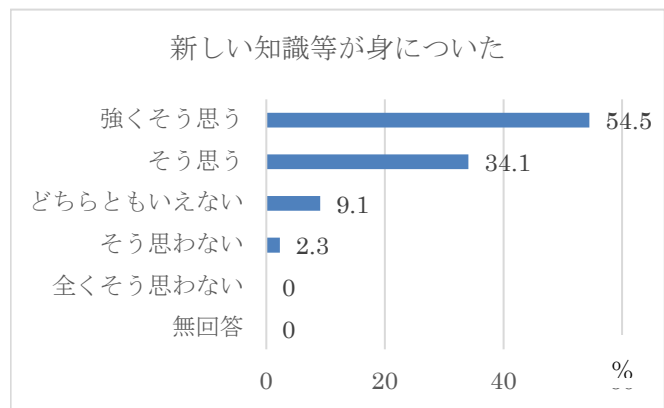


図 3

また、意欲的に取り組んだことで、本授業での学ぶべき事項すなわち給食管理における衛生管理に関することや、機材の使用方法など”新しい知識が身についたか”の項目で、“強くそう思う”と”そう思う”を合わせて88.6%となっており（図3）、ほとんどの者が多少なりとも新しい知識を習得できたものと評価している結果の表れである。

【今後の課題と改善計画】

今後、学内で試作を実施する前に自宅で事前試作することによって、積極的な授業参加と知識の習得を促すことに役立つため、継続して行う必要性を強く感じている。また、給食のサービスと運営を業とする栄養士免許を取得するにあたって、知識の習得だけではなく献立作成をはじめとする給食管理を遂行して行くための実践力を養うことが必要である。実践力は容易に習得できるものではない。折にふれて意識づけを行い、さらに基礎となる調理技術の習得、料理のレパートリーを広げられるよう工夫し、献立作成の苦手意識を払拭できるよう指導することにより、より一層円滑に給食管理実習Ⅱに繋げていきたい。

【参考文献】

土井有美子:現代の食事情と食育、信愛紀要第53号

プロジェクター活用による講義速度の向上と 講義内容の定着化について

西出充徳 食物栄養専攻

【科目名】

食品学Ⅱ(各論)

【授業概要】

食生活が多様化した今日、一口に食品といってもその数は非常にたくさんある。本講義では、植物性食品と動物性食品を、それぞれ主要食品ごとにまとめ、その特徴、成分、製造方法、用途、嗜好性等について講義する。さらに、県の特産物も取上げその機能性についても理解を深める。

【科目の到達目標】

- (1) 各種食品の種類・特徴・成分・製造方法・用途・嗜好性等を理解することができる。
- (2) 食を取り巻く行政の動向に対して理解し、省令等に準じた食品の取扱が理解できる。
- (3) 栄養士実力試験、及び管理栄養士国家試験の出題傾向を踏まえながら学ぶことができる。

【実践した内容】

栄養士養成に関する専門教科である食品学Ⅱ(各論)では、種々の食材や加工食品などにおいて品種間の成分や形状の違い、類似性、機能性などの他に取扱い方法についても理解が必要とされる。そして、講義15回で対象となるそれらの食品を理解するには講義の効率化が必要となる。そのため、それらを講義するにあたっては、より具体的な説明を用いて学ばせることが効果的である。前年度の取組では、ここ数年の学生授業アンケート結果が理解度という点で右下がりの傾向が見られた。そこで板書による講義形式からプロジェクターの活用による可視化した講義方式の割合を高めて理解を向上させる取組を行った。しかし、残念ながら結果的にはプロジェクター中心の講義形式により、懸念されていたリテラシーの低下が見られたこととなった。また、板書による講義からプロジェクターでの割合を増やすことに対しては、リテラシーの低下を招かぬ対策として講義参加者のほぼ全員に対して質疑を行い、回答させる取組を行った。このことは、期末試験評価重視型の軽減を図るため小テストを授業終了時に実践することにより、授業内容の理解と知識の定着、さらに毎回の授業への取組が成績に反映されるように図った。

【成果と評価】

今回の取組の結果は、学生側の評価として「授業の計画」、「授業の内容」、「教員の教え方」、「授業内容」について授業評価アンケートを基に分析した。また、授業成果としては、「学生の理解度」を小テストや期末試験の成績結果を基に授業成果として判断した。その結果、学生側からの評価としては、「授業の計画」、「授業の内容」、「教員の教え方」、「授業内容」について、全体平均を上回る様なプラス結果が得られたが、その一方で授

業成果である「学生の理解度」の面では、理解する学生と理解不足の学生の差が約半数ずつに二極化する結果となった。つまり、多くの食品の種類について個々に理解しなければならないこの授業では、パワーポイントによる講義スピードの効率化により多くの食品を視覚的に理解できていると錯覚する学生が多くいることが考えられた。さらに、小テストだけでは講義内容の知識の定着は難しいことも示唆された。講義内容のまとめや復習、重要事項の知識定着に関する小テストの実施についても講義のスピード化により、小テストの内容が厚みを帯びたものに変化しつつある。その結果、小テストに対応できない学生が以前より増えることとなり、学習成果(小テスト)の低下を防ぐための重複した説明や約 10 分で執り行う予定時間についても延長せざるを得ないこととなった。

【今後の課題と改善計画】

今回のプロジェクター活用による講義速度の進展と授業内容の定着化への取組結果から察せられたことは、授業内容の定着化を重視する条件下では、プロジェクター活用の講義速度の向上を行った場合、理解や知識定着という項目に対してはクラスが二極化する結果となり、講義速度の向上とは相反する現象が起きた。このような現象が起きた背景には、本学入試制度において理系科目の基礎学力を確認する試験項目が無い事や各出身校で選択する理系選択科目の到達度の違いにより問題が生じていることが背景と考えられる。これらの理系選択科目の違いによる個人差についての問題は、もちろん今回取り上げる事ではなく、対処の取組としても既に「基礎演習」という授業によってリカバリーを行っている。そこでもう一つ懸念されることは、授業をプロジェクターの使用により TV の様に視覚化しても学生達には読みづらい教育媒体になっている可能性がある。さらに授業回数 14 回で 100 分となると理解しづらい TV 番組を見る様な状態にあるかもしれない。学生達の活用する身近な教育媒体は、スマートフォンである。スマートフォンの活用技術については、学生の能力は非常に高く教育媒体として利用の価値があると期待できる。また、スマートフォンから得られる情報の理解も早い。授業で使用するプロジェクターによる媒体も、スマートフォンで送り出される認識しやすいアプリケーションフォームを活用すれば、学生達の理解力や授業進行速度の向上にも繋がる可能性が示唆されたので次期の授業改善計画とする。

試験対策を通じた学習意欲向上のための取り組み

野志昌弘・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

「キャリアデザイン」

【授業概要】

栄養士を含め、自分が将来就職する職業について、情報を収集し、理解を深めます。自分の将来像を主体的に構想し、設計して、その将来像に近づくために必要なスキルを計画的、意欲的に獲得する過程を学びます。自己管理能力や社会的責任を自覚して行動できる地域社会に貢献する職業人を目指します。

【科目の到達目標】

多くの学生が就職する職業である栄養士を題材とします。学外で実施される実習に向けて、栄養士の現場を知り、円滑に業務を遂行するために必要な社会通念やコミュニケーションスキルを磨くとともに、栄養士実力認定試験への準備や、栄養士の資質向上の授業を通して、生涯学習力を培うための総合的な学習をします。

【実践した内容】

本授業は、前期では夏季の学外実習、後期では年末に実施される栄養士実力認定試験への対策内容を主として、複数回の講義を食物栄養専攻の専任教員が分担して行うものであった。今回は、後期に開講された「栄養学概論」分野の試験対策を主に担当した。

講義は、栄養士実力認定試験の過去問題から頻出ポイントのおさらい、出題傾向の確認などを視聴覚室にてスライドを用いて行った。試験問題は、基本的に5択形式で統一されているため、比較的簡易な問題については学生を指名しての回答、難解な問題であればヒントを提示してからの挙手方式での回答により学生の授業への参加を促した。また、受講生のなかには目標の学習内容レベルに到達できていないが自分では十分な習熟度に達していると感じている者が散見されたため、講義の最後には授業中に出题した問題の一部を改変した確認小テストに取り組むことで、自身の理解度の再確認を促した。同テストの末尾は、次回講義内容の予告やそのなかで重点的に教えてほしい部分および今回の講義に関する自由記述の感想アンケートを設けることで、学生および教員間の意思疎通を助長するツールとしての意味合いも持たせた。さらに、追加課題として、授業内容理解の再確認となる極少量の小テストを配布した。これは、受付期限を次回講義までの任意のタイミングとし、提出された時点で学生の目の前にて採点した。受け取り時には、提出したことを必ず褒めるよう心掛け、また誤答に関してはその場で解説を行った。勉強したいが方法がわからないという学生が幾らか見られたので、参考書やインターネットを利用した具体的な勉強手段ならびに方法の一例提示も講義内にて行った。

【成果と評価】

本授業は、複数の教員が分担して行ったという特性から、今回の成果と評価に関しては、自身の関係した分野に焦点を絞って述べる。解説を挟みながらモニターを介して5択問題に受講生全体で取り組む様子は、いわばテレビのクイズ番組に参加しているような親しみやすさが授業の敷居を下げる効果を期待して取り入れたが、これは概ね成功であったと言える。普段、自発的に発言しにくいような学生にとっても自らの考えや回答を表現しやすい状況が作り出されており、そのような光景も多々目にすることがあった。また、授業の進行は速くなりがちであったが、これは来年度からの講義様式変更（現：90分×15回 → 新：100分×14回）においては、15回の内容を14回にまとめる必要があるため有利に運用できるケースが多いと推測される。しかし、小テストも兼ねたアンケートでの授業への要望において、少数ながら、もう少しゆっくりして欲しいという意見もあったため、一長一短である。このアンケートに関して付け加えると、次回の学習内容を提示でき、また授業が参加型（回答・発言の機会が多いと予測させる）であることとの相乗効果から予習意欲の向上に効果的であったと見てとれた。また、同アンケートにより難しかったポイントを確認することで、次回の講義の初めにおさらいとして該当箇所の不足を補う際の参考として非常に有用であった。さらに、追加課題に関して述べると、提出時即採点コメントは特に効果的であったように見えた。即座に解答の正誤やコメントが貰えることで、課題内容が友人間での話題にもなり、学習内容の定着にかなりの効果が伺えた。これらの成果は、栄養士実力試験結果に反映されていると考えて良いと思われる。今年度の栄養士実力認定試験結果を見たときに、本学学生の担当分野での平均取得点は全国短大での平均点を上回っていたことから、上述の「科目の到達目標」に関して、一定以上の水準に達したと捉えられる。試験という明確かつ大きな目標と、その到達に向けた毎回の小テスト、これら目標の明確化および課題設定が、今回の成果に繋がる要因であったと考えられる。

【今後の課題と改善計画】

今回の結果より、学生の学習意欲の向上に関して、アンケートを利用した受講生の希望を取り入れる姿勢、追加課題への即対応により学習内容の定着化および友人間での話題化が非常に効果的であると考えられた。来年度からの1回あたりの時間は増大するが講義回数自体は削減される授業様式への変更の際して、授業時間外での学習をいかに効果的に利用できるかが今まで以上に重要な課題となると考えられる。そのため、講義毎に簡易の授業アンケートを実施するなど受講生の声を聞き入れる体制を構築することが一つの改善案として挙げられる。また、近年の情報化社会に伴うインターネットの普及により、受講生らの大半は自らの欲しい情報を容易に獲得しやすい環境下にいるにもかかわらず、そのような技術を学習に積極的に取り入れる姿勢には欠けているように見受けられた。すなわち、教科書や配布プリントでの勉強に執心しており、他の学習方法を利用出来ていないのではないかという事である。例えば、インターネットは、利用するうえではリテラシーが重要となってくるものの、大量の情報が容易に取得できるため、上手に活用することが出来れば学習効率は大幅に向上すると考えられる。また、本専攻の学習内容の特性より、毎日の食事の用意や健康習慣への気遣いなどには、学習内容と実生活を結びつける生きた学びの場面无数に存在する。参考書の丸暗記に効果が無いとは思わないが、得た知識を活用できなければその意味は希薄なものであると言わざるを得ず、試験対策により獲得したそれらを実生活に関連付けて活用できるような誘導が、学習する意味合いへの気づきならびに自発的学びの糸口となると考える。すなわち、目標及び課題の明確化に加えて、試験が単なる能力の数値化のために行われているのではなく、その過程で得られた知識経験が自らの人生の糧となるように導く事が課題となるであろう。

卒業研究における取組について

堀江大輔・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

卒業研究

【授業概要】

基礎教養科目群と専門教育科目群で学んだことを活かし、地（知）の拠点事業の実践的教育プログラムを取り入れ、COC活動からテーマを選び、調査研究を行います。そして研究の方法や、得られた結果についての見方、それらをまとめる能力を学ぶと同時に、栄養士としての実務能力を養います。

【科目の到達目標】

決められたテーマについて学び、その内容と考察の結果得られたことを卒業論文にまとめる研究過程で、栄養士のように組織的に仕事を進めるための実務能力の研鑽に励むことを目標とし、実際に論文を作成してそれを実現します。

【実践した内容】

食物栄養専攻2年生を対象にした授業「卒業研究」において、7つある食物栄養専攻のゼミの中の1つを担当し、下記の内容を実践した。ゼミ生となる者は、受講生50名の中で「健康」というテーマを選択した者のうち、割り振られた7名であった。

本ゼミでは初めに、予算や昨年度までの卒業研究についてを簡単に説明し、学生にテーマを考えさせ、実行可能かどうかについてはこちらから助言を加えながら話し合いを行った。話し合いの結果、「食物繊維を多く含むとされるチアシードの便秘に対する影響を青汁と比較する」というテーマを設定し、学生自身を対象として調査していくこととした。

具体的な調査としては、サンプルを摂取しない2週間の予備調査期間と、サンプルであるチアシードと青汁について、それぞれ摂取する期間を2週間ずつ設け、その期間の食事内容と便の回数・性状を記録した。この調査を進めると同時に、学生は授業の中で便秘や、チアシードなどについての情報を収集した。さらに結果の予測やチアシードを用いた料理の試作を行うなどして、チアシードに対する知識を深めた。

2週間ずつ計6週間の調査を終え、学生はその結果を基に卒業論文を作成した。作成の際は、はじめ学生中心に話を進めていたが、学生間で積極性に差が見られたので、様子を見ながら積極性の見られない者には役割を指示していった。最後の回には、学生が作った文章をプロジェクトで映し出し、こちらで加筆訂正が必要な箇所を直しながら文章をまとめていく形式をとってまとめた。

【成果と評価】

調査期間は2週間で3回という長期で、被験者にも負担のある実験となったが、自分たちの話し合いで

テーマが決定したこともあり、脱落する被験者はいなかった。学生同士、脱落でお互いに迷惑をかけられないという意識も働いたのだと思われる。食事記録に対する不満も一部にあったが、研究に必要な点であることなどを説明することで実験を遂行できたことは評価できる点であると考えられる。

しかしながら、実験に対して取り組みを見せた学生であったが、基本情報の収集などへの興味・関心が続かなかった。一度テーマを決めて進めていき、更なる情報を求める意識は少なかった。こうした意識を育てる工夫が必要である。また、学生の個人情報であることを配慮し、結果の集計は教員側でほとんどやってしまったことも、学生の積極的な参加に影響する要因の一つであったとも考えられた。

また、最後の回でプロジェクタで移しながら、考えを聞いていく方法は、全体に対して問いかけるとたいてい回答者が決まってしまうていた。回答の少ない者に対しては、こちらから積極的に指名していくことで解答する回数を増やし、積極的に考える機会を増やすことはできたので、グループで文章をまとめる際の手段の一つとして有効であると考えられた。

【今後の課題と改善計画】

今後の課題として、学生自身の手でより幅広く情報を求める姿勢を作っていくことが必要である。テーマ設定を先に行い、学生がすでに持っている知識から考える事を始めたことは、自分で情報を集めて考える機会を減らしてしまい、その習慣をもつことが先にできなかったこともその理由であると考えられる。テーマ設定の際には、学生が調べた内容をもとにすすめていくことが、よりテーマに興味を持つためにも望ましい。来年度は授業時間が100分14回となるが、テーマに関する内容の学習に時間を割ける様な計画をたてたい。

具体的にはテーマ設定の中で、十分な学習に取り組めるようにするため、テーマを設定する際に、パワーポイントなどを活用する方法も視野に入れたい。2-3名ごとに分け、パワーポイントでそれぞれが考えたテーマと予想される結果や考察を説明する5分程度プレゼンをする。これによって特に最初の意識も高い間に、人に伝えるために何が必要かを考える機会を設け、その上で卒業論文をどのようにまとめるかを考え、自ら学習していく姿勢・態度を身につけられたらと考えている。

【参考文献】

SYLLABUS 平成30年度 講義概要 2年用, 和歌山信愛女子短期大学